

厳選自己啓発ことわざ集

1

名言思想学会
無断転載・複製を禁止します

1. 愛多ければ憎しみ至る（あいおおければにくしみいたる）
人からかわいがられることが多ければ、必ず他の人から憎まれるようになる。
特別な寵愛は身の破綻を招くことになるから注意しなければならないということ。
2. 愛してその悪を知る（あいしてそのあくをしる）
いくら愛しても、その人の悪い点をよく知る。他人の長所・短所も冷静によく認めるべきである、という意味。
3. 愛してその醜を忘る（あいしてそのしゅうをわする）
本当に愛してしまうと、相手のすべてがよくなって、悪いところがわからなくなるということ。
4. 開いた口へ牡丹餅（あいたくちへぼたもち）
運のよいときは、努力をしなくとも幸運が向こうからやってくるものであるということ。
5. 相手変われど主変わらず（あいてかわれどぬしかわらず）
相手は次々と変わっても、それに対するこちらはいつも変わらず、同じことを何度も繰り返していること。
6. 相手のない喧嘩はできぬ（あいてのないけんかはできぬ）
相手がなければ喧嘩はできない。それゆえどんなに喧嘩をしかけてきても相手にならないのが賢明である。
7. 逢い戻りは鴨の味（あいもどりはかものあじ）
一度仲たがいった男女の仲がもとに戻ると、前にもましてむつまじくなるという意味。
8. 会うは別れの始め（あうはわかれのはじめ）
始めがあれば終わりがあるのと同じように、会えば必ず別れがある。
9. 阿吽の呼吸（あうんのこきゅう）
二人以上が一緒に何かをする時、互いの気持ちがぴったり合うこと。
10. 会えば五厘の損がいく（あえばごりんのそんがいく）
人と交際すれば、とかく何かと出費があつて損をするとの意。

11.青い鳥（あおいとり）

幸福はあこがれるような遠い所にあるのではなく、気付かない身近なところにある、という意味。

12.青は藍より出でて藍よりも青し（あおはあいよりいでてあいよりもあおし）

教えを受けた弟子が先生よりも優れた人になるたとえ。

13.明るけりや月夜だと思ふ（あかるけりやつきよだとおもう）

明るいことにもいろいろの原因があるのに、それを明るい夜はすべて月夜だと思ふのは馬鹿の一つ覚えだ。考えが浅く、世間を知らぬことのたとえ。

14.空き樽は音が高い（あきだるはおとがたかい）

よくしゃべる人には考えの浅い人が多い、というたとえ。

15.商い三年（あきないさんねん）

商売を始めても三年たたなければ利益を得るまでに到らない。何事でも三年間の辛抱が肝要であるたとえ。

16.商い上手の仕入下手（あきないじょうずのしいれべた）

客のあつかいが上手でよく売れるけど、仕入が下手では利益があがらないこと。また、人間には向き不向きがあつてなんでもできるというものではない、という意味もある。

17.商いは牛の涎（あきないはうしのよだれ）

一時に大もうけしようとせず、細く長く、わずかな利益を積み重ねて財をなすべきだ、という意味。

18.商いは門門（あきないはかどかど）

商売は、客を見て、それぞれの客に応じた品物を売るのがコツである。また、専門の店で買うのが安全であるという意味もある。

19.商いは草の種（あきないはくさのたね）

商売には種類が多いことのたとえ。

20.商いは本にあり（あきないはもとにあり）

商売が成功するかしないかは、投下された資本の大小による。大資本の威力にはかなわないう意味。

21.秋の空は七度半変わる（あきのそらはななたびはんかわる）

秋の空は変わりやすいことから、心の変わりやすいことにたとえる。

22.秋葉山から火事（あきばさんからかじ）

他を戒めているうちにおひざもとであやまちを犯すことをいう。

23.商人に系図なし（あきんどにけいずなし）

商人の成功は努力や実力によるものであり、家柄などは必要ない。

24.商人の元値（あきんどのもとね）

商人が客に物をすすめるとき、元値を切って勉強しておきますなどと言って売りつけるが、実際にはもうけて売る。商人のいう元値はどこまで本当かわからないこと。

25.商人は損していつか倉が建つ（あきんどはそんしていつかくらがたつ）

商人はいつも損している損していると言いながら、いつのまにか倉を建てる。もうけている事を皮肉に言った言葉。

26.悪縁契り深し（あくえんちぎりふかし）

よくない縁ほど断ちきりにくいということ。悪縁はくされ縁。悪友は離れにくいように、悪の道の縁は絶ちにくい。

27.悪妻は百年の不作（あくさいはひやくねんのふさく）

悪い妻を持つと、自分の一生だけでなく子孫にまで悪い結果をもたらす、という意味。

28.悪事千里を走る（あくじせんりをはしる）

人の善行は容易に世に知れないが、悪い行いやよくない評判は、いくら隠してもすぐ遠くまで知れ渡る。

29.悪事身にかえる（あくじみにかえる）

自分のおかした悪事は、結局は自分に戻ってきて、自分が苦しむものになる。

30.悪女の賢者ぶり（あくじょのけんじゃぶり）

心のよくない女が、表面的には賢女や貞女をよそおってふるまっている。世の中には案外このような人が多い。

31.悪銭身につかず（あくせんみにつかず）

不正な手段で得た金は、つまらないことに使ってしまうからすぐなくなる。

32.悪の裏は善（あくのうらはぜん）

善と悪とは裏と表で、悪いことの後には善いことがある。悪いことばかりつづくものではない。

33.悪は一旦なり（あくはいったんなり）

悪や不正は一時は勢いを得て盛大になることがあっても、結局は正義には勝てない、永続きはしない。

34.明けた日は暮れる（あけたひはくれる）

朝がくれば必ず夜がくる。よい時はいつまでも続かない。盛の次は衰、楽の次は苦であるから、よい時でも自重せよという戒め。

35.阿漕が浦に引く網（あこぎがうらにひくあみ）

かくしごともしたび重なれば知れわたることのたとえ。

36.浅い川も深く渡れ（あさいかわもふかくわたれ）

浅い川だからといって油断すると危ない。浅い川でも深い川と同じように用心して渡らなければならない、という油断を戒めた言葉。

37.朝謡は貧乏の相（あさうたいはびんぼうのそう）

朝から謡などをうたって遊んでいるようでは、貧乏になるという戒め。

38.朝駈けの駄賃（あさがけのだちん）

朝のうちは馬は元気がよく荷物を少し多くしても苦しめないことから、朝は物事がたやすくできる。また午前中は能率があがることのたとえ。

39.浅瀬に仇浪（あさせにあだなみ）

川の浅瀬には波が立ち、深いところには波が立たない。考えの浅い者ほど、口数多く騒ぎ立てる、という意味。

40.朝題目に宵念仏（あさだいもくによいねんぶつ）

朝は日蓮宗の題目「南無妙法蓮華経」を唱え、夕方は念仏宗の念仏「南無阿弥陀仏」を唱える。ちゃんとした考えをもっていないことのたとえ。

41.朝でたちんばには追いつかぬ（あさでたちんばにはおいつかぬ）

能力は劣っていても、つねに努力を続ければ、能力の優れている者よりも良い成績をあげられる、という意味。

42.朝寝坊の宵っ張り（あさねぼうのよいっぱり）

朝寝坊をする人は、夜になると目がさえて眠れない。宵っ張りが朝寝坊になる、という意味。

43.麻の中の蓬（あさのなかのよもぎ）

善良な友人と交われば、その感化で自然に善人になる、という意味。

44.朝の一時は晩の二時に当たる（あさのひとときはばんのふたときにあたる）

朝は仕事がかどるので、朝の一時間は夜業の二時間に当たる。夜なべの倍の仕事ができる。

45.朝跳ねの夕びっこ（あさはねのゆうびっこ）

朝のうち元気にまかせてはねまわっていると、夕方には疲れてびっこを引くようになる。仕事の経験のない者ははじめのうちは力にまかせてするので、しまいには疲れて終わりまでやり通せないこと。

46.薊の花も一盛り（あざみのはなもひとさかり）

容ぼうがよくなくても年ごろになれば魅力がでるもので、人間の運にも必ず盛りがあるものである。

47.足寒うして心を痛む（あしさむうしてしんをいたむ）

わざわいは下の者の不平から起きることのたとえ。現在では、足を冷やすと心臓に悪いという意味に使う。

48.朝に紅顔あって夕べに白骨となる（あしたにこうがんあってゆうべにはっこつとなる）

世の中は無情で、人の生死が予測できないことをいう。朝、元気で若々しい顔をしていた人が夕方には急死して、火葬にされて白骨になってしまうようなことがある。

49.朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり（あしたにみちをきかばゆうべにしすともかなり）

朝、道理を聞いて悟ることができたら、その晩に死んでもかまわない。人の道のいかに尊いかを説いたもの。

50.明日は明日の風が吹く（あしたはあしたのかぜがふく）

明日は、今日の風とは違った明日の風が吹く。明日には明日の運命があるから将来のことは気にしないで、現在を十分楽しむほうがよい、という意味。

51.足下から鳥が立つ（あしもとからとりがたつ）

突然、身近なところに意外な事件が起こるとえ。また、急に思いついたように物事を始めるたとえにもいう。

52.足下を見られる（あしもとをみられる）

弱点を見抜かれてつけ込まれる。弱みをにぎられる。

53.足を知らずして靴を為る（あしをしらずしてくつをつくる）

同じ種類のものは性質も共通する、という意味。

54.明日ありと思う心の仇桜（あすありとおもうこころのあだざくら）

桜は明日もまだ美しく咲いているだろうと安心してしていると、その夜中に強い風が吹いて散ってしまうかもしれない。人生もそれと同じで、明日にはどうなるかわからないから、頼みにしてはいけない、という世の無常を説いた戒め。

55.飛鳥川の淵瀬（あすかがわのふちせ）

世の中や人情が絶えず移り変わって、無情なさまをいう。

56.明日知らぬ身（あすしらぬみ）

明日はどうなるかわからない無情のからだ。

57.明日知らぬ世（あすしらぬよ）

世の中は遠い未来ばかりではなく、すぐ明日のこともどうなるかわからない。世の中の無情をいう語。

58.明日のことは明日案じよ（あすのことはあすあんじよ）

この世の中のことは予想通りにならないのが常であるから、明日のことは今日あれこれと考えるより、明日になってから心配せよ。将来の事を考えるよりは、現在をより充実させることが大切である、という意味。

59.明日の百より今日の五十（あすのひゃくよりきょうのごじゅう）

明日になればくれるという百文の銭より、今日くれる五十文のほうがありがたい。わずかでも、差し迫っている今、もらうほうがよい。また、明日はどうなるか分からないから、わずかでも、今、確実に手に入るほうがよいということ。

60.明日は我が身（あすはわがみ）

他人の苦しみや不幸を見て、自分もいつそのような境遇になるか分からないと思い、身につまされるという気持ちを表わす言葉。

61.与えるは受けるより幸いなり（あたえるはうけるよりさいわいなり）

人から恩恵を受ける境遇にあるよりは、人に恩恵を与えることのできる境遇にいることの方が幸福である。

62.頭隠して尻隠さず（あたまかくしてしりかくさず）

悪事や欠点を、自分では完全に隠したつもりでいても、その一部分が現れているのを知らないでいることをいう。

63.頭剃るより心を剃れ（あたまそるよりこころをそれ）

形式よりも精神が大切だということ。髪を剃り墨染めの衣を着て形ばかり僧侶になっても、心に道心がなくてはなんにもならない。衣を染めるより心を染めよということ。

64.頭でっかち尻つぼみ（あたまでっかちしりつぼみ）

初めは大きいが終わりは小さいこと。初めは威勢がいいが、終わりはだらしなくなること。

65.頭の上の蠅を追え（あたまのうえのはえをおえ）

人のおせっかいを焼くよりまず自分自身の始末をする方が大切であるということ。

66.当たるも八卦当たらぬも八卦（あたるもはっけあたらぬもはっけ）

占いは当たる場合もあるし、当たらない場合もある。その当たり外れを必ずしも気にする必要はない、ということ。ためしに試してみよ、という意にも使われる。

67.徒花に実は成らぬ（あだばなにみはならぬ）

雄花に実は成らない。着実生を欠く計画は成功しない。見掛けがよくても真の値打ちのないものは、立派な成果を上げることはできない、という意味。

68.仇も情けも我が身より出る（あだもなさけもわがみよりでる）

人から憎まれたり愛されたり尊敬されたりするのも、それはすべて自分の心がけや行いから出たもので、みずからが招いたものであるということ。

69.仇を恩にして報ずる（あだをおんにしてほうずる）

うらむべき相手に対して、かえって情をかける。

70.会ったときは笠を脱げ（あつたときはかさをぬげ）

道で知っている人に会ったら、笠を脱いであいさつせよ。うまくつかんだ機会は逃さないようにせよ、という意味。

71.有っても苦勞無くても苦勞（あつてもくろうなくともくろう）

金と子供とはあればあるで苦勞の種であるし無ければ無いでまた苦勞する。

72.暑さ忘れれば陰忘れる（あつさわすればかげわすれる）

暑さが去るとともに、日陰を作ってくれるもののありがたみを忘れる。受けた恩を忘れることは早いものである、という意味。

73.糞に懲りて膾を吹く（あつものにこりてなますをふく）

一度失敗したのに懲りて、用心し過ぎるたとえ。

74.後から剥げる正月言葉（あとからはげるしょうがつことば）

よそ行きのおせじや、うわべだけを飾ったおべっかは、あとからすぐ正体がばれるということ。

75.後の雁が先になる（あとのかりがさきになる）

後から送れてきたものが先のを追い越す。油断すれば後から来るものに追い越される、という意味。また、若い者が先に死ぬことなどについてもいう。

76.後の喧嘩はゆっくりとせよ（あとのけんかはゆっくりとせよ）

こまかいことは後まわしにして、まず大事なことを決めて着手せよ。事前に細事について論議していたのでは事がはこばない。

77.あの声で蜥蜴くろうか時鳥（あのこえでとかげくろうかほととぎす）
人の容貌の美しさや性行などは、見かけによらないものだということ。

78.痘痕も靨（あばたもえくぼ）
相手に惚れこんでしまうと、みにくい痘痕もかわいいえくぼに見えるように、欠点でも美点に見えるものである。

79.あぶない事は怪我のうち（あぶないことはけがのうち）
あぶない事は怪我をするもとの、危険なことには近づかないほうが安全だということ。

80.危ない橋も一度は渡れ（あぶないはしもいちどはわたれ）
何事も安全・慎重なだけではだめである。時には危険を冒すことも必要である。

81.虻蜂取らず（あぶはちとらず）
アブと蜂を同時に捕らえようとして、どちらも取り逃がす、ということから、あまり欲張ると、かえって何一つ得られなくなること。

82.雨だれ石を穿つ（あまだれいしをうがつ）
軒から落ちる雨垂れも、長い間には石に穴をあけることができる。力は足りなくても、根気よくこつこつと何度も繰り返してやれば、最後には成功するということ。

83.雨垂れは三途の川（あまだれはさんずのかわ）
家の軒先から一歩出ればどんな危険が待ち構えているかわからないということ。雨垂れの落ちる軒があこの世とこの世の境だから、家を出たら用心せよとの教え。

84.余り茶に福あり（あまりちゃにふくあり）
人の取り残したものに思わぬ福があるということ。あまり先を争うものではないとの教えの感もある。

85.余り円きはまろび易し（あまりまろきはまろびやすし）
おとなしいのはよいが、あまりおとなしすぎではいけない。少しはきりつとしたところがないと失敗する。

86.雨降って地固まる（あめふってじかたまる）
雨が降ったことによって地盤が締まり、土地が固くなる。ごたごたが起こったことによって、かえってあとが安定した状態となつてうまく行く、という意味。

87.過ちては改むるに憚ることなかれ（あやまちはあらたむるにはばかりことなかれ）
過失を犯したとわかったら、ためらわずにすぐに改めよ、ということ。

88.過ちは好む所にあり（あやまちはこのむところにあり）
人は不得手なことは注意してやるが、好きな事や得意な事は油断し易いので失敗しがちと
いうこと。

89.過ちを改めざるこれを過ちという（あやまちはあらためざるこれをあやまちという）
過失はやむを得ないが、過失を犯しても改めようとしないことこそ、真の過失というもの
である。

90.蟻集まって木揺がす（ありあつまってきゆるがす）
アリのような弱小な虫でも、たくさん集まれば木を動かすようになる。無力な群集でも恐
ろしい。また、無力なアリが集まっても木を揺るがすことはできない。身分不相応な望み
にもたとえる。

91.蟻の穴から堤も崩れる（ありのあなからつつみももれる）
堅固な堤も、蟻のあける小さな穴がもとでこわれる。ほんの小さな欠陥を見逃したために、
取り返しのつかない結果となる。ごくわずかな手ぬかりから大事が起こるとえ。

92.蟻の思いも天に届く（ありのおもいもてんにとどく）
弱小な者でも、一念を貫いて求め続ければ、やがては望みを達成できる、という意味。

93.有る手からこぼれる（あるてからこぼれる）
無い袖は振れないが、持っている手からは自然にこぼれる。金持ちは施す気はなくても、
なにかの恩恵を与えているものだ。おこぼれがあるもの。

94.慌てる蟹は穴に入れぬ（あわてるかにはあなには入れぬ）
あわてると、ふだん慣れていることでも失敗することがある。危急の時ほど落ちつくこと
が肝心だという戒め。

95.慌てる乞食は貰いが少ない（あわてるこじきはもらいがすくない）
あわてるとは失敗のもとである。古くから言いならわされた言葉で、せっかちな人を戒
めるのに用いる。

96.安心立命（あんしんりつめい）

天命にまかせて心を安らかにし、名声や利欲などに心を動かさないこと。

97.案じるより団子汁（あんじるよりだんごじる）

いくら頭をひねったって、どうなるものでもない。くよくよするより団子汁でもすすれという意味。

98.案ずるより生むが易い（あんずるよりうむがやすい）

あれこれと心配するけれども、お産はそれほど難しいものではない。物事はいざ実行してみれば、前もって心配していたよりは、案外たやすくうまくゆくものである、という意味。取り越し苦労の必要はないと慰める時に用いる語。

99.威あって猛からず（いあってたけからず）

威厳はあるが、たけだけしくない。人格者にとって必要な態度を示したものの。

100.いい後は悪い（いいあとはわるい）

よいことのあった後には、悪いことがありがちである。いいことばかりで調子づいている者への戒め。

101.言い勝ち功名（いいがちこうみょう）

しゃべりまくる者が勝つ。黙っていてもよい意見も通らなくなるたとえ。

102.言うは易く行なうは難し（いうはやすくおこなうはかたし）

口で言うだけなら誰でも出来るが、それを実行することはむずかしいものだという意味。

103.烏賊の甲より年の劫（いかのこうよりとしのこう）

イカの甲は役に立たないが、年とった人の経験は大切なものだ。老人の忠言を軽んじてはいけないということ。

104.怒りは敵と思え（いかりはてきとおもえ）

腹を立てることは、必ず他人の怒りや恨みを招くことになる。自分を滅ぼす敵と思って怒りを慎めよという戒め。

105.怒れる拳笑顔に当たらず（いかれるこぶしえがおにあたらず）

怒ってふりあげたげんこつも、笑顔で対応されては打ち下ろせない。

106. 毬栗もうちから破れる（いがぐりもうちからわれる）
時期がくれば毬栗が自然に破れるように、人間も年頃になればひとりでに色気付くということ。
107. 生二両に死五両（いきにりょうにしにごりょう）
生産に二両、葬式に五両の入費がかかることから、この世の中は生まれても死んでも金がかかる、ということのたとえ。
108. 生き身は死に身（いきみはしにみ）
生きている者は、一度は必ず死ぬものである。
109. 意見と餅はつく程練れる（いけんともちはつくほどねれる）
餅はつけばつくほどよく練れるように、人の意見も聞けば聞くほど利するところが多い。
110. 砂長じて巖となる（いさごちょうじていわおとなる）
小さな砂が長い年月のうちに成長して大きな石になる。非常に長く生命を保つ意。また、大きいものも小さなものからはじまったのだから、小事をおろそかにしてはいけないの意にも使われる。
111. 石に立つ矢（いしにたつや）
一念をこめてすれば、どんな困難なことでも必ず成就するというたとえ。
112. 石に蒲団は着せられず（いしにふとんはきせられず）
親が死んでからでは孝行はできないから、生きているうちに大切にしなければならぬ。墓石に蒲団をかけても甲斐がないという意味。
113. 石の上にも三年（いしのうえにもさんねん）
冷たい石の上にも、三年すわり続けければ暖まる、ということから、つらくてもがまんして続けければ必ず成功する。しんぼう強く根気よく勤めることが大切、という意味。
114. 医者の不養生（いしゃのふようじょう）
医者は、人には養生を勧めながら、自分は案外不養生なものである。立派なことを言いながら、実行が伴わないことについていう。

115. 意地張るより頬張れ（いじはるよりほおばれ）

意地を張ると損をすることが多いから、意地など張らずに食べるべきものは食べる。実利を第一にせよという意味。

116. 急がば回れ（いそがばまわれ）

急ぐ時には危険な近道を通るよりも、遠くても安全な道を回るほうが、結局は早く目的地に着く、ということから、物事はあわてずに着実な手段を選んで行わなければいけないという戒めの言葉。

117. 一芸に名あれば世に遊ぶ事なし（いちげいになあればよにあそぶことなし）

一芸に熟達していれば、食いはぐれることはない。

118. 一期一会（いちごいちえ）

茶の湯で、一生に一度の出会いを表わす語で、一生に一度しかめぐり会える機会がないものと心得て、何かとの出会いを大切にすべきである、という戒めの言葉。

119. 一事が成れば万事成る（いちじがなればばんじなる）

よいことにはよいことが重なり続くという意味。

120. 一日の計は朝にあり（いちじつのけいはあしたにあり）

すべて計画や準備は、早く整えるべきであること。一日の計画は朝のうちに定めておくべきである、という意味。

121. 一日再び晨なり難し（いちじつふたたびあしたなりがたし）

一日に二度と朝は来ない、今日は二度とないから、時間を惜しんで勉強せよという戒め。

122. 一度ある事は二度ある（いちどあることはにどある）

何か一つ事件が起こると、また同じような事が続いて起こること。

123. 市に虎あり（いちにとらあり）

事実でないことも、それを言う人が多いと信用するようになるたとえ。虎は山の中にいる猛獣で、町中にはいないものであるが、大勢の人が虎がいると言えば、本当と思うようになる。

124. 一念天に通ず（いちねんてんにつうず）

ぜひとも成し遂げようという堅い決意があれば、その心が天に通じて必ず成就するものである。

125. 一年の計は元旦にあり（いちねんのけいはがんとんにあり）

まず計画を立ててから実行に移すべきことのたとえ。一年の計画は年の始めに立てるべきであるということ。

126. 一の裏は六（いちのうらはろく）

悪いことのあとにはよいことがある、というたとえ。さいころの目の一の裏は六。

127. 一文惜しみの百知らず（いちもんおしみのひやくしらず）

わずか一文の銭を惜しんだために、あとで百文の損を招くことに気付かない愚。目先の損得だけを考えず、将来の利益も考えて大いに使うことを知らなければならない、という意味。

128. 一葉落ちて天下の秋を知る（いちようおちててんかのあきをしる）

小さい前兆を見て、やがて後にくる衰えを察知すること。

129. 一利あれば一害あり（いちりあればいちがいあり）

利の反面には害がある。

130. 一犬虚に吠え万犬これに和す（いっけんきよにほえばんけんこれにわす）

一匹の犬が何かの影を見てほえると、あたりのたくさんの犬が、その声につられてほえたてる、ということから、誰かがいい加減なことを言い出すと、多くの人がよく確かめずにそれを言いふらす、ことをいう。

131. 一災起れば二災起る（いっさいおこればにさいおこる）

一度あるわざわいは二度ある。悪いことは重なるもの。

132. 一寸の光陰軽んずべからず

（いっすんのこういんかるんずべからず）

わずかな時間でも無駄に過ごしてはいけない、という意。

133. 一寸の虫にも五分の魂（いっすんのむしにもごぶのたましい）

どんなに小さく弱い者にも、それ相応の意地がある。どんなに弱そうに見え、また、どんなに身分が低く、しいたげられている者にも、それぞれ意地や根性があるから侮ってはいけない、ということわざ。

134. 一石二鳥（いっせきにちょう）

石を一つ投げて鳥を二羽打ち落とす、ということから、一つのことをすることによって、同時に二つの利益や成果を得ること。

135. 一銭を笑う者は一銭に泣く（いっせんをわらうものはいっせんになく）

わずかな金額だ、とって軽んじる者は、やがてわずかな金額のために泣く思いをする。少額だからといって、その値うちをばかにしてはいけない、という意味。

136. 一張一弛（いっしょういっし）

締めたり緩めたりすること。精神状態を、常に緊張させてばかりいることはよくない、時には緩めることも必要である、という意味。

137. いつまでもあると思うな親と金（いつまでもあるとおもうなおやとかね）

いつまでも親の頼りにしてはいけない。そしてまた、節約を心がけ不時の用意をしておくことが大切であるという戒め。

138. いつも柳の下にどじょうはおらぬ（いつもやなぎのしたにどじょうはおらぬ）

一度そこにいたからといって、いつも同じ柳の木の下にどじょうがいるわけではない。そのことで一度味を占めたからといって、それをすればいつも同じようないいことがあるとは限らない、という意味。

139. 田舎の学問より京の昼寝（いなかがくもんよりきょうのひるね）

田舎にいて学問をしてもたかが知れている、それよりも都会にいて昼寝をする方が深い見識を身に付けることができる、という意味。

140. 犬に論語（いぬにろんご）

ありがたみのわからないこと。わけのわからないものにどんなよい教え、立派な道を説いてもいっこうに感じないこと。

141. 犬は三日飼えば三年恩を忘れぬ（いぬはみっかかえばさんねんおんをわすれぬ）

犬は三日飼っただけでも、三年間その恩を忘れない。まして人は恩知らずであってはいけない、という意味。

142. 犬も歩けば棒に当たる（いぬもあるけばぼうにあたる）

犬もうろつき歩くから、棒で打たれるような目に遭うことになる。じっとしていればよいものを、出しゃばると思いがけない目に遭うという意。後には、出歩いているうちには、思いがけない幸運にぶつかることもある、という意味にも使われる。

143. 犬も朋輩鷹も朋輩（いぬもほうばいたかもほうばい）

同じ主人に仕える以上、身分に違いはあっても、仲良くしていく義務があるということ。会社の同僚などについていう語。

144. 命長ければ恥多し（いのちながければはじおおし）

長生きしすぎると、とかく恥をさらすことが多い。

145. 命長ければ蓬萊を見る（いのちながければほうらいをみる）

長生きをしていればこそ幸運にも巡り合うことができる。

146. 命は法の宝（いのちはほうのたから）

ありがたい仏の教え（法）を聞けるのも、命があればこそ。

147. 井の中の蛙（いのなかのかわず）

知識が狭く偏見にとらわれていて、広い視野に立って物事を判断することができない人を軽蔑して言う言葉。

148. 井の中の蛙大海を知らず（いのなかのかわずたいかいをしらず）

井戸の中に住む蛙は、その井戸のほかに大きい海があることを知らないでいる。自分の周りの、ごく限られた範囲のことしか考えない、見聞の狭いこと。世間知らず。

149. 祈らずとても神や守らん（いのらずとてもかみやまらん）

行いが正しく心が慎み深ければ、自然に神に感応して神の助けを得られる。

150. 祈るより稼げ（いのるよりかせげ）

怠けて働かずに、ただ御利益を祈ったところでだめである。一生懸命に仕事に励んでこそ運が開ける。

151. 茨に棘あり（いばらにとげあり）

美しいものの中には、必ず危険なもの、恐るべきものが隠されていることのたとえ。

152. 茨の中にも三年（いばらのなかにもさんねん）

苦しくてもじっと辛抱していれば、そのうちには必ず目的を達することができる。世の中に楽な商売や仕事はない、どこにも苦勞はつきものである。

153. 今の情は後の仇（いまのなさけはのちのあだ）

安易な同情は、のちになってかえって害になる、という意味。

154. 色は思案の外（いろはしあんのほか）

男女間の愛情に関することは、理屈や常識では推し量れない、という意味。

155. 言わぬ事は聞こえぬ（いわぬことはきこえぬ）

言わなくてもわかっているだろう、と思ってだまっていたのでは人に理解させることはできない。あとで聞かなかつたといわれるとそれまでである。よく話して念をおしておかなければ、あとで争いのもとになる。

156. 言わぬは言うに優る（いわぬはいうにまさる）

口に出して言わないのは、言ってしまうよりも効果がある。また、黙ってはいるが、その表情から、口で説明する以上に気持ちが先方に通じる、という意味にも使う。

157. 殷鑑遠からず（いんかんとおからず）

戒めとする前例が近いところにある。他人の失敗のあとを見て、自分の戒めとする、という意味。

158. 因果応報（いんがおうほう）

よい行為をした人にはよい報い、悪いことをした人には悪い報いがある。もともと、仏教で、過去および前世の因業（いんごう）に応じて果報があるという意。

159. 因果の小車（いんがのおぐるま）

悪行とその報いはとは、回転の早い小さな車のまわるようにめぐってくるものである。因果とは原因と結果。

160. 陰徳あれば陽報あり（いんとくあればようほうあり）

人に知られない善事を行なう人は、必ず明らかなよい報いを受けるものである。

161. 憂いは互いの世に（ういはたがいのよに）

憂いつらいはお互いにみんなこの世にもっている。貧しい者も富める者もみんなそれぞれもっている。自分ひとりだけだと思っはならないということ。

162. 憂いも辛いも喰うの上（ういもつらいもくうのうえ）

苦しい、辛いという不平も、食った上でのことである。衣食住の苦しみに比べれば、食った上での心配や苦労は物のかずではない。

163. 飢えたる犬は棒を恐れず（うえたるいぬはぼうをおそれず）

飢えている犬は人に叩かれることも恐れなくて食物に近づくように、人間も食うためには法をおかすようなこともある。よい政治が必要である、ということ。

164. 上直なれば下安し（うえちよくなればしたやすし）

上に立って政治を行なう者が正しければ、下、人民は安らかである。

165. 魚心あれば水心（うおごころあればみずごころ）

そちらに魚になる心があれば、こちらあなたもあなたが住みたいような水になる心を持ってよい。何事も先方の出方次第で、相手が好意を示してくれば、こちら好意を示そう、という意味。

166. 魚のかかるは甘餌による（うおのかかるはかんじによる）

用心深い動物もうまい餌にだまされて捕らえられる。人間も利欲に目がくらんで失敗するな戒め。

167. 魚の木に登る如し（うおのきにのぼるごとし）

魚が木に登るように、とうてい不可能な無謀な試みをたとえていう。

168. 魚の目に水見えず人の目に空見えず（うおのめにみずみえずひとのめにそらみえず）

水の中で生活している魚は、水というものの存在に気がつかない。それと同じように、人間は空気中で空気を吸って生きているが、空気存在に注意しない。このようになくはならぬものでありながら、あまり近い存在のために目に入らないこと。我が身に関することはかえって気がつかないこと。

169. 魚を争う者は濡る（うおをあらそうものはぬる）

利を得ようとする者は、苦痛をさけることはできない。

170. 魚を得て筥を忘る（うおをえてせんをわする）

「筥」は魚を取る竹製のかごのことで、魚を取ってしまえば、筥のことなどはけろりと忘れてしまう。目的を達してしまえば、それまで手段にしていたものが不要となり、全く顧みられなくなるたとえ。

171. 浮き沈み七度（うきしずみななたび）

一生のうちには浮き沈みは何回もあるもので、人生は不安定なものであること。

172. 浮世の苦楽は壁一重（うきよのくらくはかべひとえ）

人生の苦楽は変転きわまりのないものであるから、悲観も楽観も禁物である。

173. 浮世の潮の満干（うきよのしおのさしひき）

この世の栄枯盛衰・苦楽がいつもはげしく変わっていて、一定しないたとえ。

174. 浮世は廻り持ち（うきよはまわりもち）

人生の苦楽・貧富は人から人へ受け継がれていって、決して一つのところにとどまるものではない。変転するものであること。

175. 宇公の門閭を高大にす（うこうのもんりよをこうだいにす）

陰徳のある者は子孫が栄えるということ。

176. 兎も七日なぶれば噛み付く（うさぎもなぬかなぶればかみつく）

どんなにおとなしいものでも、度々辱められると、ついには怒り出して反抗するものだ。

177. 兎を見て犬を放つ（うさぎをみていぬをはなつ）

ウサギを見つけてから犬を放して追わせても遅くはない。失敗してから気がついてやり直しても、決して遅すぎるということはない。

178. 牛売って牛にならず（うしうってうしにならず）

牛を売った代金で、代わりの牛を買おうとしても金が足りない。だれでも自分の物は高く評価しがちで、売りは安く買いは高く、人にもうけられるだけだ。

179. 牛に対して琴を弾ず（うしにたいしてことをだんず）
いくら説ききかせてもだめなこと。愚かなものに立派なよい道理を説いたところでわからない、無益であること。
180. 牛は牛づれ馬は馬づれ（うしはうしづれうまはうまづれ）
それ相応の似合わしい相手どうしが一緒になるのが一番よい、という意。
181. 牛も千里馬も千里（うしもせんりうまもせんり）
巧いかまずいか、遅いか早いかの違いはあっても、行きつくところは結局同じである。あわてることはないというたとえ。
182. 後に目無し（うしろにめなし）
うしろに目はないから、見えない、知らない。人間に盲点のあることのたとえ。
183. 中に誠あれば外に形る（うちにまことあればそとにあらわる）
誠意があれば、それをことさら示さなくても、自然に外にあらわれるものである。
184. 中の米の飯より隣の麦飯（うちのこめのめしよりとなりのむぎめし）
なんでも他人のものは自分のものよりよく見えて、うらやましがること。
185. 美しい花によい実はならぬ（うつくしいはなによいみはならぬ）
外観だけでよしあしはわからぬ。口先のうまいものには誠意がないものである、という意味。
186. 鶺鴒の真似をする烏水に溺れる（うのまねをするからすみずにおぼれる）
烏は姿や色が鶺鴒に似ているからといって、鶺鴒の真似をして水にもぐって魚などを取ろうとすると溺れてしまう。自分の能力を考えずに人の真似をすると失敗する、という意味。
187. 旨い事は二度考えよ（うまいことはにどかんがえよ）
あまりうまい話には危険がひそんでいるから、すぐ飛びついてはならない。うまい話は慎重によく考えよ。
188. 旨い物は小人数（うまいものはこにんずう）
うまいものは小人数で食べたほうが沢山食べられる。小人数の料理のほうがうまかつくれる。それから、もうかる仕事は小人数でやるほうがよい。

189. 旨い物は宵に食え（うまいものはよいくえ）

よいことは早くしたほうがいいたとえ。うまい物を惜しんで、一晩おくと味が落ちるから、その夜のうちに食べたほうがよいということ。

190. 馬と武士は見かけによらぬ（うまとぶしはみかけによらぬ）

馬も武士も外観のみではわからない。見かけは貧弱でも剣道の達人もあるし俊足の馬もあり、威風堂々としていても剣道が下手、走れない駄馬もいる。

191. 馬には乗ってみよ人には添うてみよ（うまにはのってみよひとにはそうてみよ）

馬には乗ってみないと、人とは親しく交際してみないと、また、夫婦になって共に苦勞してみないと、相手の良否を判断することはできない。そのものの値打ちは、外見や、ちょっとした付き合いだけではわからない、という意味。

192. 馬の耳に念仏（うまのみみにねんぶつ）

馬が念仏などを聞いても、少しもありがたがらないことから、意見などを言っても聞き入れようとせず、無駄であること。

193. 生まれながらの長老なし（うまれながらのちょうろうなし）

生まれた時から学徳の高い高僧や経験をつんだ目上の人はない。賢者や長老になるには長い年月の修業がいることの意。

194. 怨に報ずるに徳を以てす（うらみにほうずるにとくをもつてす）

自分をひどい目に遭わせた者にも、報復をせずに、博愛の心で恩恵を与えてやること。

195. 怨みは大に在らず（うらみはだいにあらず）

人のうらみは、大きな問題だからひどくうらみ、小さい問題だから少いうらむというものではない。思いもかけない小さな事から大きなうらみを買うことがあるから、小さい事にも注意しなければならない。

196. 怨みほど恩を思え（うらみほどおんをおもえ）

うらみを忘れないくらい恩を忘れてはいけない。うらみは忘れないものであるが、恩は忘れやすいものである。

197. 瓜の蔓に茄子はならぬ（うりのつるになすびはならぬ）

平凡な親から非凡な子は生まれない。血統は争えない、という意味。

198. 運根鈍（うんこんどん）

成功の秘訣は、幸運に恵まれること、根気のよいこと、鈍（細かいことにこだわらない、神経の太いこと）であること、の三つである。

199. 腫んだ物は潰せ（うんだものはつぶせ）

腫んだおできは潰して膿を出すとすぐになおる。わざわいのもととは根本から断ち切れという戒め。

200. 雲泥の差（うんでいのさ）

天と地ほどに大きな差があること。

201. 運は天にあり（うんはてんにあり）

各人の運はすべて天命によるもので、いかにあがいてみても人力ではどうすることもできない、という意味。

202. 運は寝て待て（うんはねてまて）

時機がこなければいくら焦っても無駄である。気長に運が向いてくるのを待つのがよい。焦ったり急いだりすると結果はよくない。

203. 運否天賦（うんぷてんぷ）

人の運不運は天が決めるものである。運は天任せ。

204. 運用の妙は一心に存す（うんようのみょうはいっしんにそんす）

法則は活用してこそ価値がある。戦術や規則というものは、それだけを堅く守っても実際の役には立たない。その時に応じて活用する人の心一つである、という意味。

205. 栄華あれば必ず憔悴あり（えいがあればかならずしょうすいあり）

栄えるときがあれば必ず衰えることがある。草木に花が咲いて散り、やがて枯れていくのと同じで、自然の理でありこの世のならいである。

206. 栄華の花（えいがのはな）

華やかに咲き誇る花も、やがて散り落ちてしまう。栄えるものは必ず衰える、というたとえ。

207. 栄枯盛衰（えいこせいすい）

人の一生には盛んな時と衰える時とがあって、草木のあるいは栄えて花が咲き、あるいは枯れてゆくものと同じである。

208. 英雄色を好む（えいゆういろをこのむ）

英雄と呼ばれる人物は、精力が盛んで征服欲もまた旺盛なため、女色を好む傾向が強いものが多い。とはいっても「色を好む者必ずしも英雄ならず」である。

209. 英雄人を欺く（えいゆうひとをあざむく）

英雄は才知にまかせて術策を用いるから、人をあざむくような意外な行動に出ることが多い、ということ。

210. 英雄人を忌む（えいゆうひとをいむ）

英雄は自分よりすぐれている人のいることを嫌うということ。そのために英雄は並び立たないのである。

211. 益者三友（えきしゃさんゆう）

交際して自分の易になる三種の友人。つまり、まっすぐ(正直)な人、誠のある人、多くのことを聞いて知っている知識のある人である。

212. 会者定離（えしゃじょうり）

会った者は、いつかは必ず離れる。この世の無常をいう言葉。

213. えせ者の空笑い（えせもののそらわらい）

おかしくもないのに声を立てて笑うのはいかがわしい者である。むやみに追従笑いをする者は腹黒い者か、軽薄な者。

214. 枝葉のしげりは実少し（えだはのしげりはみすこし）

木に枝や葉があまりしげるものは実が少ない。人もことばの多いものは誠意や実行することが少ない、という意味。

215. 蝦蟇れども川を出でず（えびおどれどもかわをいはず）

エビはどんなにはねても一生川から出られない。物にはそれぞれ天が与えた運命が定まっているということ。

216. 遠水近火を救わず（えんすいきんかをすくわず）

遠いところにいくら沢山水があっても、隣の火事を消すには間に合わないことから、遠いものは急場の役に立たないたとえ。

217. 淵中の魚を知る者は不祥なり（えんちゅうのさかなをしるものはふしょうなり）
秘密を知るとは身のためにならないことがあること。また、政治を行なうのに重箱のすみまでほじくるように、小さなことまで干渉するやり方はよくない、ということのたとえ。

218. 縁と命は繋がれぬ（えんといのちはつなわれぬ）
人の命は一度死ねば生き返らないように、縁もいったん切れると再びつなぐことはできない。縁は大切にせよ、ということ。

219. 縁と浮世は末を待て（えんとうきよはすえをまで）
良縁と好機会とは、時節の来るのを待つべきもので、あせってもだめである、という意味。

220. 縁と月日の末を待て（えんとつきひのすえをまで）
良縁とよい時機（チャンス）とは、自然にやってくるのを待っているのがよい。あせってはいけない、という意味。

221. 縁なき衆生は度し難し（えんなきしゅじょうはどしがたし）
いかに仏でも仏縁のないものは救済しにくいように、人の言うことを聞きいれないものは救いようがない、という意味。

222. 縁は異なるもの（えんはいなもの）
男女の仲は不思議なもので、常識では判断できない微妙な結び付きがあるものだ、という意味。

223. 古い木は曲らぬ（おいきはまがらぬ）
若い木は弾力があって曲げられるが、老木になると曲げると折れてしまう。人も若いうちは性質もくせも直せるが、老人になってからは直らない、ということ。

224. 老いたる馬は道を忘れず（おいたるうまはみちをわすれず）
人生経験豊かな老人は物事の判断を誤らない、ということ。

225. 老いたるを父とせよ（おいたるをちちとせよ）
老人は父のように思って尊敬せよ、ということ。

226. 老いては子に従え（おいてはこにしたがえ）
年取ってからは、出しゃばらずに何事も子に任せて、その意見や方針に従った方がよい、という意味。

227. 老いてはますます壮なるべし（おいてはますますさかんなるべし）
年をとっても元気が衰えず、ますます意気さかんでなければいけない、という意味。困難にあっても志をますます堅くしてくじけてはならない。
228. 王侯将相寧ぞ種あらんや（おうこうしょうそういづくんぞしゅあらんや）
王侯や将軍、大臣となるのは、家柄や血統できまっているのではなく、努力のいかんではだれでもなることができる、という意味。「種あらんや」は特定の家柄に生まれなくてはならないということはない。
229. 負うた子に教えられて浅瀬を渡る（おうたこにおしえられてあさせをわたる）
背におぶった子供に、浅いところを教えてもらって川を渡る。賢い者も老練な者も、時には、愚かな者や未熟な者から教えられることがある、という意味。
230. 負うた子より抱く子（おうたこよりだくこ）
背に負った子のことよりも、目の前に抱いている子のことを先にする。離れている者より、身近の者を先にするのが人情の常である。
231. 逢うた時に笠を脱げ（おうたときにかさをぬげ）
道で知った人に会ったら笠をぬいであいさつをすること。また、すべて機会をはずさないようにせよ。チャンスをのがすな。
232. 往を彰らかにして来を察す（おうをあきらかにしてらいをさつす）
過去のことをよく調べて、未来のことを推測する。過去の由来を明らかにして将来の計画をたてること。
233. 王を擒にせんと思わばその馬を射よ（おうをとりこにせんとおもわばそのうまをいよ）
王様をとりこにしようと思えば、その乗っている馬を射よ。頼みにしているものをまず攻めおとすのが成功の道である。
234. 大嘘は吐くとも小嘘は吐くな（おおうそはつくともこうそはつくな）
大きなうそは人は信用しないから害はないが、ちょっとしたうそは人が信用するから実害があること。

235. 大きい薬罐は沸きが遅い（おおきいやかんはわきがおそい）
小さいヤカンの方が沸きは早い、いったん沸けば大きいヤカンの方が多く役に立つ、ということから、人間も大人物になるのに時間がかかる、という意味。
236. 大きな家には大きな風（おおきないえにはおおきなかせ）
人にはそれぞれ、その境遇に応じた悩みがあること。富者には富者の悩みがある。また、規模が大きければ行なわれる事も大仕掛けであることにも使う。
237. 大木の下に小木育たず（おおきのしたにおぎそだたず）
大きな木の下に陽もささず、栄養を吸い取られては小さな木も育たない。権勢のある者のまわりに集まっている者はその庇護を受け、大人物にはならない。
238. 大勢に手なし（おおぜいにてなし）
大勢を相手にしては手段の施しようがない。大勢のおもむくところには勝つことができない。
239. 大勢の眼鏡はたしか（おおぜいのめがねはたしか）
多数の人の判断はだいたい正確である。
240. 大使いより小使い（おおづかいよりこづかい）
大事よりもむしろ小事に注意せよ。高価なものを一度に買うよりも、こまごました日常の支出の総額が、かえって大きな金額になる。
241. 大掴みより小掴み（おおづかみよりこづかみ）
一度に大もうけしようとしなくて、少しずつコツコツもうけて積み立てる方が堅実で、その方が成功する、という意味。
242. 大鍋の底は撫でて三杯（おおなべのそこはなでてさんばい）
もうないといっても大鍋の底をさらうと三杯もあるように、規模の大きいものは、何から何まで大きいこと。
243. 大船も小さな漏穴から沈む（おおぶねもちいさなろうけつからしずむ）
大きな船も小さな穴から水が入って沈む。小さなことへの注意。
244. 大水に飲み水なし（おおみずにのみみずなし）
人は大勢いても役に立つ人は少ない、という意味。沢山あっても役に立たない。

245. 陸に上がった河童（おかにあがったかっぱ）

河童は陸に上がると無力になるということから、環境が変わって、今までのように得意な能力や技量が発揮できなくなる状態。また、そうなった人。

246. 傍目八目（おかめはちもく）

他人の打っている碁をわきで見ていると、いい悪いが対局者よりよくわかって、八手先まで見通すことが出来ることから、第三者として冷静に観察する方が、物事のよい悪い、損得がはっきりわかる、という意味。

247. 屋烏の愛（おくうのあい）

烏はいやな鳥であるが、愛する人の家の屋根に止まっているのは、かわいくさえ思えることから、愛情があれば、その人に関係するすべてのものに愛情がわくたとえ。

248. 屋漏に愧じず（おくろうにはじず）

人の見ていない所では恥ずかしい行為をしないこと。心を戒めて鬼神のつけいるすきを与えない。

249. 傲に長ずべからず（おごりにちょうずべからず）

おごって人をあなどる心を増長させてはならない、という戒め。

250. 奢は三年の費え（おごりはさんねんのついえ）

ぜいたくによって消費した赤字の金は、三年の間元通りにならないほど大きい。

251. 驕る者は心常に貧し（おごるものはこころつねにまずし）

ぜいたくをする者は、かえって絶えず心に不満が起こり、不足を感じる。

252. 驕る者久しからず（おごるものひさしからず）

得意になって、たかぶっている者は長く栄えず、花がしぼむようにほどなく衰えてしまうこと。

253. 教うるは学ぶの半ば（おしうるはまなぶのなかば）

人に教えることは、半分は自分の勉強になる。人に教えてみると、自分の知識のあいまいなことがはっきりして、自分の勉強の助けとなる。

254. 遅い助けは助けにならぬ（おそいたすけはたすけにならぬ）

時機を失しては援助も効果はない。なんにもならない。

255. 夫よければ妻もよし（おっとよければつまもよし）
夫がよくすれば妻もよくなる。妻がよくすれば夫もよくなる。
256. 男は辞儀にあまれ（おとこはじぎにあまれ）
男は謙遜である方がよい、遠慮しすぎるぐらいでちょうどよい、という意味。
257. 男は度胸女は愛嬌（おとこはどきょうおんなはあいきょう）
男には勇気や決断力が、女には愛嬌が大切である、という意味。
258. 男は妻から（おとこはめから）
男の出世は妻のよしあしによって決まる。また、妻の心がけ次第で男の身持ちもおさまる。男は妻によって人格が完成される。
259. 鬼瓦にも化粧（おにがわらにもけしょう）
醜い姿の者も化粧すればよく見える。または、少しはよく見える。
260. 鬼に金棒（おににかなぼう）
強い鬼が金棒を持ってさらに強くなる、ということから、元来強いものに何か加わって、一段と強化されること。
261. 鬼の目にも涙（おにのめにもなみだ）
どんなに無慈悲冷酷だと思われている人でも、時には温かい人間味を発揮するものだ、ということ。
262. 鬼の目にも見残し（おにのめにもみのこし）
観察の非常に精密な人にも時としては見落としがある。情け容赦もなく過酷なことをする人にも手ぬかりがあること。
263. 鬼も十八番茶も出花（おにもじゅうはちばんちゃもでばな）
番茶でも最初の一、二杯は香りがよいように、鬼のように醜い顔の娘も、年頃になれば女らしい魅力が出るものだ。
264. 鬼も角折る（おにもつのおる）
どんな悪人でも何かの機会に一念発起して、悪事をやめて善事を志すようになることもある。

265. 己達せんと欲して人を達せしむ（おのれたっせんとほっしてひとをたっせしむ）
すぐれた人はよい事を行なうのに、自他の区別をしないこと。自分が成しとげようと思うことを、まず人を助けて先に目的を成しとげさせること。
266. 己の欲せざる所は人に施すこと勿れ（おのれのほっせざるところはひとにほどこすことなかれ）
自分の好まないことは他人も好まないだろうから、他人に対してしむけてはいけない。
267. 己を責めて人を責むるな（おのれをせめてひとをせむるな）
人の落ち度を責めるより、自分を反省せよ。
268. 己を虚しうす（おのれをむなしうす）
私情を捨てる。我意を捨てて謙虚な気持ちでことに当たること。
269. 思いうちにあれば色外に現わる（おもいうちにあればいろそとにあらわる）
強く思っていることがあれば、顔や動作にそれが現れる。気付かれまいと意識すれば色が外に出る、という意味。
270. 思い置きは腹の病（おもいおきははらのやまい）
心配となることや取越し苦労などは消化不良などの病気の原因になるから、早く取り除くほうがよいということ。
271. 思い立ったが吉日（おもいたったがきちじつ）
しようと思いついた日が、それをするのによい日である。暦をめくって縁起のよい日を求めたりせず、すぐに着手するのが一番よい。
272. 思えば思わるる（おもえばおもわるる）
こちらで思っていれば、向こうの方でもまたこちらを思うようになる。好意は好意を呼ぶものである。
273. 表を見て裏を見ず（おもてをみてうらのみず）
物事にはすべて表と裏がある。表だけ見て判断することは軽率で、誤りや失敗を生じるという戒め。

274. 親思う心にまさる親心（おやおもうこころにまさるおやごころ）

子が親を思う心よりも、子を思う親の心は深い。

275. 親が親なら子も子（おやがおやならこもこ）

親子はともによく似るものである。親がだめだと子も同じようにだめであるの意に用いることが多い。

276. 親が死んでも食休み（おやがしんでもしょくやすみ）

食後の休息はどんなときでも必要である。どんなに忙しいときでも休みなしではいけないという戒め。

277. 親孝行と火の用心は灰にならぬ前（おやこうこうとひのようじんははいにならぬまえ）

親への孝行は生きている間に、火の用心は火事にならぬ前にせよ。死と火事はともに灰になる。

278. 親子の仲でも金銭は他人（おやこのなかでもきんせんはたにん）

金銭については、たとえ親子の間でも他人と同様である。

279. 親に似ぬ子は鬼子（おやににぬこはおにご）

親に似ない子は鬼の子だ。そのくらい子は親に似るものだ、という意味。

280. 親に目なし（おやにめなし）

我が子かわいさのあまり、子の欠点や誤りがわからない。何か子供が事件を起こすと「うちの子に限って・・・」が、それである。

281. 親の甘茶が毒になる（おやのあまちゃがどくになる）

子をあまやかして育てるのは、子の将来を毒するものである。

282. 親の意見と茄子の花は千に一つもむだはない（おやのいけんとなすびのはなはせん
にひとつもむだはない）

茄子にはむだ花がなく、花が咲くと必ず実がなるように、親が子にする意見には決してむだがない。

283. 親の因果が子に報いる（おやのいんががこにむくいる）

親の行なった悪い行為の結果が、その子に災いをもたらす。子には何の罪もないのに、親の悪事の犠牲になるのだから、悪事をしないようにとの戒め。

284. 親の恩は子で送る（おやのおんはこでおくる）

親には恩返しできなくても、我が子を立派に育てることによって親に恩返しをすることをいう。

285. 親の心子知らず（おやのこころこしらず）

子のためを思ってあれこれ心を砕く親の気持ちを、肝心の子供は全く分らずに勝手なことをするものだ、という意味。

286. 親の十七子は知らぬ（おやのじゅうしちこはしらぬ）

親の若い頃のことは子は知らないので、適当にうまいことを言っても子供にはわからない、という意味。

287. 親の七光り（おやのななひかり）

親の威光が子に及ぶ意で、本人はそれほど実力がないのに、親が偉いということで世間で重んじられること。

288. 親の欲目（おやのよくめ）

親は自分の子供のことになると愛情に引かれて公平な見方ができなくなり、実際以上にいい評価をしてしまうこと。

289. 親は苦勞、子は樂、孫は乞食（おやはくろう、こはらく、まごはこじき）

親が苦勞して財産をつくり、子は遊んでむだ遣いをし、孫の代は落ちぶれて乞食をするという、世の中の相。

290. 親は千里を行くとも子を忘れず（おやはせんりをゆくともこをわすれず）

親はどんなに遠く子と離れていても、絶えず我が子のことを案じている。不孝の子でも思っている。

291. 親はなくとも子は育つ（おやはなくともこはそだつ）

親は死んでも、残った子はどうにか育っていく。世の中のことはそれほど心配したものではない、という意味。

292. 親馬鹿子馬鹿（おやばかこばか）

親は子の愛におぼれて子の馬鹿なのを知らず、子は親の愛になれて、馬鹿なことをする。第三者から見れば、親も馬鹿なら子も馬鹿である、という意味。

293. お山の大将俺一人（おやまのたいしょうおれひとり）

この小さい山を支配する大将は俺一人だ。小さな集団、またはくだらない仲間の中で偉がって一人いい気になっている人間や、小さな成功で得意になっている人を軽蔑している。

294. 泳ぎ上手は川で死ぬ（およぎじょうずはかわでしぬ）

自分の得意とする才能や技量のために、かえって身を滅ぼすことがある。得意なことについては油断しがちであることをいう。

295. 及ばざるはそしる（およばざるはそしる）

劣っている者は、相手をねたんでよく悪口をいうものである。

296. 愚か者に福あり（おろかものにふくあり）

愚か者は野心を抱かず平凡に暮らすので、人に憎まれたり怨まれたるすることもなく、かえって幸福に一生を送ることができる。

297. 終わりよければ総べてよし（おわりよければすべてよし）

物事は終わり（仕上げ）が肝要で、最後（できばえ）がよければ、途中のぐあいの悪かったことや、苦しかったことなどは消し飛んでしまう。

298. 終わりを慎むこと始めの如くんば敗るる事無し（おわりをつつしむことはじめのごとくんばやぶるることなし）

何事でも事が成就しようとするまぎわに、心がゆるんで失敗するものであるから、終わりまで事を始めたときと同じように、慎重な態度でやれば失敗することはない。

299. 尾を振る犬は叩かれず（おをふるいぬはたたかれず）

従順な者には、誰もひどいことをしない、という意味。

300. 温故知新（おんこちしん）

古いことを調べ尋ねて、そこから新しい見解・知識を得る。古典や伝統の中から、新しい価値や意義を再発見すること。

301. 女三人寄れば姦しい（おんなさんにんよればかましい）
女はとにかくおしゃべりだから、三人も寄り合うと大層やかましい。
302. 女と坊主に余り物がない（おんなとぼうずにあまりものがない）
女と坊主にすたりはない。どんな醜い女でもそれぞれ結婚する、一生独身で捨てておかれるものはない。
303. 女の一念岩をも透す（おんなのいちねんいわをもとおす）
女は弱いようであるが、執念深いもの。
304. 女の心は猫の目（おんなのこころはねこのめ）
女の心は猫の目のようにかわりやすいことのたとえ。
305. 女の知恵は鼻の先（おんなのちえははなのさき）
女の知恵は目先のことばかりにとらわれ、浅はかなことのたとえ。
306. 女は己の悦ぶ者の為に容る（おんなはおのれのよろこぶもののためにかたちづく
る）
女は自分を愛してくれる男のために容姿を整えたり化粧する。
307. 陰陽師の門に蓬絶えず（おんようじのかどによもぎたえず）
日が悪いとか、忌み日だなどと占いごとをかついでいると、門前の草をとることもできない。何も出来なくなるということ。
308. 恩を仇で返す（おんをあだでかえす）
恩を受けておきながら、その相手に感謝するどころか迷惑をかけるようなことをする。
309. 蚊集まりて動すれば雷となる（かあつまりてどうすればらいとなる）
小さな無力なものでも沢山集まって団結すれば、強力なものになることのたとえ。
310. 飼い犬に手を噛まれる（かいいぬにてをかまれる）
目をかけていた部下や世話をしてやった相手に裏切られ、思わぬ害を受けること。
311. 海賊が山賊の罪を上げる（かいぞくがさんぞくのつみをあげる）
自分の悪事、醜行をさしおいて、他人の悪事、醜行をあばきたてること。また同類でも利害関係が深くないものは、互いに仇敵になること。

312. 書いた物が物を言う（かいたものがものをいう）

口約束はその場限りのものであり、書類こそが強力な証拠となる。

313. 隗より始めよ（かいよりはじめよ）

物事を始める時にはまず手近なことから始めるべきだ。また、まず言い出した人間が率先して始めるべきだ。

314. 買うは貰うに勝る（かうはもらうにまさる）

自分で努力して手に入れたほうが、人から恵みを受けるよりも価値があること。

315. カエサルのはカエサルに（かえさるのものはかえさるに）

君主の物は君主に返せ、の意から、公民としての法律上の義務を果たせ、の意味に用いる。

316. 蛙の願立て（かえるのがんだて）

儲かることばかり考えて損をすることを考えない者や、前ばかり見て後ろを見ない者のことをいう。

317. 蛙の子は蛙（かえるのこはかえる）

蛙の子は、オタマジャクシの時期もあるが、結局は蛙以外のものにはならない、ということから、子の才能や性質は親に似るものである、というたとえ。平凡な人の子はやはり平凡人である、という意味。また、子は親と同じ道を歩むものが多い、という意にも使う。

318. 顔が物言う（かおがものいう）

人の心は顔にあらわれるもの。心はかくすことができないものだの意。また、顔がきくことにもいう。

319. 河海は細流を挾ばず（かかいはさいりゅうをえらばず）

大人物になるには、度量広く、どんな種類の人でもえり好みをしないで、自分の仲間に入れなければならない、という意味。

320. 懸かるも引くも時による（かかるもひくもときによる）

攻めるにも退却するにも時機がある。物事の進退には、それぞれ適当な時機がある。

321. 垣堅くして犬入らず（かきかたくしていぬいらず）

家庭内が正しく治まっていれば、それを乱すようなことは外部から入ってくることはない。

322. 餓鬼の目に水見えず（がきのめにみずみえず）

あまり焦って求めると、かえって求めるものが見付からない、という意味。

323. 餓鬼も人数（がきもにんずう）

取るに足らない子供でも、人数が多くなると侮りがたい力を持つようになる。

324. 隠すより現る（かくすよりあらわる）

物事は、隠すとかえって外へ知れやすい、という意味。

325. 隠れたるより見るるはなし（かくれたるよりあらわるるはなし）

秘密にしていることのほうが、かえって人に知れやすい。包み隠そうとすると、かえって人に知れやすい。

326. 隠れての信は現れての徳（かくれてのしんはあらわれてのとく）

心の中に持っている誠実は、自然に外に現われて自分自身のためになる。

327. 学を好むは知に近し（がくをこのむはちにちかし）

学問を好む人は、無知を克服して真の知に近づくことができる。

328. 家鶏を厭いて野雉を愛す（かけいをいといてやちをあいす）

家に飼っている鶏をきらって、野生のきじを珍しがる。よいものを粗末にして悪いものを大事にするたとえで、珍しい物を珍重する愚を戒めた言葉。

329. 書けぬ者理に疎し（かけぬものりにうとし）

無学な者には、物の道理はわからない。

330. 欠け餅と焼き餅は焼くほどよい（かけもちとやきもちはやくほどよい）

嫉妬はするほど夫婦仲がよいということ。

331. 陰では殿の事も言う（かげではとののこともいう）

どんな人でも陰口を言われることは避けられない。

332. 陰弁慶（かげべんけい）

強い人のいないところでの弁慶のことで、陰でいばって弱い者をいじめたりするが、自分よりも強い人や偉い人の前では、全然頭が上がらない人のことを悪く言う言葉。

333. 影を畏れ迹を悪む（かげをおそれあとをにくむ）

自分の影が見えるのを恐れ、足跡が地面に残るのをきらう。自分自身を顧みることを忘れて、やたらに外物にとらわれて苦しむ、という意味。

334. 嘉肴ありと雖も食らわずんばその旨きを知らず（かこうありといえどもくらわずんばそのうまきをしらず）

うまいごちそうがあってもそれを食べてみなければ、そのうまさはわからない。何事も経験してみなければ、その価値はわからない、という意味。実践することの必要を説いたもの。

335. 画工鬪牛の尾を誤って牧童に笑われる（がこうとうぎゅうのおをあやまってぼくどうにわられる）

実物のよく観察した上で描かないと、とんだ失敗をするということで、無学な者でも専門の事には詳しい知識を持っているから、教えを受けるがよい、という意味。

336. 駕籠に乗る人担ぐ人（かごにのるひとかつぐひと）

世の中の階級や職業はさまざまであり、そのさまざまな階級や職業の人々が、互いに助け合って社会が成立している状態をいう。

337. 貸し借りは他人（かしかりはたにん）

お金のことは、たとえ親子でも兄弟でも夫婦でも、他人と同じようにドライであるべきだ。

338. 賢い人には友がない（かしこいひとにはともがない）

利口すぎる人には友人ができない。すきまもなければ打算的だ。

339. 頭が動かねば尾が動かぬ（かしらがうごかねばおがうごかぬ）

上に立つ者が先頭に立って働かなければ、下の者は働かない。上に立つ者は率先して範を示せ、という意味。

340. 頭を剃りても心を剃らず（かしらをそりてもこころをそらず）

髪を剃って形だけ僧になっても、心は俗人のままである。内心煩悩の去らぬこと。

341. 火事あとの釘拾い（かじあとのくぎひろい）

大きな損失や大金をむだ使いしたあとで、少しの儉約をしてみたところで何の役にもたたないことのとえ。

342. 稼ぐに追いつく貧乏なし（かせぎにおいつくびんぼうなし）
不平・不満を抱かず、毎日一生懸命働いていれば、次第に暮らし向きは豊かになるものだという事。
343. 風が吹けば桶屋が儲かる（かぜがふけばおけやがもうかる）
物事の因果関係が、回り回って意外な結末になることをたとえていう。
344. 風に順いて呼ぶ（かぜにしたがいて）
風下に向かって呼べば、風によって声が遠くまで達するように、勢いに乗じて事をなせば、すみやかに容易に成功することのたとえ。
345. 堅い石から火が出る（かたいいしからひがでる）
普段温厚な人や慎み深い人も、時には思いきった事をするのをいう。
346. 堅い木は折れる（かたいきはおれる）
堅いものは折れやすく、こわれやすい。やわらかいものはよく耐えるということのたとえ。
347. 堅き氷は霜を踏むより至る（かたきこおりはしもをふむよりいたる）
すべて物事は早めに用意することが必要である。また、災難は小さなことから次第に大きくなるものであるから、最初のうちに注意せよ、という意味。
348. 片口きいて公事をわくるな（かたくちきいてくじをわくるな）
一方の言い分だけを聞いて訴訟の判決をしてはいけないということ。賢明な人は原告と被告両者の言うことを聞いてから判定するが、暗愚（あんぐ）な人は一方だけの言い分を聞いて判定する。
349. 片手で錐は揉まれぬ（かたてできりはもまれぬ）
心をあわせて協力しなければ、物事はできないことのとえ。
350. 勝った自慢は負けての後悔（かったじまはまけてのこうかい）
ったときにあまり自慢している者は、負けたときに引込みがつかなくなり、面目がなく後悔しなければならぬこと。自慢は慎めよ。
351. 勝って兜の緒を締めよ（かってかぶとのおをしめよ）
戦いに勝っても、勝ちにおごって気を許さないで、心を引き締めよ、という意味。

352. 河童に水練（ かつばにすいれん ）

泳ぎの上手な河童に泳ぎ方を教えることで、なんの足しにもならない。不必要なことをする愚かさのたとえ。

353. 河童の川流れ（ かつばのかわながれ ）

泳ぎのうまい河童でも、時には水に流されることもある。名人・達人も時には失敗することもあるという意味。

354. 刮目して見る（ かつもくしてみる ）

目を刮（こす）ってよく注意して見ること。今までとは違った見方で相手の進歩や変化を見直すことをいう。

355. 勝つも負けるも時の運（ かつもまけるもときのうん ）

勝ち負けは、実力だけで決まるものではなく、その時々運によって左右されることが多い。

356. 勝てば官軍負ければ賊軍（ かてばかんぐんまければぞくぐん ）

何事も勝った者のやったことが正しいとされる、という意味。

357. 我田引水（ がでんいんすい ）

他人の迷惑を考えず、自分の田に水を引く意から、自分の都合のよいように強引に事を進めたり話をこじつけたりすること。

358. 瓜田に履を納れず（ かでんにくつをいれず ）

疑いを受けるような、まぎらわしい行為は避けたほうがよい、というたとえ。

359. 悲しき時は身一つ（ かなしきときはみひとつ ）

困窮したときは、人は頼りにならない。自分自身にたよるほかはない。落ちぶれるとだれも寄りつかなくなるものである。

360. 蟹は甲羅に似せて穴を掘る（ かにはこうらににせてあなをほる ）

人はそれぞれ自分に釣り合った考えや行動をするものである、という意味。

361. 金と塵は積もるほど汚い（ かねとちりはつもるほどきたない ）

金持ちになればなるほど欲が深くなり、金を出し惜しみするものである。

362. 金の価値を知りたければ金を借りてみよ（かねのかちをしりたければかねをかりてみよ）

普段は身にしみて金の重要さ、ありがたさを感じていないが、借りる時になって初めて、その価値の大きいことを知らされる。

363. 金の切れ目が縁の切れ目（かねのきれめがえんのきれめ）

金を持っているうちは、その人をちやほやするが、金がなくなると冷淡になって去って行くのが世の常である。

364. 金の鎖も引けば切れる（かねのくさりもひけばきれる）

意志の強い人でも、ついには誘惑に負けることがある、という意味。

365. 金の光は阿弥陀ほど（かねのひかりはあみだほど）

金の威力は仏様ほど広大である。金の威力は絶大なことのたとえ。

366. 金はある所にある（かねはあるところにある）

危険をおかさなければ大金はもうからない。

367. 金は片行き（かねはかたゆき）

金はあるところには山ほどあるし、ないところには一銭もない。片寄ってあること。また、金持ちのところに金のほうが自然に寄る。

368. 金は三欠くにたまる（かねはさんかくにたまる）

金をためようと思ったら、義理を欠き、人情を欠き、交際を欠かなければならない、という意味。

369. 金は天下の回りもの（かねはてんかのまわりもの）

金は世間をぐるぐる回っているもので、いつかは自分のところへも回って来る。貧富は固定したものではないから、現在、金がないからといってくよくよするな、という意味。

370. 金は良き召し使いなれど悪しき主なり（かねはよきめしつかいなれどあしきしゅなり）

金は手段としてうまく運用しているうちはよいが、金それだけが目的になって、金に使われるようになると害が生じる。

371. 金は湧き物（かねはわきもの）

金は、どこからか湧き出してくるように自然に手に入るものである。そう金のないのを心配するな、という意味。

372. 金持ち金使わず（かねもちかねつかわず）

金持ちはかえってけちなものである。けちなくらいに金を使わないから、金がたまるのである。

373. 金持ち喧嘩せず（かねもちけんかせず）

金持ちは、すれば損になることを知っているのだから、あえて喧嘩などしないものだ、という意味で、優位に立つ者は、何の得にもならない争いなどはできるだけ避けようとするものだ、ということ。

374. 金持ちと灰吹きは溜まるほど汚い（かねもちとはいふきはたまるほどきたない）

金持ちは金離れがよいかと思うとむしろ逆で、溜まるほどけちになって金にきたなくなるものが多い。

375. 金を貸せば友を失う（かねをかせばともをうしなう）

金を友人に貸して返らない場合は友人との交際がこわれることが多いから、友人同士では金の貸し借りはしないほうがよい。

376. 禍福は糾える縄の如し（かふくはあぎなえるなわのごとし）

禍は(わざわい)と福(しあわせ)とは、あい表裏して変転するものである。不幸を嘆いていると、それがいつのまにか幸福となり、幸福を喜んでいたらまたそれが災いになる。めぐりめぐることが、ちょうど、より合わせた縄のようである。

377. 禍福門なし唯人の招く所（かふくもんなしただひとのまねくところ）

禍福の入ってくる門はあらかじめ定まっているものではない、悪をすればわざわいが来、善を行えば福が来る。禍福はすべてその人自らが招くものである。

378. 株を守りて兎を待つ（かぶをまもりてうさぎをまつ）

古い習慣を守り、それにとらわれて進歩のないこと。融通のきかないたとえ。

379. 壁に耳あり障子に目あり（かべにみみありしょうじにめあり）

どこで誰が聞いているか、どこで誰が見ているかわからない。密談や秘事はとかく漏れやすい、という意味。

380. 果報は寝て待て（かほうはねてまで）

幸運は人の力で呼び寄せることはできないのだから、あせらずに時機が訪れるのを待っていた方がよい、ということ。

381. 噛み合う犬は呼び難し（かみあういぬはよびがたし）

けんかしている犬はいくら呼んでも来ないように、自分のことで夢中になっている人は、他から何を言われても耳には全く入らないこと。

382. 神様にも祝詞（かみさまにものりと）

神様をお願いをしたいことがあれば、改めて祈らなければ通じない。わかっていることでも改めて頼まなければ通じない。

383. 空馬に怪我なし（からうまにけがなし）

一物を持たないものは損のしようがない、という意味。空馬は人も荷物も乗せていない馬のこと。

384. 烏百度洗っても鷺にはならぬ（からすひやくどあらってもさぎにはならぬ）

色の黒い者はいくら洗っても色白にはならない。むだな骨折りはやめて特色を生かす工夫をしたほうがよい。

385. 空世辞は馬鹿を嬉しがらせる（からせじはばかをうれしがらせる）

愚か者は、口先だけのお世辞を言われても嬉しがる。

386. 狩人罠に掛かる（かりうどわなにかかる）

人をおとしいれようとしてしくんだ悪だくみによって、自分がひどい目にあうことをいう。

387. 借り着より洗い着（かりぎよりあらいぎ）

借りた美しい衣服よりも、洗いざらしでも自分の衣服がよい。人にたよってぜいたくをするよりも、貧しくても自立するほうがよいことのとえ。人の物より自分の物がよいこと。

388. 借りる八合済す一升（かりるはちごうなすいっしょう）

米を八合借りたら一升にして返せ。借りた物には利息をつけるかお礼を添えて返すのが借りた人の心得だということ。

389. 枯れ木も山の賑わい（かれきもやまのにぎわい）

枯れ木でも山の景観をにぎやかにするのに役立つ。つまらない者でも数の中に加わると、座をにぎやかにし景気づけになるから、いないよりはましである。人だけでなく物についてもいう。

390. 彼も人なり我も人なり（かれもひとなりわれもひとなり）

彼にできることが自分にできないはずがない。彼も同じ人間であるから努力すればできるはずである、と自らを励まして発奮させる言葉。

391. 彼を知り己を知れば百戦殆からず（かれをしりおのれをしればひやくせんあやうからず）

敵と味方との実力をはつきりと知った上で戦えば、何度戦っても負けることがない。有名な兵法家、孫子の言葉。

392. 可愛い子には旅をさせよ（かわいいこにはたびをさせよ）

可愛い子には苦勞の多い旅をさせて、世の中の苦しみやつらさを経験させたほうが、その子の将来のためになる。

393. 可愛いは憎いの裏（かわいいはにくいのうら）

実際は憎く思っているものを、口先だけは可愛いということ。

394. 可愛さ余って憎さ百倍（かわいさあまってにくさひやくばい）

今までいとおいしい、大事にしたいと思っていた相手に対する気持ちが何かの拍子に憎しみになると、それまでの愛情が強かっただけに憎む気持ちも一段と増すということ。

395. 可を見て進み難を知りて退く（かを見てすすみなんをしりてしりぞく）

情勢に応じて進んだり退いたりする。機を見て進退すること。進むばかりが能ではないこと。

396. 換骨奪胎（かんこつだつたい）

古いものに、新しい工夫を凝らして再生する意。

397. 閑古鳥が鳴く（かんこどりがなく）

人影がなく寂しいようす。非常に寂れたようす。商売などがはやらないことにいう。

398. 癩癩持ちの事破り（かんしゃくもちのことやぶり）

せっかくまとまりかけた話や仕事も、短気をおこしてこわしてしまうこと。

399. 邯鄲の歩み（かんたんのあゆみ）

自分の本分を捨てて、むやみに他人のまねをすると、両方ともだめになるというたとえ。邯鄲の都の人は歩き方がスマートなので、田舎の青年がそれを学びに行ったが、学び終わらないうちに、自分の国の歩き方を忘れてしまい、這って帰ったという故事による。

400. 邯鄲の夢（かんたんのゆめ）

人の世の栄枯盛衰のはかないたとえ。

401. 艱難汝を玉にす（かんなんなんじをたまにす）

人間は苦労を経験して、初めて立派な人物になることができる。

402. 雁に長幼の列あり（がんにちょうようのれつあり）

年長者や目上を尊敬しなければならないことをいう。

403. 堪忍五両思案十両（かんにんごりょうしあんじゅうりょう）

腹の立つところを我慢すれば大きな利益がある。その上によく考えて工夫すればさらに大きな利益がある。

404. 堪忍は一生の宝（かんにんはいっしょうのたから）

忍耐することは幸福の基で、その人の一生の宝である。

405. 堪忍袋の緒が切れる（かんにんぶくろのおがきれる）

抑えてきた怒りがついに爆発する。

406. 看板に偽りあり（かんばんにいつわりあり）

見かけは立派そうに見せているが、中身が伴っていないことを表わす言葉。

407. 看板に偽りなし（かんばんにいつわりなし）

看板にかけてあることと中身が一致している。宣伝と実物とが合っていることをいう。

408. 看板を下ろす（かんばんをおろす）

商店が廃業する。

409. 寛容なること海の如し（かんようなることうみのごとし）

寛大でよく人を許し、とがめ立てしないことが海のようなこと。

410. 棺を蓋いて事定まる（かんをおおいてことさだまる）

人は死んで初めて生前の事業や行いの真価がわかるものである。死んで棺おけのふたをするまでは決定的な判断を下すことはできない、という意味。

411.. 既往は咎めず（きおうはとがめず）

過ぎ去ったことは、いまさら咎め立てしても仕方がない。むしろ将来を慎むことが大切である、という意味。

412. 危機一髪（ききいっぱつ）

極めてあぶないこと。あぶない瀬戸際。

413. 騏驎も一躍十歩なる能わず（ききもいちやくじっぽなるあたわず）

駿馬も一とびが十歩ではない、一步は一步である。賢者でも学問をするには順序を追って進まなければならない。

414. 聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥（きくはいつときのはじきかぬはいっしょうのはじ）

知らないことを聞くのは、そのときは恥ずかしい気がするが、聞かなければ一生その事を知らないで、最後まで恥ずかしい思いをしなければならない。知らないことは恥ずかしがらないで必ず聞きただせ、という意味。

415. 聞くは法楽（きくはほうらく）

聞くのはただであるから、聞きなさいということ。

416. 聞けば聞き損（きけばききぞん）

聞かなければ知らないですむことを、聞いたために腹立たしく思う。

417. 聞けば気の毒見れば目の毒（きけばきのどくみればめのどく）

見たり聞いたりすれば煩惱が生じ、欲望が起こって、心身の苦しみが深い、という意味。

418. 起死回生（きしかいせい）

死にそうな人を生き返らせる意から、思い切った手段で、絶望的な状態から再び立ち直らせること。

419. 樹静かならんと欲すれども風止まず（きしずかならんとほつすれどもかぜやまず）
親孝行をしようと思っても、その時まで親が生きてくれないから、親の生存中に孝養を尽くすように心がけよ、という意味。

420. 疑心暗鬼を生ず（ぎしんあんきをしょうず）
びくびくしていると、暗がりの中で鬼の形が見えたりする、ということから、疑いの心があると、ありもせぬことを想像して恐ろしくなる、という意味。

421. 気違いに刃物（きちがいにはもの）
狂人に刃物を持たせると、どんな危ないことをしでかすかわからないことから、判断力を失ったものに、他人に危害を加える恐れのある力や材料を与えることは、非常に危険である、という意味。

422. 吉凶は人によりて日によらず（きつきょうはひとによりてひによらず）
今日はよい日だとか悪い日だとかいうが、吉日とか凶日とかは万人に共通したものではなく、各人によって違うものだ。日ではなく、各人の心がけによって左右されることが多いということ。

423. 狐が下手の射る矢を恐る（きつねがへたのいるやをおそる）
下手な者の射る矢はどこへ飛んでくるかわからないので、賢いキツネもどこに逃げてよいかこまる。正常な人は相手にできるが、無茶な者は相手にしにくい。下手の射る矢は恐ろしい。

424. 来て見ればさ程でもなし富士の山（きてみればさほどでもなしふじのやま）
富士山に登ってみれば、下で見るほど荘厳（そうごん）でも美しくもない。実際にはそれほどでもない、という意味。

425. 機に因りて法を説け（きによりてほうをとけ）
よい機会をとらえて道理を説け。いかにすぐれた道理でも、いつも人の心をとらえるとは限らない。最も適した機会に話をすれば、受け入れられやすいものだ。

426. 昨日の襦袢今日の錦（きのうのつづれきょうのにしき）
昨日は襦袢（ぼろ）を身にまとっていた人が、今日は錦で身を包んでいる。人の運命は変わりやすいものだ、という意味。

427. 昨日の友は今日の敵（きのうのともはきょうのてき）

今まで親しかった者がたちまち敵となる。人の離合は変わりやすくあてにならないものだ、という意味。

428. 昨日の花は今日の塵（きのうのはなはきょうのちり）

人の世の栄枯盛衰のはかなく変わりやすいこと。

429. 昨日は今日の昔（きのうはきょうのむかし）

ただ一日前でも昨日はもはや過去である。過ぎ去った日である。

430. 木登りは木で果てる（きのぼりはきではてる）

木登りの上手な者は木で死ぬ。得意な技能のある者は、そのために身を滅ぼすことになる、というたとえ。

431. 木の実は元へ（きのみはもとへ）

なった木の実はその木の根元に落ちる。物事はすべてその起こった元に戻る、ということ。

432. 驥尾に付す（きびにふす）

才知のない人がすぐれた先輩のあとにつき従って、自分だけではできないようなことを成し遂げる。後輩が、優れた先輩の引き立てで出世すること。特に、自分の仕事などについて謙遜して言うのに用いる。

433. 希望は悲しい時の最上の音楽（きぼうはかなしいときのさいじょうのおんがく）

希望を持つことは、悲しい時の何よりの慰めである。

434. 騏も一日に千里なる能わず（きもいちにちにせんりなるあたわず）

どんな名馬でも一日に千里も行くことはできない。学問は一足とびに達するものではないことのたとえ。

435. 胆は大きく心は小さく持て（きもはおおきくこころはちいさくもて）

度胸は大きく、注意力はこまかくして世の中を渡れということ。

436. 客と白鷺は立ったが見事（きゃくとしらさぎはたつたがみごと）

お客は席を早く立つのが見事である。長座しないで早く帰ったのが美しいということ。また、客も白鷺も座っているよりも立って舞うのが見事である。客に余興を求める言葉である。

437. 客の朝起き（きやくのあさおき）

泊り客が、主人（その家の人）より朝早く起きるのはその家では迷惑すること。

438. 旧悪を念わず（きゅうあくをおもわず）

人の過去の悪事をいつまでも心にとめないで、現在の長所を認めるようにせよ、ということ。

439. 窮寇に迫ること勿れ（きゅうこうにせまることなかれ）

逃げ場所を失って非常に困っている敵を深追いするな。追いつめると死に物狂いになって反抗して勢いを盛り返すから注意しなければならないこと。

440. 九死に一生を得る（きゅうしにいっしょうをえる）

普通なら命を失っているはずの危ないところをやっと助かること。

441. 九仞の功を一簣に虧く（きゅうじんのこうをいっきにかく）

高い築山を作るのに、あと 1 もつこというところでやめてしまえば、予定通りに完成することはできない、ということから、事が成功に近づいたのに、わずかな失敗のために長い間の努力をむだにすることをいう。

442. 窮すれば通ず（きゅうすればつうず）

行き詰まって絶体絶命の立場になると、かえって、何とか苦境を打開する方法が考えられるものである、という意味。

443. 窮すれば濫す（きゅうすればらんす）

切羽詰まってくると、前後の見境もなくつい悪いことをしてしまう。思慮の浅い凡人はそれを堪えることができないで、つい悪いことをするものである。

444. 窮鼠猫を噛む（きゅうそねこをかむ）

猫に追い詰められた鼠が、逆に猫に噛みつく、ということから、追い詰められて必死になれば、弱い者も強いものを苦しめることがあるものだ、ということ。

445. 窮鳥懐に入れば獵師も殺さず（きゅうちょうふところにいればりょうしもころさず）

追い詰められて逃げ場所を失った鳥が、獵師の懐に飛び込んでくれば、獵師でさえ殺しはしない。まして、逃げ場所を失った人が来て救いを求めれば、どんな事情があったとしても助けるものである、という意味。

446. 朽木は雕る可からず（きゅうぼくはえるべからず）

腐った木には彫刻をすることができない。やる気のない怠け者には、教えることができない、という意味。

447. 今日あって明日ない身（きょうあってあすないみ）

世の中や人生の、うつろいやすく無常なこと。また、死期が迫ったことをいう。

448. 今日考えて明日語れ（きょうかんがえてあすかたれ）

軽率にしゃべって後悔しないようにせよ。よく考えたうえで発言せよ、という意味。

449. 行儀作法が人を作る（ぎょうぎさほうがひとをつくる）

行儀作法が立派な人は、初めはそうでなくても、だんだん立派な人格が形成されていくものだ。

450. 郷原は徳の賊（きょうげんはとくのぞく）

善良をよそおっている、えせ道徳者は、徳をそこなう盗人である。万人にこびる八方美人は、見識も操守もない点で徳をそこなうものであるという意味。郷原は村の中で、まじめな人とほめられている俗物のこと。

451. 強将の下に弱兵なし（きょうしょうのもとにじゃくへいなし）

大将が強ければ、その部下の兵も自然に感化を受けて弱い兵はいなくなる、という意味。

452. 恭者は人を侮らず（きょうじゃはひとをあなどらず）

つつしみ深い人は、決して人を馬鹿にしないということ。

453. 狂人走れば不狂人も走る（きょうじんはしればふきょうじんもはしる）

人は自分にしっかりした考えがないと、他人に引きずられて、その言うままに行動するような性質があるものだ。人には雷同性があるたとえ。

454. 兄弟は他人の始まり（きょうだいはたにんのはじまり）

もとは仲のよい同じ血を分けた兄弟であるが、成長するとそれぞれ、配偶者や子の愛に引かれて自然に間が疎遠になり、ことに利害に関することでは、他人と同じようにいがみ合うこともあるものだ。

455. 兄弟は両の手（きょうだいはりょうのて）

兄弟は左右の手のように、互いに助け合わなければならないものだということ。

456. 今日なし得る事を明日まで延ばすな（きょうなしうることをあすまでのばすな）

現在できることは今直ちに行なえ。

457. 今日の後今日無し（きょうのあとにきょうなし）

月日はひとたび過ぎ去ったら、再び来ることはない。

458. 堯の子堯ならず（きょうのこきょうならず）

堯のような聖天子にも必ずしも立派な子が生まれるとはいえない。親が賢明だといっても子は必ず賢明だとはいえない。

459. 今日の一針明日の十針（きょうのひとはりあすのじゅっはり）

今日一針ですむほころびは、あすは十針も縫わなければならなくなる。その時しておかないとあとで苦勞すること。手遅れになると苦勞することのたとえ。

460. 今日は人の上明日は我が身の上（きょうはひとのうえあすはわがみのうえ）

今日は他人のこととと思っていた災難も、明日は自分のこととなるかも知れない。

461. 狂夫の楽しみは智者の哀しみ（きょうふのたのしみはちしやのかなしみ）

人は知識の程度やその立場の違いにより、考え方がまるで反対になることのたとえ。

462. 喬木は風に折らる（きょうぼくはかぜにおらる）

高くのびた木は風当たりが強く、風害を受けることが多い。人も地位が高くなると批判や攻撃を受けることが多くなるたとえ。

463. 狂瀾を既倒に廻らす（きょうらんをきとうにめぐらす）

どうしようもないほどに傾いた形勢を、もとの状態に回復すること。衰えた時勢を挽回するたとえ。

464. 虚栄は嘘の母（きよえいはうそのはは）

あまり見栄をはろうとすれば、つい嘘をつくようになる。虚栄心は嘘をつくもとである、という意味。

465. 曲学阿世（きょくがくあせい）

真理を曲げて世間の人の気に入るような説を唱え、時勢や時の権力者に迎合しようとする
こと。学者としてとるべきではない態度をいう。

466. 居は気を移す（きよはきをうつす）

人は、地位や環境によってその気持ちが変わり、善にも悪にもなる、という意味。

467. 漁父の利（ぎよふのり）

両者が互いに争っているのにつけ込んで、第三者が骨折らずに、その利益を横取りするこ
と。

468. 器用貧乏（きようびんぼう）

器用な人は、何をやっても一応は無難にこなせるので、他人には重宝がられてあれこれ使
われるが、自分は一つのことには打ち込めないで、結局貧乏で終わる。

469. 清水の舞台から飛び降りる（きよみずのぶたいからとびおりる）

非常な決意をするたとえ。京都の清水寺は懸崖に臨んで舞台を架してあるからいう。

470. 義理と禪は欠かされぬ（ぎりとふんどしはかかされぬ）

男子が常に禪をつけているように、義理は一時でも欠いてはいけない、という意味。

471. 義理張るよりも頬張れ（ぎりばるよりもほおばれ）

義理を欠くまいとして無理をするよりも、自分の口に入れるくふうをしたほうがよい。よ
けいな義理をはってやりくりするよりも自分の利益を心がけるのがよい、という実利本位
の考え。

472. 器量より気前（きりょうよりきまえ）

顔かたちの美しいことよりも、性質のよいほうがよい。器量のよいものは当座のことで、
すこしたてば色もさめあせるものだから、性質のよいものは変わらないからよい。

473. 麒麟の躓き（きりんのつまずき）

千里を行く名馬も時につまずくことがあるように、どんなすぐれた英才でも、時にはしく
じること失敗があるというたとえ。

474. 驍驍も老いては驚馬に劣る（きりんもおいてはどばにおとる）

一日に千里も走るといふ駿馬も、年を取ると足の遅い駄馬にも負けるようになる、ということから、優れた人でも、老衰するとその働きが人より劣り、愚鈍な人にも勝ちを譲るようになる、という意味。

475. 切る手遅かれ（きるておそかれ）

よく考えてから手出しをせよ。物事は熟慮してから行動にうつせよ。

476. 綺麗な花は山に咲く（きれいなはなはやまにさく）

本当に美しい花は高い山に咲いている。本当によいものは、人の気づかないところにあるということ。

477. 驥をして鼠を捕らしむ（きをしてねずみをとらしむ）

千里を走る名馬にネズミを捕らせるということ。人を使う道をあやまって、すぐれた有能の人につまらない仕事をさせること。また、有能な人も無能な人も区別がつかないことのととえ。

478. 義を見てせざるは勇なきなり（ぎをみてせざるはゆうなきなり）

人の道として当然行ふべきことと知りながら実行しないのは、その人に勇気がないからである、という意味。

479. 槿花一日の栄（きんかいちじつのえい）

人間の栄華のはかないことのととえ。「槿花」は、むくげの花。朝咲いて夕方にはしぼむので、はかないものにたとえる。

480. 勤勉は成功の母（きんべんはせいこうのはは）

成功は勤勉によって得られる。

481. 苦あれば楽あり（くあればらくあり）

苦しいことがあると、その後には楽しいこと楽なことがある。人生の苦楽は一概には言えないということ。

482. 食べ物と念仏は一口ずつ（くいものとねんぶつはひとくちずつ）

念仏はみんなが一口ずつでも唱えるように、食べ物も一口ずつでもみんなであけて食べるのがよい、ということ。

483. 釘の曲りは鉄鎚で直せ（くぎのまがりはかなづちでなおせ）

悪いくせを直すには厳格な方法でなくては直らない。鉄釘の曲ったのは鉄鎚で打たなくては直らない。

484. 釘を打つ（くぎをうつ）

あとで変わらないように念をおしておくこと。あとで反対しないように強く警告しておくこと。

485. 苦言は薬なり甘言は疾なり（くげんはやくなりかんげんはしつなり）

忠言は聞くには好ましくないが身のためになる薬。甘言は聞くと気持ちがよいが身を誤る病気のようなものである。

486. 愚公山を移す（ぐこうやまをうつす）

たゆまずに努力すれば、ついには成功する、というたとえ。

487. 臭いもの身知らず（くさいものみしらず）

自分の放ついやなにおいは、自分ではあまり感じないように、自分の欠点は自分で気付かない。

488. 腐っても鯛（くさってもたい）

たとえ腐っても鯛は魚の王である、ということから、よいものはどんなに悪くなくても、または落ちぶれても、それだけの価値は失わない、という意味。

489. 楔を以て楔を抜く（くさびをもってくさびをぬく）

一度打ち込んだくさびは抜けないが、それを抜くには他のくさびを打ち込んでゆるめてから抜く。なにごとにも正しい方法をもってしなければできないことをいう。

490. 腐れ縁は離れず（くされえんははなれず）

悪縁や不純な関係の縁は、切ろうとしてもなかなか断ち切れないものである。

491. 草を打って蛇を驚かす（くさをうってへびをおどろかす）

ある一人を懲らして、関係する他人の人を戒めること。また、何気なくしたことが意外な結果を招くたとえ。

492. 孔子の倒れ（くじのたおれ）

あの偉大な孔子(こうし)でも倒れることがある、ということから、どんな偉い人でも時にはしくじることがある、という意味。

493. 患者の百行より智者の居眠り（ぐしゃのひゃっこうよりちしゃのいねむり）

つまらない物はいくらあっても役に立たないから、よい物がごく少しでもあったほうがよいということ。雀の千声より鶴の一声である。

494. 患者も一得（ぐしゃもいっとく）

愚か者の考えにも、一つぐらいは良い考えがある。

495. 薬人を殺さず薬師人を殺す（くすりひとをころさずくすりしひとをころす）

薬が人を殺すのではなく、医者が人を殺すのである。罪はその物にあるのではなく、それを運用する人にある、という意味。

496. 薬より養生（くすりよりようじょう）

病気になってから薬を飲むよりも、病気にならないように、平素の養生が大切である、という意味。

497. 屑も宝（くずもたから）

くずのようなものでも時に役立つことがある。廃物も利用すれば役に立つ。

498. 癖ある馬に能あり（くせあるうまにのうあり）

一癖ある者には、また一面では、何らかの取り柄があるものである。

499. 口あれば京へ上る（くちあればきょうへのぼる）

わからないことでも人に聞けばやれる、その気になれば何事も出来るという意味。

500. 口が動けば手が止む（くちがうごけばてがやむ）

話しに夢中になれば、仕事をする手は留守になる。黙って働け、ということ。

501. 朽ち木は柱にならぬ（くちきははしらにならぬ）

腐った木は柱には使えない。根性の腐った者は使いものにならない、という意味。

502. 口自慢の仕事下手（くちじまんのしごとべた）

口ばかり達者で、さっぱり仕事のできないこと。

503. 口で貶して心でほめる（くちでけなしてこころでほめる）

表面では悪く言いながら、心の中では逆にほめていること。

504. 口では大坂の城も建つ（くちではおおさかのしろもたつ）

口先では、どんなこともたやすくできるように言うことができる、という意味。

505. 口と財布は緊めるが得（くちとさいふはしめるがとく）

多弁と浪費を慎め。おしゃべりとむだ使いはしないのが利益であるとのたとえ。

506. 口と虎は身を破る（くちととらはみをやぶる）

ものの言い方が悪いために、身を滅ぼすような大事を招くことのたとえ。

507. 口と腹（くちとはら）

口で言うことと、腹で思っていることは別である。

508. 口に風邪をひかす（くちにかぜをひかす）

むだなことをしゃべること。言ったことがむだになること。

509. 口に税金はかからない（くちにぜいきんはかからない）

何にでも税金がかかってくる世の中だが、ただしゃべっているだけなら、どんなもうけ話にも税金はかからない。言葉だけなら勝手なことが言えるという意味。

510. 口は口心は心（くちはくちこころはこころ）

口で言うことと、心に思うところが一致しない。口と心が別々であること。裏腹なこと。

511. 口は重宝（くちはちょうほう）

口は便利なもので、口先では何とでも言える。

512. 口は閉じておけ目は開けておけ（くちはとじておけめはあけておけ）

言葉を慎んで活眼を開け。沈黙を守ってよく観察せよ、という意味。

513. 口は禍の門（くちはわざわいのかど）

禍の原因は口である。うっかり言った言葉から失敗を招くことがある。言葉は慎まなければならぬ、という戒めとして使う。

514. 唇亡びて齒寒し（くちびるほろびてはさむし）

互いに助け合うものの一方が減れば、他の一方も危なくなるたとえ。唇がなくなると歯が寒くなる。一国が減るとその隣国も危なくなるということ。

515. 口より出せば世間（くちよりだせばせけん）

いったん口をすべらせると、どんな秘密も世間に発表したのと同じである。しゃべるのは慎重にしなければいけないことのたとえ。

516. 口を守る瓶の如くす（くちをまもるかめのごとくす）

軽々しくしゃべらないこと。かめの水を一度ひっくり返せば元に返らぬから、言葉を慎めという戒め。

517. 衢道を行く者は至らず（くどうをいくものはいたらず）

わかれ道で迷っている者は目的地に到着しない。一つのことには専心しないで、あれこれ目移りする者は成功しないことのたとえ。

518. 国に諫むる臣あればその国必ず安し（くににいさむるしんあればそのくにかならずやすし）

君主の政治や行為を諫める臣下があれば、その国は安全である。これは会社でも家でも同じである。

519. 国に盗人家に鼠（くににぬすびといえにねずみ）

国に盗賊がおり家に鼠がいるように、物事には必ずこれを害するものがある。

520. 国乱れて忠臣見る（くにみだれてちゅうしんあらわる）

国が乱れると忠臣がはっきりする。国がよく治まっている時は、家来のだれが忠臣で誰が不忠の臣であるかわからないが、国が乱れた時に、誠実な臣とそうでないものとの違いがはっきりする。

521. 苦は楽の種（くはらくのたね）

今のうちに苦勞するのは、先にいって楽をするための種をまくようなものである。

522. 窪い所に水溜まる（くぼいところにみずたまる）

善悪ともに使い、利益のあるところに人は寄り集まってくる、不良のそこには不良が寄り集まり、事件が起きると刑事が寄ってくる。生活の苦しい者に、病気などほかの苦しみがついてくる。

523. 雲は竜に従い虎は風に従う（くもはりゅうにしたがいとらはかぜにしたがう）
性格気質を等しくし、類を同じくするものは互いに引き合うこと。りっぱな君主のもとには立派な賢臣が出て君主を助けること。また同気相求めることをいう。

524. 供養より施行（くようよりせぎょう）
死んだ人に物を供えて回向（えこう）するのもよいが、それにより困っている人にほどこすほうが意義があるということ。信心もよいが現実を忘れたものではないけない、という意味。

525. 食らえどもその味わいを知らず（くらえどもそのあじわいをしらず）
精神を集中してやらないと、何事も身につかないたとえ。心が他の事に奪われている時は、何を食べてもその味がわからない。

526. 紅は園生に植えても隠れなし（くれないはそのうにうえてもかくれなし）
ベニバナは花のたくさん咲いている庭園に植えても人目を引くものである。才能のすぐれた人はどこにいても自然と目立つものである、という意味。

527. 食わず嫌い（くわずぎらい）
食べてみもしないで、嫌いだと決めてしまうこと。物事をやってみもしないで、むやみに嫌うことについていう。

528. 食わせて置いてさてと言ひ（くわせておいてさてといい）
食わせたり飲ませたりごちそうして、義理にも断れないようにしておいてから、さて、と用件を持ち出すこと。現代では、こんなことがすべて行われている。

529. 君子危うきに近寄らず（くんしあやうきにちかよらず）
教養のある立派な人は、危険なことは避ける、ということから、むやみに危険なことに近づいて、無用な災難に遭わないようにすることをいう。

530. 君子争う所無し（くんしあらそうところなし）
徳のある人は人と争うことがない。もし争うとすれば弓術ぐらいである。

531. 君子と小人と父母にかかわらず（くんしとしょうじんとふぼにかかわらず）
君子になるのも小人になるのも、生んだ父母に関係がなく、自分が勉強したかしなかったかによるもので自分の責任である。

532. 君子に九思あり（くんにしにきゅうしあり）

君子が、常に心がけなければならない考え方が九つある。視るときは明（はっきりと）と
思い、聴くときは聰（はっきりと）を思い、顔色は温（温和）を思い、態度は恭（慎しみ
深く）を思い、言葉は忠（誠実）を思い、仕事は敬（慎重）を思い、疑いは問（問いただ
す）を思い、怒った時は難（難事の起こらざる）を思い、得るときは義（正しいか否か）
を考えるべきである、というのである。

533. 君子に三畏有り（くんにしにさんいあり）

君子には三つのおそれ慎むべきものがある。一は天命をおそれ、二は有徳の大人をおそれ、
三は聖人の言をおそれる。

【参考】 論語の中の言葉。

534. 君子に三戒有り（くんにしにさんかいあり）

君子は若い時は色欲を戒め、壮年には人と争うことを戒め、老いては欲深くなることを戒
めなければならない。

535. 君子に三楽有り（くんにしにさんらくあり）

君子には三つの楽しみがある。父母ともに健在で兄弟が無事なこと、自分の行いが天地人
に恥じないこと、天下の英才を集めて教育すること。

536. 君子に二言なし（くんにしににげんなし）

君子は一度言ったことは固く守る。守らないならどんなことでも言えるが、守るからには
軽々しく言えない。

537. 君子の過ちは日月の食の如し（くんしのあやまちはじつげつのしょくのごとし）

君子のおかす過ちは、日食・月食のようなもので、一時明德をおおわれても、すぐ改めて
もとの君子にかえり、少しもその徳を傷つけない。

538. 君子の交わりは淡きこと水の如し（くんしのまじわりはあわきことみずのごとし）

教養のある立派な人の交際は、あっさりとして水のようなものであるが、その友情は永久に変わ
らない。

539. 君子は憂えず懼れず（くんしはうれえずおそれず）

教養のある人は、いつも正しい道徳を実践していて何もやましいところがないので、少し
も心配することもないし恐れることもない。

540. 君子は屋漏に愧じず（くんしはおくろうにはじず）

君子は人の見ていない奥の部屋で、一人でいても慎み深く、良心に恥じるようなことはしない。

541. 君子は器ならず（くんしはきならず）

器物はそれぞれ一つの用に適するだけであるが、徳のある人はこれと違い、ただ一芸一方に通じるだけではない。すべてにわたって円満な人格者である。

542. 君子は義に喻り小人は利に喻る（くんしはぎにさとりしょうじんはりにさとる）

教養のある人は、すべての物事を、正しい道に合うかどうかと考えるが、徳のない無教養の人は、どうしたら利益を得られるかと、そればかりを考えるものである。

543. 君子は九度思い一度言う（くんしはくたびおもいていちどいう）

君子はよく考えてから言う。それで言うことは少ない。口数は少ない。

544. 君子はこれを己に求め小人はこれを人に求む（くんしはこれをおのれにもとめしょうじんはこれをひとにもとむ）

人格者は過ちがあると何事でもまず自分を反省し、徳の足りない人はその原因を他人のせいにしてしようとする。

545. 君子は独りを慎む（くんしはひとりをつつしむ）

教養のある人は、人の見ていないところでも自分の行いを慎む。

546. 君子は豹変す（くんしはひょうへんす）

教養のある人は、過ちと知ったらすぐに改めて善に移るのが、極めてはっきりしている。現在では、主義・主張をドライに変えることの意味に使うことが多い。

547. 君子は交わり絶ゆとも悪声を出さず（くんしはまじわりたゆともあくせいをいだしず）

人徳のある人は、絶交するようなことになっても決して相手の悪口を言わない。

548. 軍は和にあつて衆にあらず（ぐんはわにあつてしゅうにあらず）

戦いには兵が多いからいいのではなく、一致和合しているのがよいということ。事業にも和が大切である。

549. 群盲象を評す（ぐんもうぞうをひょうす）

凡人が大事業や大人物を批判しても、その一面に触れるだけで、全体を見渡すことはできないということ。多くの盲人たちが一頭の象をなでて、それぞれ自分の触れたところだけで、桶のようだ、太鼓のようだ、杖のようだ、ほうきのようだ、と見当違いの批判をしたという故事。

550. 群羊を駆って猛虎を攻む（ぐんようをかってもうこをせむ）

羊を集めて虎を攻める。弱国を数多く連合させて、強大国に対することのたとえ。

551. 群を抜く（ぐんをぬく）

同種のものの中で、とび抜けて優れていること。

552. 経験は馬鹿をも賢くする（けいけんはばかをもかしこくする）

どんな愚かな人間でも、経験を重ねることによってだんだんと賢くなる、ということから、経験は貴重なものである、という意味。

553. 鶏口となる牛後となる勿れ（けいこうとなるぎゅうごとなるなかれ）

大きな団体で、しりに付いているよりも、小さな団体でもその長となれという意味で、人に従属するよりも独立した方がよいというたとえ。

554. 経師は遇い易く人師は遇い難し（けいしはあいやすくじんしはあいがたし）

経書の字句を解釈して教えてくれる先生はいくらでもあるが、人のふみ行なうべき道を教え導いてくれる真の先生は得がたいものであるということ。

555. 芸術は長く人生は短し（げいじゅつはながくじんせいはみじかし）

芸術を完成するには長い年月がかかるが、それに耐えるのには人間の命はあまりにも短い。芸術は永久に残るが人間の命ははかないものだ。

556. 傾城に誠なし（けいせいにまことなし）

遊女は多くの客を相手にしなければ商売にならないので、客に言う事はうそばかりであるから注意が必要だ、という意味。

557. 兄弟は手足たり（けいていはてあしたり）

兄弟は自分の手足のようなものであって、かけがえがない。一度失えば再び得ることができないものである、ということ。

558. 刑は刑無きを期す（けいはけいなきをきす）

刑罰を定めて悪人を罰するのは、悪人をなくして、刑罰がいらなくなるようにするためである。法律で刑罰を設けるのは、刑罰のいない理想の社会を目的としているのだということ。

559. 芸は身につく（げいはみにつく）

財産や地位は身から離れることがあるが、身についた芸は身から離れることはないということ。

560. 芸は身を助ける（げいはみをたすける）

趣味で身につけた芸が、暮らしに困ったときには生活を支える手段となる、という意味。

561. 下種と鷹とに餌を飼え（げすとたかとにえさをかえ）

卑しい者や性質の荒い者には、心付けや食物を与えて手なずけて使うのがよい。

562. 下種ない上臈はならず（げすないじょうろうはならず）

身分の卑しい者があってこそ、身分の高い人もやっていけるのである。上下相持ち、世の中は共持ちである。

563. 下種の逆恨み（げすのさかうらみ）

卑しい人間は、人が好意で忠告してくれたことでも、かえってその人を恨む。

564. 賢が子賢ならず（けんがこけんならず）

親が賢くても子は必ずしも賢くはないということ。賢い親の子には往々にして愚かな子が生まれていること。

565. 現在の果を以て未来を知る（げんざいのかをもってみらいをしる）

現在の身のあり方を見れば、来世のことも推測できるということ。人は宿業によって、前世でした報いで現世にあらわれ、現世でしたことの報いが来世にあらわれるのであるから、来世もわかるということになる。

566. 賢者は中道を取る（けんじゃはちゅうどうをとる）

教養のある人は、かたよらない中正の道を歩み、極端な過激なことはしない。

567. 賢者は長い耳と短い舌を持つ（けんじゃはながいみみとみじかいしたをもつ）

賢い人は人の言うことをよく聞かすが、自分から言葉を発することが少ない。

568. 賢人は危きを求めず（けんじんはあやうきをもとめず）

賢い人は危険なところに近寄らない。危ない所や危険なことに近づくのは愚か者である。

569. 健全なる精神は健全なる身体に宿る（けんぜんなるせいしんはけんぜんなるしんたいにやどる）

精神と身体は一体であって、身体が健全であると精神も健康である。

570. 捲土重来（けんどちょうらい）

前に敗れた者が、勢いを盛り返し、意気込んでやって来ること。砂ぼこりを巻きあげて再びやって来る意。

571. 賢は愚にかえる（けんはぐにかえる）

賢い人も時によっては愚か者をよそおう。平時にあっては愚か者のように見える。

572. 恋の闇（こいのやみ）

恋愛をすると理性を失うことを闇にたとえた語。

573. 恋は曲者（こいはくせもの）

恋愛は人の理性を失わせ、とんでもないことをさせるようになる。

574. 御意見五両堪忍十両（ごいけんごりょうかんにんじゅうりょう）

人からの忠告は五両の値打ちがあり、忍耐は十両の値打ちがあるということで、世の中を渡るうえに、忠告や忍耐が大切なことのたとえ。

575. 後悔は平日の油断（こうかいはへいじつのゆだん）

後悔はふだんの油断から起こる、という意味。

576. 後悔先に立たず（こうかいさきにたたず）

後でいくら後悔してもどうにもならないのだから、十分に考えた上ですべきであるということ。

577. 巧言令色鮮し仁（こうげんれいしょくすくなしじん）

うまく言葉を飾ったり、顔色をつくろったりする者には、人の道を心得た者が少ない。心にもないことを言っておべっかを使う八方美人には、誠実な人間は少ない、という意味。

578. 孝行のしたい時分に親はなし（こうこうしたいじぶんにおやはなし）

親の元気なうちは、親孝行をしなければならないと理屈ではわかっているけど、真に理解できていない。それが実感としてわかるのは、とにかく親が死んでからあとのことであって、後悔する人が多いものだ、という意味。

579. 孔子も時に会わず（こうしもとぎにあわず）

孔子のような立派な人でも、世の中にいれられない時があったというので、どんなに有能な人でも、不遇で世に用いられないことがある。

580. 好事門を出でず（こうじもんをいでず）

よい行ないはとかく世間に知られないものである。

581. 考は百行の本（こうはひゃっこうのもと）

孝行はすべての善行の基本である。

582. 弘法筆を選ばず（こうぼうふでをえらばず）

書の名人である弘法大師は、字を書くのに筆を選び好みしない。本当に物事に巧みな人は、道具や材料に文句を言わずにうまくやりこなす、という意味。

583. 弘法も筆の誤り（こうぼうもふでのあやまり）

弘法大師のような能書家でも時には書き損じることがある、ということから、その道の達人でも失敗をすることがあることのたとえ。

584. 高慢は出世の行き止まり（こうまんはしゅっせのゆきどまり）

謙虚な心を忘れて自分の出世を自慢するようになったら、それ以上は出世も向上できない。

585. 蝙蝠も鳥のうち（こうもりもとりのうち）

蝙蝠も空を飛ぶことからいえば、鳥の仲間に入れることができる。取るに足らぬ人でもやはり人数のうちであるという意味。

586. 剛毅木訥は仁に近し（ごうきぼくとつはじんにちかし）

意志が強く、飾り気がなくて口べたな人は、仁者に近い美徳を持った人である。

587. 声なきに聴き形なきに視る（こえなきにききかたちなきにみる）

親に孝行するには、絶えず相手のことをひたすら考えて、相手の声のないところでもその声を聞き、相手のいないところでもその姿を見ているようにしなければいけない。子は、心して親に仕えなければいけないということ。

588. 声なくして人を呼ぶ（こえなくしてひとをよぶ）

徳のある人のまわりには、自然に人が慕って集まるものである。

589. 虎穴に入らずんば虎子を得ず（こけつに入らずんばこしをえず）

虎の住む穴に入らなければ、虎の子を生け捕りにすることはできないことから、危険を冒さなければ成功は収められない、という意味。

590. 虚仮の一念（こけのいちねん）

愚かな者でも一心にやれば成し遂げられるものだということ。

591. ここばかり日は照らぬ（ここばかりひはてらぬ）

この家だけに日が照るわけではない。太陽はどこでも照り輝く。世間どこへ行っても生活はできる、という意味。

592. 志ある者は事竟に成る（こころざしあるものはことついになる）

しっかりした志があって、途中でくじけなければ、必ずいつかは成功する。

593. 心広く体胖なり（こころひろくたいゆたかなり）

心にやましいことがなければ、心身ともにのびやかである。

594. 心安きは不和の基（こころやすきはふわのもと）

あまり親しいと遠慮がなくなり、かえって仲違いしやすい。

595. 心ゆるめば財布もゆるむ（こころゆるめばさいふもゆるむ）

気持ちがゆるむと、つい不必要なことにお金を使いがちになる。

596. 乞食を三日すれば忘れられぬ（こじきをみつかすればわすれられぬ）

乞食を三日もすれば、働かないで暮らせるという気楽さを忘れられない、ということから、悪い習慣というのは、うっかり身につけたら最後、なかなかやめられなくなる、という意味。

597. 小姑一人は鬼千匹に当たる（こじゅうとひとりはおにせんびきにあたる）

嫁の身にとっては、夫の兄弟姉妹は非常な苦勞の種で、その一人一人が鬼の千匹にも相当するほどである。

598. 後生は徳の余り（ごしょうはとくのあまり）

生活がゆたかでなければ、いつも生活に追われて、後生を願うゆとりがない。

599. 五十にして四十九年の非を知る（ごじゅうにしてしじゅうくねんのひをしる）

五十歳になって、過ぎた四十九年の生活がまちが이었다ことが分かる。人生は所詮、失敗の連続で後悔すべきことが多い。

600. 言葉は国の手形（ことばはくにのてがた）

言葉のなまりで、その人の生国がわかる。姿や形はかくせても、その人のなまりはとれないもの。

601. 言葉は心の使い（ことばはこころのつかい）

心に考え思っていることは、自然に言葉に表れる。

602. 言葉は立ち居を表わす（ことばはたちいをあらわす）

言葉はその人の性行を表わすものである。

603. 言葉は身の文（ことばはみのあや）

言葉はその人の品格をあらわすものである。

604. 子供の喧嘩に親が出る（こどものけんかにおやがでる）

子供どうしのたわいもない喧嘩は、子供にまかせておけばよいのに、その親がおとなげもなく出て来て、親どうしの喧嘩になる。

605. 碁に凝ると親の死に目に会えない（ごにこるとおやのしにめにあえない）

遊びごとにふけると、とかくやめられないことをいう。

606. 碁に負けたら将棋で勝て（ごにまけたらしょうぎでかて）

あることに負けたら、他のことで償え。ファイトを燃やして、ともかく負けっぱなしになっているな、という意味。

607. 子の心親知らず（このころおやしらず）

親は自分の子の本当の心は案外わからないで、過大評価や過小評価しがちなものである

608. 子は鋸（こはかすがい）

子は夫婦の仲をつなぎ止める鋸(材木を堅くつなぐための両端が曲がった釘)である。子に対する愛情のおかげで、仲の悪い夫婦間の縁がつながり保たれることが多い、という意味。

609. 琥珀は腐芥を取らず（こはくはふかいをとらず）

こはくは軽いちり紙を吸い付ける性質があるが、くさったごみは吸わない。清廉潔白な人は不正な金品には手をつけないことにたとえる。

610. 子は三界の首枷（こはさんかいのくびかせ）

子は親にとって、この三千世界を生きていくのを妨げる首枷(罪人の首にはめて自由を束縛する刑具)のようなものである。親は子を思う心のために自分の意志を曲げて一生自由を束縛されがちである、という意味。

611. 米の飯より思召（こめのめしよりおぼしめし）

ごちそうもありがたいが、それよりもその志がなおありがたい。物の大小よりも、その気持ちが喜ばれること。

612. 子養わんと欲すれども親待たず（こやしなわんとほつすれどもおやまたず）

子が親を養おうと思っても、親はそれまで待っていてくれない。親の生きているうちに孝行せよ、という意味。

613. 子故の闇（こゆえのやみ）

子への愛情のために、親が分別を失い善悪の判断がつかなくなるのをいう。子故の闇に迷う。

614. 転ばぬ先の杖（ころばぬさきのつえ）

何かにつまずいて転ばないように、杖を突いて用心する。失敗しないようにあらかじめ十分に準備しておく、という意味。

615. コロンブスの卵（ころんぶすのたまご）

アメリカ大陸発見などだれにでもできることだという陰口を聞いたコロンブスが、食卓の上のゆで卵を立ててみるようにと言ったが、だれにもできなかつた。そこでコロンブスは卵の尻をつぶして立ててみせ、アメリカ発見もこれと同じで、それなりの創意工夫や努力が必要だと言ったという逸話から、何でも最初に考えたりやったりすることは難しいものだということ。

616. 子を見ること親に如かず（こをみることおやにしかず）

何といても、親が一番わが子の長所や短所を知っている。

【参考】 「子を見ること父に如かず」ともいう。

617. 子をもって知る親の恩（こをもってしるおやのおん）

自分が親になり、子を育てる立場になって初めて、身にしみて親の恩の偉大さ有り難さがわかる、ということ。

618. 子を持つば七十五度泣く（こをもてばしちじゅうごどなく）

親は子のために、心配や苦勞が多いものである。

619. 歲月人を待たず（さいげつひとをまたず）

年月の流れは非常に速くて人を待ってくれないから、今という時を大切にして努力せよ、ということ。

620. 最後に笑う者の笑いが最上（さいごにわらうもののわらいがさいじょう）

あまりに気早に喜んではいけない。最後の勝利を収めた者が快心の笑いを漏らすものである、という意味。

621. 才子才に倒れる（さいしさいにたおれる）

才能にすぐれた人は、自分の才能に頼りすぎてかえって失敗する、という意味。

622. 財布の紐を首に掛けんよりは心に掛けよ（さいふのひもをくびにかけんよりはこころにかけよ）

金を盗まれないように用心するより、無駄遣いしないように注意せよ、という意味。

623. 財宝は地獄の家苞（ざいほうはじごくのいえづと）

金や宝を貯えても、結局はあの世への土産となるにすぎない。蓄財も、考えてみればむなしなものだ、という意味。

624. 魚は殿様に焼かせよ餅は乞食に焼かせよ（さかなはとのさまにやかせよもちはこじきにやかせよ）

魚を焼くときには、何度もいじると身がくずれるから、殿様のような人がよい。餅はたえずひっくり返してこがさないようにしなければならないから、乞食のような人が適任である。魚と餅の上手な焼き方と、何をするにも適任者をえらぶ必要があるということのたとえ。

625. 先立つ物は金（さきだつものはかね）

何をするにも、まず金が必要であることをいう。

626. 先んずれば人を制す（さきんずればひとをせいす）

人より先に物事を行えば他人を押さえて有利になるが、遅れると人に押さえられて不利になる、ということから、先手を打つことが肝要である、という意味。

627. 策士策に溺れる（さくしさくにおぼれる）

駆け引きのうまい人は、あまり自分の策略に頼りすぎて、かえって失敗する。

628. 酒は飲むとも飲まれるな（さけはのむともまるるな）

酒を飲むのはよいが、そのために本心を失うような飲み方はするな。酒に飲まれるような愚はするべきでないという意味。

629. 座して食らえば山も空し（ざしてくらえばやまもむなし）

働かないで食っていれば、どれほどたくさんのお金があっても、やがては使い果たしてしまう、という意味。

630. 鯖を読む（さばをよむ）

利益を得るために、実際の数よりもたくさん有るように言う。単に、数をごまかして言う意にも用いる。

631. 座右の銘（ざゆうのめい）

「座右」は身近の意で、絶えず心に留めておいて、自らの励ましや戒めとする言葉。

632. 猿も木から落ちる（さるもきからおちる）

木登りの巧みな猿でもたまには木から落ちることがある、ということから、その道の達人でも失敗することがあるものだということ。

633. 去る者は日々に疎し（さるものはひびにうとし）

死んでしまった人は、日数がたつにつれて世間からしだいに忘れ去られてゆく。親しかった人も、遠く離れてしまおうしだいに疎遠になる、という意味。

634. 騒ぐ鳥も団子一つ（さわぐからすもだんごひとつ）

騒いでも騒がないでも結果は同じ。あわてても、もがいても、一生は一生だということのたとえ。

635. 触らぬ神に祟りなし（さわらぬかみにたたりなし）

なまじそのことに関わり合わなければ、災いを招くこともない、ということから、余計なことに手出しするのを戒めた言葉。

636. 触り三百（さわりさんびやく）

うっかり触っただけで、三百文の損をする。ちょっと口や手を出しただけで思わぬ損をすることがあるから、引っ込んでいた方がよい、という意味。

637. 座を見て皿をねぶれ（ぎをみてさらをねぶれ）

出席している人たちの意見がどのへんにあるかを見きわめてから、それに合うように発言するのがよい、という意味。

638. 三界に垣なし六道に辺なし（さんがいにかきなしろくどうにほとりなし）

三界へでも六道へでも、各人の心がけ次第でどこへでも行ける。善因には善果が、悪因には悪果が、必然的に生ずるものだ。三界とは、欲界・色界・無色界の三つの世界で、これをいっさいの衆生が生死輪廻する。六道とは、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上で、いっさいの衆生が善悪の業因によって、必ず行かねばならない六種の迷界。「辺」は境界。

639. 山中の賊を破るは易く心中の賊を破るは難し（さんちゅうのぞくをやぶるはやすくしんちゅうのぞくをやぶるはかたし）

心の中に起こる私欲や邪念を打ち破ることは、なかなかむずかしい。精神修養のむずかしさをいった、明（みん）の王陽明（おうようめい）の言葉。

640. 三度目の正直（さんどめのしょうじき）

何かをする時、初めの一、二回は失敗しても、三回目ぐらいにはうまくいくものだということ。

641. 三人行えばわが師あり（さんにんおこなえばわがしあり）
わずか三人でも、一緒に何か仕事をする、その中に手本とすべき人がいるものだ、ということ。
642. 三人市虎を成す（さんにんしこをなす）
根も葉もないうそでも、大勢の人がそう言うと、まことになってしまう、という意味。
643. 三人旅の一人乞食（さんにんたびのひとりこじき）
三人で同じことをすれば、その中の一人は窮乏（きゅうぼう）する。つまり三人のうち一人は貧乏くじをひく。また、三人でする物事は、その中の一人が仲間はずれにされやすい。
644. 三人寄れば公界（さんにんよればくかい）
人が三人集まれば、表向きの場所となる。秘密ではすまされないこと。公界は、公の場所。世間。
645. 三人寄れば文殊の知恵（さんにんよればもんじゅのちえ）
平凡な人間でも、三人寄り集まって考えれば、文殊菩薩の知恵のようにすぐれた知恵が出る、という意味。
646. 三年たてば三つになる（さんねんたてばみつつになる）
時の経過とともに、物事は変化する。歳月は無為には過ぎ去らない意。
647. 三余（さんよ）
勉学に最も適当な三つの時期。冬（歳の余り）・夜（日の余り）・雨（時の余り）。
648. 三楽（さんらく）
君子の三つの楽しみ。父母兄弟が健在であること、心にやましいことがないこと、英才を教育すること、の三つ。
649. 仕上げが肝心（しあげがかんじん）
事は最後のまとめが大切であるということ。
650. 幸せは袖妻に付かず（しあわせはそでつまにつかず）
幸福は身近にころがっているものではない。幸福のたやすく得がたいことにたとえる。

651. 思案の字が百貫する（しあんのじがひゃくかんする）

何事もよくよく考えて、慎重にすることが大切であるということ。

652. 塩を売っても手を嘗める（しおをうってもてをなめる）

塩売りが手についた塩を、むだにせずなめることから、商人が商品を大切にすること。またつまらぬ点まで気をくばって、けちなことにもたとえる。

653. 塩を売れば手が辛くなる（しおをうればてがからくなる）

塩売りの手が辛くなるように、人はその職業によって、それぞれの特長が身につくことのとたとえ。

654. 四海兄弟（しかいけいてい）

世の中の人、すべて兄弟のように仲良く、愛し合うべきであるという意味。

655. 鹿を逐う者は山を見ず（しかをおうものはやまをみず）

鹿を捕らえようとして追い回している者は、獲物にばかり心奪われて山全体を見ず、その深さも忘れて危険な目に遭う、ということから、一つのことに夢中になっている者は、ほかのことを顧みない。目先の利益を得ることに夢中になっている者はほかの事情には気付かない、という意味。

656. 色即是空、空即是色（しきそくぜくう、くうそくぜしき）

この世の有形の万物は、すべて因縁によって生じたもので、その本性は実有のものでないから、空である。しかし、その空無がそのまま、いっさいの現象をなすものである。

657. しくじるは稽古のため（しくじるはけいこのため）

失敗するのは、上達するための稽古を積んでいるようなものだ。失敗を重ねてはじめて成功することができる。

658. 四苦八苦（しくはっく）

非常な苦しみ。あらゆる苦しみ。仏教で、人生の生・老・病・死の四苦に、愛別離苦（あいべつりく）・怨憎会苦（おんぞうえく）・求不得苦（ぐふとくく）・五陰盛苦（ごおんじょうく）の四苦を合わせたもの。

659. 仕事は多勢（しごととはたぜい）

仕事は大勢でやれば、はかどるからとくだ。

660. 仕事を追うて仕事に追われるな（しごとをおうてしごとにおわれるな）

仕事は先へ先へと片づけて、ためてはいけない。

661. 至言は耳に忤う（しごんはみみにさからう）

この上なく適切に言い表した言葉は、とかく人々の耳に痛い場合が多い。

662. 自業自得（じごうじとく）

自分の犯した罪業のために、自分自身にその報いを受ける。

663. 地獄極楽はこの世にあり（じごくごくらくはこのよにあり）

善行悪行の応報は、死後に行く地獄・極楽の結末を待たずとも、この世で眼前にはっきりと現われる。

664. 地獄にも鬼ばかりではない（じごくにもおにばかりではない）

地獄のようなつらいこの世にも、慈悲深い人はいる。

665. 地獄にも知る人（じごくにもしるひと）

どこでも、知人にめぐり会う。どこに住んでも、知人ができる。どの土地でも、知人がいた方が心強い。

666. 地獄は壁一重（じごくはかべひとえ）

正しい道を一步踏みはずすと、たちまち罪悪を犯すようになる。ちょっとした心の緩みで罪悪を犯しやすい、というたとえ。

667. 地獄へも連れ（じごくへもつれ）

どんな所へ行くにしても、道連れがあつたほうがよい。

668. 死して後やむ（ししてのちやむ）

死ぬまで努力してやめない。

669. 死しての長者より生きての貧人（ししてのちょうじゃよりいきてのひんじん）

いくら金があつたところで、死人ではなんにもならない。貧乏でもいいから生きていたほうがよい。

670. 獅子の子落とし（ししの子おとし）

「獅子」はライオンのことで、獅子は子を産むと、その子の強弱を試すために、深い谷に投げ込み、自力で這い上がるものだけを育てると言い伝える。自分の子に辛苦をなめさせてその力を試すことにいう。

671. 私淑（ししゅく）

尊敬する人が過去の人や遠方の人であるため、直接には教えを受けられないが、その著書などによって、間接にその人を模範として慕い学ぶこと。「私」は、ひそかに、の意、「淑」は、よくする意。その人の言行や著書を通じて、ひそかに我が身をよくすること。孟子が百五十年ほど昔の孔子に私淑した故事による。

672. 師匠は鐘の如し（ししょうはかねのごとし）

鐘は大きくつければ大きく鳴り、小さくつければ小さく鳴るが、師匠もその通りで、教わる弟子の熱意の大小によって、その教授の程度が違うという意味。

673. 死生命あり（しせいめいあり）

人の生き死には天命で決まっており、人力ではどうにもすることができない。

674. 地蔵は言わぬがわれ言うな（じぞうはいわぬがわれいうな）

人を疑って口止めしても、うっかり自分がしゃべってしまうことが多い。口には気を付けよということ。

675. 親しき仲にも礼儀あり（したしきなかにもれいぎあり）

どんなに親しい間柄でも礼儀は守らなければならない、という意味で、親しさに任せた言動をすると、仲が悪くなることがある、ということ。

676. 親しき中は遠くなる（したしきなかはとおくなる）

親密すぎると、遠慮がなくなって不和をおこし、かえって疎遠になるものだ。

677. 四知（しち）

二人の間だけの秘密であっても、天と神と相手と自分の四者が知っているから、誰にもわからないとは言えない。後漢の楊震が王密の謝礼の金を断った故事。

678. 七転八起（しちてんはつき）

いくたび失敗しても屈せず、立ちあがって奮闘すること。

679. 七年の病に三年の艾を求む（しちねんのやまいにさんねんのもぐさをもとむ）
普段用意せずに、事あるとき急に求めても得られない。

680. 死中に活を求める（しちゅうにかつをもとめる）
ほとんど死にそうになったところで、やっと生きる道を発見する。助かりそうもないところでようやく逃げ道を見いだす。

681. 疾行には善迹なし（しっこうにはぜんせきなし）
急いでやったことには、よいできのものはない。

682. 知った道に迷う（しったみちにまよう）
よく知りつくしていることで失敗することがあるたとえ。得意のことでかえってしくじるものである。

683. 失敗は成功の本（しっぱいはせいこうのもと）
失敗した時、その原因を究明し反省することによって次には成功するようになる。

684. 実は嘘の奥にあり（じつはうそのおくにあり）
人間だれしも、嘘をついているときは、嘘を意識しているもので、心の底には真実がないわけではない。

685. 師弟は三世（していはさんぜ）
師弟の縁は、過去・現在・未来の三世に渡る深い因縁でつながっている。

686. 自転車操業（じてんしゃそうぎょう）
自転車はペダルを踏むのをやめれば倒れてしまうことから、無理にでも仕事を続けて、次から次へと資金のやりくりをしていかなければ倒産してしまうような、不安定な経営状態。

687. 地頭に法なし（じとうにほうなし）
地頭は無理・非道を平気で行なう。力のある者は横暴であることのとえ。

688. 品玉も種から（しなだまもたねから）
手品をするにも種がいるように、何事をするにも、材料がなければ、手の下しようがないたとえ。品玉は猿楽・田楽などで、玉を使う曲芸。転じて、手品。

689. 死なば四八月（しなばしはちがつ）

どうせ死ぬなら、気候のよい四月・八月に死にたい。何をするにも時期があるたとえ。四月八月は陰暦。

690. 死に金を使う（しにがねをつかう）

効果があがらない金の使い方をいう。

691. 死に花を咲かせる（しにばなをさかせる）

死ぬまぎわになって、死後に名を残すような立派なことをする。また、将来に期待がかけられているうちに死んで、人々に惜しまれる。

692. 死ぬ子は眉目よし（しぬこはみめよし）

とかく早く死ぬ子は、器量がよいものである。早死にした者は惜しまれるたとえ。

693. 死ぬ者貧乏（しぬものびんぼう）

いっしょに事に当たったものうち、死んだ人は最も不幸で、生きている者だけがその利益を占める。

694. 芝居は無筆の早学問（しばいはむひつのはやがくもん）

本を読めない者でも、芝居を見れば、歴史上の事実や義理人情・理非曲直（りひきよくちよく）について教えられ、手っ取り早い学問の場となる。テレビや映画も同じである。

695. 駟馬も追う能わず（しばもおうあたわず）

一度口にした以上は、とりかえしのつかないことのたとえ。言葉の慎まねばならないのという。「駟馬」は四頭だての馬車。速い乗り物のこと。

696. 自分の盆の窪は見えず（じぶんのぼんのくぼはみえず）

自分の欠点には気がつかない。

697. 耳聞は目見に如かず（じぶんはもくけんにしかず）

耳で聞いて得た知識よりも、目で見た見識のほうが確かである。聞きかじりよりも、体験によって得た知識が正確である。

698. 慈母に敗子あり（じぼにはいしあり）

母親が甘やかして育てると、ふしだらな子ができる。

699. 自慢高慢馬鹿のうち（じまんこうまんばかのうち）

自分で自分のことを自慢するのは、ばかの仲間である。

700. 自慢は知恵の行き止まり（じまちはちえのゆきどまり）

自慢をするようになると、その人の知恵・進歩が止まってしまう。

701. 駟も舌に及ばず（しもしたにおよばず）

言いそこないは取り消しがきかないこと。

702. 霜を履んで堅氷至る（しもをふんでけんぴょういたる）

災いが少しでも兆してくると、やがて大きな災難がやってくる意。霜が降りると、間もなく堅い氷が張る寒い冬がやってくる。物事は最初の時に用心することが大切である、ということ。

703. 釈迦に説法（しゃかにせっぽう）

その方面のことによく通じている人に、いまさらのように何かを教えるのは無駄でばかげている、ということ。

704. 釈迦に説法孔子に悟道（しゃかにせっぽうこうしにごどう）

釈迦に仏法を説いたり、孔子に人の道を説いたりする。自分よりもよく知っている人に対して教えること。説明する必要のないことをくどくど言うこと。

705. 杓子は耳搔きの代わりにならず（しゃくしはみみかきのかわりにならず）

大きなものは小さな場所では使えない。

706. 尺も短き所あり寸も長き所あり（しゃくもみじかきところありすんもながきところあり）

尺の長いものでも、時には短くて足らぬ事があり、寸の短いものでも、時には長くて余ることがある。賢者も事によって愚者に劣ることがあり、愚者も事によっては賢者にまさることがある。

707. しゃべる者は半人足（しゃべるものははんになんそく）

仕事をしながらしゃべる者は、半人前しかできない。仕事に雑談は禁物。

708. 沙弥から長老にはなれぬ（しゃみからちょうろうにはなれぬ）

小僧から一足とびに高僧にはなれないのと同様に、物事にはすべて順序があって、一足とびにはなれないたとえ。沙弥とは仏門に入ったばかりの小僧。

709. 麝あれば香し（じゃあればかばし）

じゃこうにある場所は、自然にいいにおいがただよっている。才能のある者は、自然に世の中にあられる。

710. 弱肉強食（じゃくにくきょうしょく）

弱い者が強い者に征服される意。弱い者の肉が強い者の食べ物になること。

711. 蛇の道は蛇（じゃのみちはへび）

大蛇の通る道は、蛇ならばおのずからわかるはずだ。同じ仲間のことはその道の者にはすぐわかる。同類のものは互いにその事情に通じている、という意味。

712. 蛇は寸にして人を呑む（じゃはすんにしてひとをのむ）

大蛇は一寸くらいの小さいころから、自分よりはるかに大きな人間を呑むほどの勢いがある。偉人や英雄は幼少の頃から常人と違った気概があるというたとえ。

713. 衆寡敵せず（しゅうかてきせず）

人数の差がありすぎて勝ち目がないこと。多人数には少人数はかなわない意。多勢（たぜい）に無勢（ぶぜい）。

714. 習慣は自然の如し（しゅうかんはしぜんのごとし）

習慣は、いつの間にか身にうつり染まって、ついにその天性のようになる。

715. 習慣は第二の天性なり（しゅうかんはだいにのてんせいなり）

習慣が人の性行に影響することはきわめて大きい。

716. 衆曲は直を容れず（しゅうきょくはちよくをいれず）

多数の悪人の中では、少数の正しい意見は取り入れられない。多数の悪に、少量の善はのまれてしまう。

717. 衆口金を鑠す（しゅうこうきんをとかす）

讒言（ざんげん）の恐ろしいたとえ。多くの人的一致して言う言葉は、金属をもとかすほどの力があるという意味。

718. 衆口は禍福の門（しゅうこうはかふくのもん）

民衆の言った言葉のために、わざわざを招いたり、幸福を得たりすることが多いから、常に世論の動向に注意せねばならない。

719. 終身齊家治国平天下（しゅうしんせいにかちこくへいてんか）

天下を治めるには、まず自分の身を修め、次に家庭を平和にし、次に国を治め、最後に天下を平定統治するという順序に従わなければならない。儒教の根本理論。

720. 舟中も敵国（しゅうちゅうもてきこく）

同じ舟に乗り合わせた者は、利害が共通であるが、心変わりすれば敵となる。味方たる者も、心をひるがえせば、たちまち敵となるというたとえ。

721. 珠玉の瓦礫に在るが如し（しゅぎょくのがれきにあるがごとし）

立派な宝石が、かわらや小石にまじっているように、英才が凡人の群れにまじっているのにたとえる。

722. 朱に交われば赤くなる（しゅにまじわればあかくなる）

人間は交際する友達や身を置く環境を受けやすく、それによって良くも悪くもなるものだという事。友人の感化力の大きさ、友人を選ぶことの重要性をいう言葉。

723. 駿足長阪を思う（しゅんそくちょうはんをおもう）

足の速い良馬は、長い坂道があればよいと思う。有能な人は、むしろ困難なことが起こればよいと願う。

724. 駿馬痴漢を乗せて走る（しゅんめちかんをのせてはしる）

せっかくの名馬が、つまらぬ男を乗せて走る。美人が下らぬ男の言いなりになっていることなどに使われる。とかくこの世はうまくいかないたとえ。

725. 十人十色（じゅうにんといろ）

好みや考えなどは、人によってそれぞれ異なるものだ、ということ。

726. 十人寄れば十国の者（じゅうにんよればとくにのもの）

大勢よれば、風俗・習慣いろいろ違った国の人々がまじっている。

727. 十年一昔（じゅうねんひとむかし）

十年経てば世の中は変わらないようでも何らかの変化が見られ、「今」から見れば「昔」ととらえられる、ということ。

728. 柔よく剛を制す（じゅうよくごうをせいす）

弱い者がかえって強い者に勝つ。柔軟性のあるやり方によって、かえって剛強な者を押さえつけることができる。

729. 獣を得て人を失う（じゅうをえてひとをうしなう）

獣は手に入れたが、そのために人命を失った。つまり、得るところが少なくて、失うことが多いことにたとえる。

730. 数珠ばかりでは和尚は出来ぬ（じゆずばかりではおしょうはできぬ）

形だけでは役に立たないたとえ。外形だけをまねてもだめだ。

731. 正直は一生の宝（しょうじきはいっしょうのたから）

正直にしていると他からの信用を得るのみならず、自ら精神的にも満ち足りるから、正直という美德は一生守るべき宝である。

732. 正直者が馬鹿を見る（しょうじきものがばかをみる）

悪賢い者は、ずるく立ち回って得をするのに対して、正直者は、まじめなためにかえって損をし、人から愚か者呼ばわりされることすらある。

733. 小事は大事（しょうじはだいじ）

小事だと思っておろそかにすると、それが大事を引き起こすものになるから、小事は大切である。

734. 生者必滅（しょうじゃひつめつ）

生ある者は必ずいつかは死に滅びる。この世の無常をいう言葉。

735. 小人閑居して不善を為す（しょうじんかんきよしてふぜんをなす）

考えが浅く品性の劣っている人間は、暇があるとよくないことをする、という意味。

736. 小人の過ちや必ず文る（しょうじんのあやまちやかならずかざる）

小人は過ちをおかした場合、これを悔い改めようとはしないで、これをうまくつくろって、その場をすまそうとする。

737. 小人の心を以て君子を量る（しょうじんのこころをもつてくんしをはかる）

自分の卑しい心を標準として、君子もそのようであろうと推しはかる。

738. 小水石を穿つ（しょうすいいしをうがつ）

少しの水でも、絶えず流れていれば、ついには石をすりへらして穴をあける。つまり、怠らずにつとめれば、どんな難事でも成しとげることができるというたとえ。

739. 焦頭爛額上客となる（しょうとうらんがくじょうかくとなる）

火事がおこる前に、予防する方策を立てた者はほめられず、火事がおこってから頭をこがし、額をただらせて救った者がほめられる。根本を忘れて末節のみをよしとすることのたとえ。また、参謀や文官は世に出ないが、戦功の武将だけが世の賞賛を受けるたとえ。

740. 少年老い易く学成り難し（しょうねんおいやすくがくなりがたし）

月日がたつのは早く、若いと思っけていてもすぐ年を取ってしまい、学問はなかなか成就しにくい。だからわずかな時間でも惜しんで勉強しなければならない。

741. 少年よ大志を抱け（しょうねんよたいしをいだけ）

若者は大いに雄大な抱負を持って努力せよ。激励の言葉。

742. 商売は草の種（しょうばいはくさのたね）

商売の種類は、考えもつかないほど多く、とても数えきれものではない。商売の種は尽きないこと。

743. 商売は道によりて賢し（しょうばいはみちによりてかしこし）

それによって生計を立てている人は、その専門の分野には、さすがによく通じているものである。

744. 勝負は時の運（しょうぶはときのうん）

勝ち負けはその時の運によって左右される。予想通りにはならないし、勝っておごることも、負けて落胆することもない、という意味。負けた人を慰める言葉。

745. 正法に不思議なし（しょうほうにふしぎなし）

正しい教えには何も不思議なことはない。不思議があるのは邪教である。

746. 消滅滅已（しょうめつめついで）

生死の世界を脱して、悟りの世界に入ること。生と滅とがなくなって、共に存しないことからいう。

747. 将門に将あり（しょうもんじょうあり）

大将の家柄からは、やはり将軍が出る。名家からは名士が出る。

748. 証文の出し遅れ（しょうもんのだしおくれ）

時機に遅れて役に立たないことのとえ。証拠になる書類を提出すれば自分が有利になるのに、その時機に遅れて効力を発揮しないこと。

749. 小利大損（しょうりだいそん）

わずかな利益を得ようとして、そのためにかえって大損をすること。

750. 諸行無常（しよぎょうむじょう）

この世のすべてのものは絶えず移り変わり消滅するもので、一刻の間も同じ状態を保つことがない。仏教の根本的な考え方の一つで、人生のはかなさをいう言葉。

751. 初心忘る可からず（しよしんわするべからず）

何事によらず習い初めのときの、謙虚で真剣な気持ちを失ってはならないということ。世阿弥（せあみ）が能楽の修業について言ったことばに基づく。

752. 蜀犬日に吠ゆ（しよっけんひにほゆ）

見識の狭い人が賢人のすぐれた言行を怪しみ疑って非難するたとえ。

753. 上医は国を医す（じょういはくにをいす）

すぐれた医者は、戦乱や悪い風俗などをなおすのが第一のつとめで、個人の病気をなおすのはその次である。これより医者を国手という。

754. 盛者必衰（じょうしゃひつすい）

今現在勢い盛んに栄えている者も、いつかは必ず衰える。この世は無常であることをいう言葉。

755. 上手の手から水が漏れる（じょうずのてからみずがもれる）

どんなに上手な人でも、時には失敗することがある。普段は全く危なげなく何かをしている人が、たまたま失敗したときに言う言葉。

756. 知らざるを知らずとなせ これ知るなり（しらざるをしらずとなせ これ知るなり）
知らないことは知らないとせよ。知っていることと知らないことを区別する、それがほんとうに物事を知っていることである。知らないことを知っているように繕っているのは、知識も学問も進まない。

757. 知らずは人真似（しらずはひとまね）
自分の知らないことをやる時は、人のする事をまねるのが無難である。

758. 知らぬが仏（しらぬがほとけ）
知ればこそ腹も立つが、知らなければ心が仏のように穏やかでわだかまりもない。当人だけが事件や真相を知らずにのんきに構えているのをあざけていう場合にも使う。

759. 知らぬは亭主ばかりなり（しらぬはていしゅばかりなり）
女房の情事を知らないでいるのは、町内でその当の亭主だけである。浮気されている（肝心なことを知らないでいる）夫の間抜けさをあざけていう語。

760. 知らんがために我信ず（しらんがためにわれしんず）
自分が信じるのは、更に進んでその真理を認識するためである。スコラ哲学の創設者アンセルムスの言葉。

761. 芝蘭の室に入るが如し（しらんのしつにいるがごとし）
善人と共にいると、知らないうちにその人の感化を受けて、善人になるというたとえ。

762. 尻馬に乗れば落ちる（しりうまにのればおちる）
他人の言動をまねたり、他人のすることに便乗して考えずに行なうと失敗する。「尻馬に乗る」は、無批判に他人の言説に雷同することをいう。

763. 知る者は言わず言う者は知らず（しるものはいわずいうものはしらず）
深く事情に通じた人、知識のある人は、みだりにそれを口にしないが、未熟な者はかえってぺらぺらと口にすることである。

764. 士を好めば士至る（しをこのめばしいたる）
君主が賢士を好めば、賢士はおのずから集まってくる。賢士が世にいないのではなく、賢士を招こうとしないからだ、という意味。

765. 詩を作るより田を作れ（しをつくるよりたをつくれ）

実生活に直接関係のない風流なことより、実利のある仕事をせよ、という意味。

766. 親炙（しんしゃ）

その人に近づき親しんで直接に感化を受けること。「炙」は、火であぶる意。肉を火で焼くように、立派な人に近づき直接に教えを受けること。

767. 信心過ぎて極楽を通り越す（しんじんすぎてごらくをとおりこす）

信心にこりすぎて、かえって邪道におちいるたとえ。

768. 信心は徳の余り（しんじんはとくのあまり）

信心も生活にゆとりができてからのことで、衣食住に追われていては信心の起こる暇もない。

769. 身体髪膚これを父母に受く（しんたいはっぷこれをふぼにうく）

からだ全体、髪の毛や皮膚に至るまで、すべて父母から受けているものであるから、大切にせよ。

770. 死んでの長者より生きての貧乏（しんでのちょうじゃよりいきてのびんぼう）

死んで長者と尊ばれるよりは、貧乏しても生き残るほうがよい。

771. 死んで花実が咲くものか（しんではなみがさくものか）

「花実」は名声と実利のことで、生きているからこそいいこともあるので、死んでしまっ
ては何にもならない。無駄に命を捨ててはならないということ。

772. 心頭を滅却すれば火もまた涼し（しんとうをめつきやくすればひもまたずし）

どのような苦痛に遭っても、これを超越して心に留めなければ、その苦痛を感じない。

773. 信は莊嚴より起こる（しんはそうごんよりおこる）

信心は寺社の装飾によって始まるの意で、内容はまず形式から導かれることをいう。また、信心も外観や形式に左右されることにいう。

774. 辛抱が大事（しんぼうがだいじ）

何事もがまん強く、最後までやり抜くことが肝心である。

775. 辛抱する木に金なる（しんぼうするきにかねなる）

何事もがまんし辛抱して励む木には、やがて金なるようになる。効果がすぐ現われない
とって投げ出すのではなく、なによりも辛抱強さが大切である、という意味。

776. 辛抱は金挽臼は石（しんぼうはかねひきうすはいし）

ひきうすは石でできており、心棒が鉄でできていることから、それにかけて、忍耐せねば
金持ちになれないことをいう。

777. 神明に横道なし（しんめいにおうどうなし）

神は道理のないことや、不正なことはしない。

778. 森羅万象（しんらばんしょう）

宇宙空間に存在するありとあらゆるもの。「森羅」は、限りなく並びつらなる、「象」は、
形のあるものという意味。

779. 仁者は憂えず（じんしゃはうれえず）

仁者は道理に従ってやましいことがないから、物事に心配しない。

780. 仁者は敵なし（じんしゃはてきなし）

仁者は深い愛をもって人に接するから、天下に敵というものがいない。

781. 仁者は山を楽しむ（じんしゃはやまをたのしむ）

人の道を心得た人は山を愛し好む。それは天命に安んじていて静かで安らかで、山のよう
に動じないからである。

782. 人事を尽くして天命を待つ（じんじをつくしててんめいをまつ）

できる限りのことを全力を尽くして行なった上で、その結果は運を天に任せるだけの意
で、どんな結果になろうと悔いはないという心境を表わす言葉。

783. 人生意気に感ず（じんせいいきにかんず）

人間は金銭や名誉のためではなく、相手の心意気を感じて行動するものである。心と心と
の激しい触れあいが何ものよりも尊い。

784. 人生字を識るは憂患の始め（じんせいじをしるはゆうかんのはじめ）

人間は字を覚える学問をして道理がわかるようになると、そのためにいろいろ心配事が多
くなる。むしろ無学で何も知らないほうが気楽である。

785. 人生朝露の如し（じんせいちょうろのごとし）

人生は、きわめてはかないものである。人の一生は、日が出ればすぐにかわいてしまう朝の露のように、はかないものである。

786. 人生は行楽せんのみ（じんせいはこうらくせんのみ）

人生は短くはかないものであるから、ただおもしろく一生を送ることだ。

787. 粋が川へはまる（すいがかわへはまる）

熟達した者の方がかえって失敗することがある、というたとえ。

788. 粋が身を食う（すいがみをくう）

遊里や芸人社会の事情に通じて粋であるのを誇る人は、やがてその道におぼれて財産をなくし、身を滅ぼす。

789. 酔生夢死（すいせいむし）

何の価値のあることもせず、ただ生きていたというだけの一生を終えること。くだらない一生。酒に酔ったり夢を見たりしているような心地で一生を終わる、という意味。

790. 好いた同士は泣いても連れる（すいたどうしはないてもつれる）

好きで一緒になった夫婦は、どんなにつらいことがあって泣いても、なんとかやっていくものだ、という意味。

791. 未始終より今の三十（すえしじゅうよりいまのさんじゅう）

始終を四十にかけていうもので、将来多く得られるという話よりも、少しでもよいから今すぐ得るほうがよい。先のことであてにならないことのとえ。

792. 末の露 本の雫（すえのつゆ もとのしずく）

葉の先に宿る露と根元に残る雫とは、早い遅いの違いはあるが、消えるのは同じである。人の命は長短の違いはあっても、やがては尽きるものである、という意味。

793. 好きこそもの上手なれ（すきこそものじょうずなれ）

素質とかよい指導者とか、大成するにはいろいろな条件が考えられるが、それが好きであってこそ、熱心に努力するから上達するのである、という意味。

794. 好き連れは泣き連れ（すきづれはなきづれ）

恋愛関係から夫婦になった者は、嫌なことがあっても責任をもたなければならないから、泣き泣き一生を送る。恋愛結婚はうまくいかないものだということ。

795. 好きな事には騙され易い（すきなことにはだまされやすい）

自分の興味のあることというのは、つい深入りしすぎて、人のたくらみに乗りやすい。

796. 好きに赤烏帽子（すきにあかえぼし）

どんな変わったものでも、人は好き好きだということ。

797. 好きには身をやつす（すきにはみをやつす）

好きなことに対しては、自分の身が細るほどに苦労してもいとわないものである。

798. 過ぎぬる事は物申さず（すぎぬることはものもうさず）

もう過ぎてしまったことは何を言っても仕方がない。

799. 過ぎれば似合う焼ければ光る（過ぎればにあうやければひかる）

はじめ不似合いと思われた夫婦も、長年連れ添っていると、似合いの夫婦になるものだ。

800. ずくは小出しにせよ（ずくはこだしにせよ）

自分の持つ力は一度に出し尽くさないで、少しずつ出す方がよい。

801. 少しきを救わざれば大破に及ぶ（すこしきをすくわざればたいはにおよぶ）

少しの損害をほおっておくと、次第に大きな損害になり、どうしようもなくなる。

802. 進まざる物は地歩を失う（すすまざるものはちほをうしなう）

一瞬の停滞もあってはならないということ。

803. 進む者は退き易し（すすむものはしりぞきやすし）

功をあせり軽はずみな行動をすればかえって失敗してしまうこと。

804. 進むを知りて退くを知らず（すすむをしりてしりぞくをしらず）

時機を見て退いた方が効果があるにもかかわらず、進むことしか考えないこと。いのしし武者。

805. 雀の千声鶴の一声（すずめのせんこえつるのひとこえ）

つまらぬ者の千言より、すぐれた人の一言の方がずっと価値があること。中心人物が一言いえばおさまることのたとえ。

806. 雀百まで踊り忘れず（すずめひやくまでおどりわすれず）

雀は死ぬまで飛び跳ねる癖が抜けない、ということから、幼少時から身にしみ込んだ習慣は、年を取っても改めにくい。年を取っても道楽の癖が直らないことなどにいう。

807. 棄て子は世に出る（すてごはよにでる）

親からさえ棄てられた者は、世間の荒波によく耐え、心身を鍛えるので案外出世するものである。

808. 捨て物は拾い物（すてものはひろいもの）

人の投げ捨てたものを拾ってもかまわない。拾った方が得である。

809. 捨てる神あれば拾う神あり（すてるかみあればひろいかみあり）

自分を見捨てる神があるかと思うと、その捨てられた自分を助ける神もある。人間の運命は神まかせであり、その神も複数で、運は必ずついてくるものである、という意味。

810. 砂の底から玉が出る（すなのそこからたまがでる）

なんの価値もないものの中にも、まれには貴重なものがまじっていること。

811. 拗者の苦笑（すねもののがわらい）

変わり者が、自分より上手を見て思わず苦笑すること。上には上があるというたとえ。

812. すべての道はローマに通ず（すべてのみちはろーまにつうず）

一つの真理にあらゆることが適用される。また、ある目的を達するのに手段は幾つもある、という意味。

813. 住めば都（すめばみやこ）

住み慣れれば、どんな所でも住み心地がよくなっていくものであるということ。

814. するは一時名は末代（するはいちじなはまつだい）

なすべき事はきちんとしなければならぬということ。事をなすための苦労は一時のことだが、しなかったための不名誉は永久に残る。

815. 寸進尺退（すんしんしゃくたい）

少し進んで大きく後退すること。得るものは少なく、失うところが大きいことのとえ。

816. 寸前尺魔（すんぜんしゃくま）

少し善い事があると、次には大きな悪いことが起こる。とかくこの世の中は善い事には邪魔が入りやすいものである、という意味。

817. 寸の鉄を切ること無し（すんのかねをきることなし）

短い鉄を切るには、相当の技術を要する。小さなことでも馬鹿にはいけないということ。

818. 青山ただ青を磨く（せいざんただせいをみがく）

青々と茂った山がいつまでもその美しさを失わないように、君子もまたその徳を失うことはない。

819. 精神一到何事か成らざらん（せいしんいつとうなにごとかならざらん）

精神を集中して努力すれば、どんな困難なことでも出来ないことはない。精神力の大切なことをいった語。

820. 聖人に夢無し（せいじんにゆめなし）

聖人は心がいつも安らかで、清らかであるから、雑夢などみないで安眠する。

821. 聖人は褐を被て玉を懐く（せいじんはかつをきてたまをいだく）

聖人は外見上は粗末であるが、玉のように美しく汚れのない心を持っている。

822. 井中星を視る（せいちゅうほしをみる）

井戸の中から星を見ればわずかしか見えない。私心にとらわれて物事を見れば、正しい全容を知ることには出来ない。広い心で物事を見なさいということ。

823. 晴天をほめるには日没を待て（せいてんをほめるにはにちぼつをまて）

朝、晴れていたからといっても、夕方にならなければその日の天気はわからない。人の幸も死ぬまではなんとも言えない。

824. 盛年重ねて来たらず（せいねんかさねてきたらず）

若い元気のよい時は一生のうち二度と来ないから、その時代を無駄に過ごしてはいけない、ということ。

825. 生は寄なり死は帰なり（せいはいきなりしはきなり）

人がこの世に生きているのは、短い間仮に身を寄せているのであって、死ぬということは、本来いたはずの所へ帰るようなものである。

826. 生は死の始め（せいはいのはじめ）

この世に生まれるということは、やがて死んであの世の人となる始まりである。

827. 生命ある所希望あり（せいめいあるところきぼうあり）

生きている限り、人間は何らかの希望を持つものである。希望と忍耐をもって、人生を生きるべきである。

828. 成立の難きは天に升るが如し（せいりつのがたきはてんにのぼるがごとし）

物事を成就させるということは、人間が天に昇るくらいにむずかしいものである。少しも気を抜けない。

829. せかせか貧乏ゆっくり長者（せかせかびんぼうゆっくりちょうじゃ）

あくせく働くばかりが能ではない、ということ。

830. 積悪の家には必ず余殃あり（せきあくのいえにはかならずよおうあり）

積もり積もった悪行の報いとして、必ず子孫にまで及ぶ災いがある。

831. 積羽舟を沈む（せきうふねをしずむ）

羽のように軽いものでも、たくさん積み重ねれば舟を沈めるほどになる、ということから、小さい事でも、積み重なれば大事を引き起こすことになる、という意味。

832. 赤心を推して人の腹中に置く（せきしんをようしてひとのふくちゅうにおく）

人に接するのに、少しの隔てもなく真心をもってすること。

833. 積善の家に余慶あり（せきぜんのいえによけいあり）

善行をたくさん積み重ねた家には、その報いとしてきっと子孫にまでおよぶ幸福がある、ということ。「余慶」は、先祖の善行のおかげで子孫が受ける幸福。

834. 世間は張り物（せけんははりもの）

いろいろ苦しい内実があっても、何かと世間体を取り繕うのが自然の人情である。

835. 世間は広いようで狭い（せけんはひろいようでせまい）

世の中は広いように見えても意外に狭いものだの意で、全く予想していなかった人に偶然会ったり、一部の人しか知らないと思っていた情報が思いがけないところに伝わっていたりした時に用いる。

836. 世間を狭くする（せけんをせまくする）

失敗などをして世間の信用をなくし、付き合いも少なくなる。

837. せちせち貧乏のらり果報（せちせちびんぼうのらりかほう）

日ごろ、けちけちして、夢中で働いている者が案外貧乏で、いつものらりくらいして、大して働いているようにも見えない者が、案外幸運に恵まれている。世の中は案外、不公平なものだ。

838. 切磋琢磨（せつさたくま）

学問や道徳に努め励むこと。また、友人同士が互いに励まし合って向上をはかることをいう。玉や石や象牙の類を、切ったり、磋（と）いだり、琢（う）ったり、磨（みが）いたりして、立派に完成することにたとえる。

839. 節は時を嫌わず（せつはときをきらわず）

時節が来たら、日のよしあしは問題でない。すぐに着手する。思い立ったが吉日である。

840. 背中に眼はない（せなかにめはない）

後のほうは見えない。かげでこっそりやる悪事には気がつかないたとえ。

841. 銭ある時は鬼をも使う（ぜにあるときはおにをもつかう）

銭さえあれば、どんな者をも使うことができる。学歴はなくとも金があれば、大学出をあとで使える。

842. 銭ある者は生き銭なき者は死す（ぜにあるものはいきぜになきものはしす）

銭があれば死ぬ病人も助かり、銭がなければ生きる命も助からない。人間万事金の世の中、医者も裁判も金の力に弱い。

843. 銭あれば木仏も面をかえす（ぜにあればきぶつもつらをかえす）

どんな冷淡な者でも、金のあるほうには顔を向ける。金の力になびかない者はない。「木仏」は、木でつくった仏像。転じて感情の冷ややかな人。

844. 銭なき男は帆のなき舟の如し（ぜになきおとこはほのなきふねのごとし）
銭のない男は、帆のない舟のように動きがとれない。銭がなければ、男は活動できない。

845. 背に腹は代えられぬ（せにはらはかえられぬ）
背中のことのために腹を代用することはできない。目前の重大なことのためには他を犠牲にすることもやむを得ない、という意味。

846. 銭は銭だけ（ぜにはぜにだけ）
銭を出せば、それだけの値打ちのものが手にはいる。

847. 是非は道によって賢し（ぜひはみちによってかしこし）
物事のよしあしの判断は、そのことの専門の者がよくできる。

848. 狭き門より入れ（せまきもんよりいれ）
事をなすのに楽な方法をとるよりは、かえってはいりにくい苦しい方法をとるほうが、自分を鍛え上げるのにはよい。

849. 瀬を踏んで淵を知る（せをふんでふちをしる）
まず浅いところを渡ってみて、深い場所を知ることから、まずやさしいことを試してみたら、危険な場所を知る。

850. 善悪は地獄極楽（ぜんあくはじごくごくらく）
善悪は来世のものというが、この世にもあって、人の心の善悪がこの世の地獄・極楽をつくるものだ。

851. 先覚者（せんかくしゃ）
学問や見識にすぐれた人。世間の人に先んじて、物事の道理や移り変わって行く先を覚（さと）る人。

852. 千金の子は市に死せず（せんきんのしはいちにしせず）
金持ちの者は、自分の身を大切にするから、町なかで人と争って死ぬような軽はずみなことはしない。転じて、大望のある者は、つまらぬ者の手にかかって死ぬようなことをしない。

853. 千鈞も船を得れば則ち浮かぶ（せんきんもふねをうればすなわちうかぶ）
重い物でも船に乗せれば浮かぶし、軽いものでも船がないと沈む。賢者も地位があつてこそ、その手腕を発揮することができるの意。

854. 千石万石も米五合（せんごくまんごくもこめごごう）
千石万石の知行とりでも、食べる米は一日五合で、普通の人と変わりはない。欲張っていくら金をためてみても、死んでしまえば、行く先は同じだ。

855. 前車の覆るは後車の戒め（ぜんしゃのくつがえるはこうしゃのいましめ）
前人の失敗は後人の戒めとなる。前に行く車がひっくり返るのを見たら、後から行く車は注意せよ、という意味。

856. 善者は弁ならず弁者は善ならず（ぜんしゃはべんならずべんしゃはぜんならず）
善人は黙々として実行し、口に出して言わない。よくしゃべる者は善人ではない。

857. 前事の忘れざるは後事の師なり（ぜんじのわすれざるはこうじのしなり）
前に行なったことを忘れなければ、後で事をおこすのによい参考になる。

858. 先生と言われる程の馬鹿でなし（せんせいといわれるほどのばかでなし）
先生と言われていい気になるほどの馬鹿ではない。先生という言葉は気軽に使う言葉で、言うほうにはそれほど敬う気がないのだから、それを真に受けて大きな顔をするのは愚かである、という意味。

859. 千日の萱を一日（せんにちのかやをいちにち）
千日もかかって刈ったかやを、たった一日で燃してしまう。長い間苦勞したものを、一度にだめにしてしまうたとえ。

860. 先入主となる（せんにゆうしゅとなる）
最初に頭に入ったことが自分の考えを支配し、他の違った考えが受け入れられず、自由な思考が妨げられること。固定観念が作られてしまふとなかなか破りにくい意。

861. 千人の指さす所病なくして死す（せんにんのゆびさすところやまいなくしてしす）
千人もの大勢の人に後ろ指をさされれば、たとえ病気がなくとも死ぬ。

862. 善に従うこと流るるが如し（ぜんにしたがうことながるるがごとし）
善とわかれば、これに従うことが、ちょうど水の流れるようで、少しもさからうことなく、速やかなことにいう。
863. 善に強い者は悪にも強い（ぜんにつよいものはあくにもつよい）
善に熱中する人は、いったん悪に向かえば、悪にも強い。極端に走る性格をいう。
864. 善人と居れば芝蘭の室に入るが如し（ぜんにんといればしらんのしつにいるがごとし）
善人といっしょにいれば、自然に感化されて、自分も善人になることをいう。
865. 善は急げ（ぜんはいそげ）
良いと思ったことは、機会をのがさずすぐ実行する方がいいということ。
866. 千篇一律（せんぺんいちりつ）
どれもこれも変わりばえがなく、面白味がないこと。多くの詩篇がみな同じ調子で作られていること。
867. 千万人と雖も我往かん（せんまんにんといえどもわれゆかん）
自分自身を反省してやましいことがなければ、たとえ敵が千万人いたとしても、わたしは自分の意見を主張し向かって行こう。
868. 千里の行も足下に始まる（せんりのこうもそっかにはじまる）
千里も遠いところに旅行する場合にも、その第一歩は足下から始まる、ということから、どんな大きな仕事も手近なところから始まる、という意味。
869. 千里の道も一歩から（せんりのみちもいっぽから）
千里もの遠い旅路も、足もとの第一歩から始まる。遠大な事業も手近なところから始まる、という意味。
870. 千慮の一失（せんりょのいっしつ）
賢い人でも多くの考えの中には失策もあるということから、十分に注意していたにもかかわらず、思いがけない失敗をする様子。

871. 千慮の一得（せんりょのいっとく）

愚かな人でも多くの考えの中には一つや二つのよい考えがある。

872. 善を責むるは朋友の道なり（ぜんをせむるはほうゆうのみちなり）

互いに善を行なうようにと強く相手に要求するのは、友人の間の正しい在り方である。

873. 善を善として悪を悪とす（ぜんをぜんとしてあくをあくとす）

善と善とをはっきり区別すること。また善悪をありのままに書くこと。

874. 滄海の遺珠（そうかいのいしゅ）

大海に取り残された真珠のこと。世に知られずに、埋もれている賢者にたとえて言う。

875. 滄海の一粟（そうかいのいちぞく）

大海中の一粒のあわの意から、広大なものの中の、きわめて小さいもの。宇宙における人間の存在など、はかないことにたとえる。

876. 創業は安く守成は難し（そうぎょうはやすくしゅせいのかたし）

新たに事業を起こすことよりも、その事業を維持して衰えないようにすることは、いっそう難しいことである。

877. 滄桑の変（そうそうのへん）

世の中の移り変わりの激しいことのたとえ。「滄海変じて桑田となる」の意で、「滄海」は青々とした大海原が、変じて桑畑となる、という意味。

878. そうは問屋が卸さない（そうはとんやがおろさない）

問屋は客の期待するような安値では卸してくれない、ということから、自分に好都合なことばかりを考えても、物事はそううまく期待通りにはいかない、ということ。

879. 草履はき際に仕損じる（ぞうりはきぎわでしそんじる）

いざ仕事を終えて、帰ろうとするまぎわに、ぼろを出す。もう一息というところで失敗するたとえ。

880. 倉廩実ちて礼節を知る（そうりんみちてれいせつをしる）

生活が安定し余裕ができて初めて礼儀や節度のわかまえるべきを知る。生活に困っている、は、礼儀作法を守れない。

881. 即身成仏（そくしんじょうぶつ）

人間がこの肉身のままでも、仏になるということ。つまり、自分の心の外には、仏は存在しないという真言密教独特の教義。

882. その国に入ればその俗に従う（そのくににいればそのぞくにしたがう）

その土地に行ったら、その土地の風俗や習慣に従うがよい。

883. その子を知らざればその友を視よ（そのこをしらざればそのともをみよ）

子の性行を知るには、その付き合っている友をみればわかる。人の性行は友人の感化によることが多いからである。

884. それにつけても金の欲しさよ（それにつけてもかねのほしさよ）

どんな上の句に付けても、それらしく聞こえるので有名な下の句。何事に付けても金さえあればうまく行くのだが、金がないばかりに苦勞するということ。

885. そろそろ行けば田も濁る（そろそろゆけばたもにごる）

物事はさっと片づけたほうがよい。ぐずぐずしていると、ぐあいの悪いところも出てくる。

886. 損せぬ人に儲けなし（そんせぬひにもうけなし）

商売はたまに損することあって、またもうけがあるもの。いつも利益ばかりを考えていたのでは、結局は大きなもうけができないということ。

887. 存養（そんよう）

人間が生まれつき持っている善の心を養い育てること。

888. 大廈の材は一丘の木にあらず（たいかのざいはいつきゅうのきにあらず）

大きい建物の用材は、一つの山から切り出した木だけではない。大きな事業は、必ず大勢の力によるもので、決してひとりの力ではできないことのたとえ。

889. 大廈の顛れんとするや一木の支うるところに非ず（たいかのたおれんとするやいちぼくのささうるところにあらず）

国家が滅びそうになった時には、一人の力ではどうすることもできないたとえ。「大廈」は大きな建物。大きな家が倒れそうな時には、とても一本のつかい棒で支えられるものではない、という意味。

890. 大姦は忠に似たり（たいかんはちゅうににたり）

大悪人は、うまく表面をつくろってなかなかしっぽを出さないから、かえって忠誠な人のように見える。

891. 大器晩成（たいきばんせい）

「大器」は大きな器物。大きな器物は簡単には出来上がらない。器物を人物にたとえた話で、大人物は若いころは目立たず、年を取ってから大成する、という意味。

892. 大疑は大悟の基（たいぎはたいごのもとい）

大きな疑いを持つことによって大きな悟りを得ることができる。疑いを持たなければ悟りを開くことはできない。

893. 大魚は小池に棲まず（たいぎよはしょうちにすまず）

大きな魚は、小さな池にはすまない。同様に、大人物はつまらぬところで、あくせくとして働かない。

894. 大賢は愚なるが如し（たいけんはぐなるがごとし）

非常に賢い人は、利巧ぶらないから、ちょっと見たところでは、愚か者のようである。

895. 大巧は拙なるが若し（たいこうはせつなるがごとし）

本当に上手なものは、かえって下手なように見える。

896. 大功を成す者は衆に謀らず（たいこうをなすものはしゅうにはからず）

大事業をなしとげる者は、あまり多くの人と相談しないで、自分の判断で行なうものだ。

897. 大功を論ずる者は小過を録せず（たいこうをろんずるものはしょうかをろくせず）

大きなてがらを論じて、これを賞するときは、そのかげに小さな過失があっても、大目に見て追求しない。

898. 太鼓も撥のあたりよう（たいこもばちのあたりよう）

やり方次第で、相手の感応も違うことのとえ。太鼓は大きくたたけば、大きく響き、小さくたたけば、小さく響くことから。

899. 大根食うたら菜っ葉は干せ（だいこんくうたらなっぱはほせ）

大根を食ったら、その葉は捨てないで干しておけば、あとで役に立つ。どんなつまらぬものでも、しまっておけば、役に立つことがあるのとえ。

900. 太山に登りて天下を小とす（たいざんにのぼりててんかをしょうとす）
高山に登って下を見おろすと、すべてのものは小さく見える。すべて観点が高くなると、凡俗の意見や事柄は取るに足らぬものになるたとえ。「太山」は、泰山と同じ、中国五岳の一つ。
901. 大食腹に満つれば学問腹に入らず（たいしょくはらにみつればがくもんはらにはいらず）
食べ過ぎると、頭の働きがにぶくなり、学問しても身につかない。
902. 大樹の下に美草なし（たいじゅのもとにびそうなし）
大木のかげになっているところには、よい草は生えない。人材の進路のふさがっているところには、有能な人は寄ってこないというたとえ。
903. 大人は赤子の心を失わず（たいじんはせきしのこころをうしなわず）
大徳の人はいろいろの事柄に通じていても、あかごのときのすなおで正直な心をいつまでも忘れないで、これを広めて徳を大きくしたものだという意。
904. 大事の中の小事なし（だいじのなかのしょうじなし）
大事をなす場合には小事を問題にしている暇はない、という意味。
905. 大声は里耳に入らず（たいせいはりじにいらず）
高尚な道理は、一般の人には理解されがたい。「大声」は、本来は高尚な音楽、「里耳」は、俗人の耳。
906. 大智は愚の若し（たいちはぐのごとし）
ほんとうに知恵のある人は、一見しただけでは凡人にその偉大さがわからなくて、愚か者のように見える。
907. 大地を見抜く（たいちをみぬく）
非常にすぐれた眼識で、物事を見破る。
908. 大敵と見て恐れず小敵と見て侮らず（たいてきとみておそれずしょうてきとみてあなどらず）
敵が大勢または強くても、恐れずひるまず、少人数でも弱くても、侮らず油断しない。

909. 大徳は小怨を滅ぼす（たいとくはしょうえんをほろぼす）

恩恵が広大であると、わずかな怨（うら）みは自然に消えてなくなってしまう。

910. 大道廢れて仁義あり（たいどうすたれてじんぎあり）

道徳が行なわれている時は人情が醇朴（じゅんぼく）で仁義を唱える必要はないが、道徳が行なわれなくなると世の中に虚偽が多くなって仁義を唱える必要が生じてくる。また、世の中が退廢してくると、義理・人情という美德が表われてくる。

911. 鯛の尾より鯛の頭（たいのおよりいわしのかしら）

大きい団体で、人のしりにつき従うよりも、小さい団体でもよいから、その長になれとのたとえ。

912. 大の虫を生かして小の虫を殺せ（だいのむしをいかしてしょうのむしをころせ）

やむをえぬ場合には、大きなものを救うためには小さなものを犠牲にせよ。

913. 大は小を兼ねる（だいはしょうをかねる）

大きいものは小さいものの効用を合わせ持つ。小さいものより大きいもののほうが有用で、大きいものは小さいものの代わりに使うことができる、ということ。

914. 大病に薬なし（たいびょうにくすりなし）

すべて物事が極端に達したときは、手の施しようがないたとえ。

915. 太平象なし（たいへいしょうなし）

世の中が太平なときには、別にこれといって徴候はあらわれない。それがすなわち太平のしるしであるということ。

916. 大木の下に小木育つ（たいぼくのしたにしょうぼくそだつ）

勢力のある人のもとには、多くの人々が庇護（ひご）されていることのたとえ。

917. 鯛も一人はうまからず（たいもひとりほうまからず）

鯛のようにうまいものでも、一人でポツンとして食べたのではうまくない。食事は大勢でいっしょに食べるのがよいということ。

918. 大勇は怯なるが如し（たいゆうはきょうなるがごとし）

ほんとうに勇気のある人は、落ちついていて、みだりに人と争わないから、ちょっと見ると臆病者のようである。「大勇」はまことの勇気。大事の場合に奮いたつ勇気。

919. 大欲は無欲に似たり（たいよくはむよくににたり）

大きな望みを抱く者は、小さな利益は問題にしないから欲がないように見える。また、大欲の者はとかく欲のために目がくらんで損を招くことが多く、その結果無欲の者と同じことになる、という意もある。

920. 大利は利ならず（たいりはりならず）

大きな利益は、ちょっと見ては、利益のようには見えない。

921. 斃れて後已む（たおれてのちやむ）

倒れて死ぬまでやり通す。生きている限り最大限の努力をし続ける、という意味。

922. 高きに登るには卑きよりす（たかきにのぼるにはひくきよりす）

物事をなすには、すべて一定の順序がある。労を惜しんで、一足とびに行なっては失敗する。

923. 宝の持ち腐れ（たからのもちぐされ）

役に立つものを持っていながら、しまい込んで使わない。才能や手腕がありながらそれを活用しない、という意味。

924. 宝は身の差合わせ（たからはみのさしあわせ）

財産というのは、その持ち主の身命をすくうのに役立つはずのものだ、という意味。

925. 薪を抱きて火を救う（たきぎをいだきてひをすくう）

災害を除こうとして、かえって災害を大きくするたとえ。燃えさかる火を消そうとして、水を持たずに薪を持って行き、かえって火勢を強くする、という意味。

926. 竹の子の親まさり（たけのこのおやまさり）

竹の子の成長が早いことから、子はその親よりすぐれていることのたとえ。

927. 多芸は無芸（たげいはむげい）

いろいろな芸に通じている人は、かえって専門といえる傑出した面が一つもないものである。

928. 他山の石（たざんのいし）

よその山から出た粗悪な石でも、宝石を磨くのに使える、ということから、他の事がらを参考にして自分に役立てること。どんなつまらないこと、また、自分より劣っている人の言行でも、自分の才能や人格を磨く反省の材料とすることができる、という意味。

929. 多勢に無勢（たぜいにぶぜい）

少人数で大勢に向かったのでは、とてもかなわないこと。数の多少で勝負が決まること。

930. 叩けよさらば開かれん（たたけよさらばひらかれん）

何事にせよじっと待っているのではなく、積極的な態度・心構えを執りなさい。新約聖書に「求めよ、さらば与えられん。叩けよ、さらば開かれん」とある。

931. 多々益々辨ず（たたまますべんず）

仕事が多ければ多いほどかえって意欲を燃やし、鮮やかに処理していくの意で、力量が優れ、自分の手腕に余裕があることを表わす。また、何かが多ければ多いほど好都合だの意をも表わす。漢の名将の韓信が、高祖に対して、わたくしは兵力は多ければ多いほど上手に使いこなしますといった故事による。

932. 立ち寄らば大樹の陰（たちよらばおおきのかげ）

身を寄せるならば、小さい木よりも大きい木のほうが安心である。人に頼るならば、勢力のある人のほうが安全で頼りになるという意味。

933. 立つ鳥跡を濁さず（たつとりあとをにごさず）

水鳥は水を濁さずに飛び立って行くの意で、不名誉な汚点を残したり、残る人に迷惑がかかったりしないようにしてそこを去る、ということ。

934. 棚からぼた餅（たなからぼたもち）

棚の下に寝ていたらぼた餅が落ちてきて、ちょうど開いていた口へはいる、ということから、何もしないでいて思いがけず意外なよい運に巡り合う、という意味。

935. 他人の疝気を頭痛に病む（たにんのせんきをずつうにやむ）

他人の腹痛を心配同情して自分も頭痛になる。直接自分に関係のないことに、余計な心配をする愚かしさをいう。

936. 他人の飯を食わねば親の恩は知れぬ（たにんのめしをくわねばおやのおんはしれぬ）

親元を離れて他人のところで生活して苦労してみないと、親の有り難みはわからない。

937. 多弁能なし（たべんのうなし）

ふだんから口数の多い人ほど、いざという時には役に立たないものだ。

938. 玉の扨当なきがごとし（たまのさかずきそこなきがごとし）

見掛けは立派でも実際の役には立たないもののたとえ。「扨」は杯、「当」は底。宝玉で作った立派な杯でも、底がなくてはなんの役にも立たない。

939. 玉磨かざれば器を成さず（たまみがかざればきをなさず）

どんなによい玉でも、加工して磨いて初めて価値のある宝の器物となる。それと同じように、生まれつき素質のすぐれた人でも、学問・修養を積まなければ立派な人物になることはできない。「器」はうつわ、道具。役に立つ立派な人物にたとえる。

940. 玉磨かざれば光なし（たまみがかざればひかりなし）

どんなによい玉でも、磨かなければ輝く玉にはならないと同じように、生まれつき優れた才能を持っていても、学問や教養で鍛えなければ立派な人物になることはむずかしい、という意味。

941. 璧を懐いて罪あり（たまをいだいてつみあり）

身分不相応な宝を持つことは、災禍を招くもとなる。

942. 民の口を防ぐは水を防ぐよりも甚だし（たみのくちをふせぐはみずをふせぐよりもはなはだし）

人民の言論を圧迫することは、川の氾濫（はんらん）を防ぎ止めるよりもむずかしい。人民の憤りが爆発すると、堤防が決壊して洪水になるどころの騒ぎではない。

943. 矯めるなら若木のうち（ためるならわかきのうち）

木の枝ぶりを直そうと思えば、若木のうちがよい。人も悪いくせは、大きくなってからではどうにもならない。

944. 足るを知る者は富む（たるをしるものはとむ）

満足することを知っているものは、たとえ貧しくとも精神的には富んで豊かである。

945. 誰でも自分の荷が一番重いと思う（だれでもじぶんのにがいちばんおもいとおもう）

他人の仕事はみんな楽な仕事に見えるが、やってみれば案外自分の仕事よりむずかしいものだ。

946. 短気は損気（たんきはそんき）

短気を起こすと、うまくいくはずの物事も失敗に終わることが多くなり、結局自分が損をする、という意味で、短気を戒めた言葉。

947. 短気は未練の初め（たんきはみれんのはじめ）

短気を起こすと後悔することが多いので、未練の心が起こるようになる、という意味。

948. 断機の戒め（だんきのいましめ）

物事は途中でやめては何もならないという戒め。孟子が勉学の途中で家に帰ったとき、その母が織りかけの機の織物を裁ち切って、学問を途中でやめるのはこれと同じであると戒め、再び師のもとに帰らせたという故事。

949. 団結は力なり（だんけつはちからなり）

ひとりひとりの力は小さくても、大勢が一致団結して事に当たれば強い力を持つ。

950. 断じて行なえば鬼神もこれを避く（だんじておこなえばきしんもこれをさく）

堅く決意したうえで迷わずに決行すれば鬼神も恐れてこれを避け、何ものも妨げることは出来ない。

951. 胆大心小（たんだいしんしょう）

人は度胸は大きくもち、心は細かいことにも注意を払うべきである。

952. 単なれば則ち折れ易く衆なれば則ち摧け難し（たんなればすなわちおれやすくしゅうなればすなわちくじけがたし）

一本だけのものなら折れやすいが、大勢まとまればくじけにくい。毛利元就が三子に弓を折らせ、兄弟が仲良く結束することをさとしたのは有名。

953. 短慮功を成さず（たんりょこうをなさず）

「短慮」とは短気のこと、あせっては事を成しとげられないとのいましめ。

954. 短を捨てて長を取る（たんをすててちょうをとる）

短所や欠点を捨てて、よいところだけを選び取る。是非を見きわめすぐれた点を自分のものとする。

955. 短を護る（たんをまもる）

人に不得手なことを強要せず、人の短所や欠点をかばってやること。また、自分の短所をさらけ出さないようにすること。

956. 小さくとも針はのまれぬ（ちいさくともはりはのまれぬ）

小さいもの、ささいなものでも、ばかにできないことのたとえ。

957. 知恵多ければ憤多し（ちえおおければいきどおりおおし）

旧約聖書の言葉で、人間は知恵が増してくると、世の中の矛盾や欠陥が目についてきて、憤慨することが多くなってくるとの意。

958. 知恵と力は重荷にならぬ（ちえとちからはおもにならぬ）

知恵と体力は、あればあるだけ役に立ち重荷になることがない。あるならば沢山あるほうがよい、ということ。

959. 知恵の鏡も曇る（ちえのかがみもくもる）

運が傾いてくると、日ごろの知恵もにぶって出てこない。

960. 知恵の持ち腐れ（ちえのもちぐされ）

せっかくよい知恵をもちながら、それを活用できないでいること。

961. 知恵は小出しにせよ（ちえはこだしにせよ）

知恵は一時に出してしまうと、あとで窮することがあるから、必要に応じて少しずつ出したほうがよい。

962. 知恵は万全の宝（ちえはばんぜんのかから）

知恵はその人の一代の宝ではなく、万代までの不朽の宝である。

963. 近きを捨てて遠きを謀る（ちかきをすててとおきをはかる）

大切な目の前の仕事を忘れて、遠いさきの計画をたてるのに熱中する。順序を誤ることのたとえ。

964. 近しき中にも垣を結え（ちかしきなかにもかきをゆえ）

親しい間柄であってもお互いに礼儀は守り、なれなれしくしてはいけない、ということ。

965. 力は正義なり（ちからはせいぎなり）

力を持った者が結局は正しいことになる、という意味。

966. 力は貧に勝つ（ちからはひんにかつ）

努力をすれば、貧乏を追っ払うことができる。

967. 知己（ちき）

真の親友。自分の才能や人柄をよく知ってくれる人。また、知り合い。知人の意にも使う。

968. 竹帛の功（ちくはくのこう）

歴史に残るような大きな功績。昔、紙が発明される以前は、竹の札や帛(絹)に文字を書いたので、書物や記録・歴史のことを竹帛といった。

969. 知行合一（ちこうごういつ）

真に知ることは必ず実行が伴わなければならない、知と行とは表裏一体で、別ものではないということ。

970. 知識は力なり（ちしきはちからなり）

知識を持っている人は力を持っている。

971. 知者は惑わず勇者は恐れず（ちしやはまだわずゆうしやはおそれず）

物知りは事物の道理に通じているから、事に当たっても迷い乱れることがない。勇気のある者はこわがらないので、事に当たって恐れることがない。

972. 知者は水を楽しむ（ちしやのみずをたのしむ）

知者の臨機応変の態度は、まるで水が停滞しないで流れて行くような状態である。だから知者は水を好み愛する。

973. 父父たり子子たり（ちちちちたりここたり）

父は父としての分を守り、子は子としての分を守り、一家の者がそれぞれの分を守れば、家内は円満である。

974. 父の恩は山よりも高く母の恩は海より深し（ちちのおんはやまよりもたかくははのおんはうみよりもふかし）

父母の恩は、はかりしれないほど大きい、という意味。

975. 父は子のために隠す（ちちはこのためにかくす）

父が子の悪事をかばうのは、人の道として誤っていない、うるわしい人情である。

976. 池中の物に非ず（ちちゅうのものにあらず）

竜は平凡な魚とちがい、いつか時がくれば、池中を抜け出し、雲を呼んで天に上ることから、英雄は機会をつかめば、必ず世に現われることをいう。周瑜が劉備を批判した言葉。

977. 治に居て乱を忘れず（ちにてらんをわすれず）

いつでも万一のときの用意を忘れないこと。世の中が平和な時でも、世が乱れた時の場合を考えてその用意を忘れないようにする。

978. 治に働けば角が立つ 情に棹させば流される 意地を通せば窮屈だとかく人の世は住みにくい（ちにはたらけばかどがたつ じょうにさおさせばながされる いじをとおせばきゅうくつだ とかくひとのよはすみにくい）

理知的に動けば他人との間に角が立って穏やかに暮らせなくなり、感情に走って世間を渡れば思わぬところに行ってしまう。さりとして、自分の意地を通せば窮屈である。

979. 智囊（ちのう）

知恵の多い人。知恵の袋を持っているような人。知恵袋の意味。

980. 茶腹も一時（ちゃばらもいつとき）

お茶を飲んだだけでもしばらくは空腹をしのげる。少しばかりのものでも、口に入れば一時しのぎにはなる、ということ。

981. 忠言は耳に逆らう（ちゅうげんはみみにさからう）

忠告の言葉は気にさわることが多いが、自分の行ないにはためになる。

982. 忠臣は孝子の門より出ず（ちゅうしんはこうしのもんよりいず）

主君に忠義な人は、必ず親にも孝行な人柄である。親に孝行な子が、また主君にも忠義な臣である。

983. 忠臣は二君に事えず（ちゅうしんはにくんにつかえず）

真心込めて仕える臣下は、一人の主君にしか仕えることをしない。

984. 柱石（ちゅうせき）

頼りになる大切な人。重要な人。柱と土台石とは、家屋で最も重要な材料であるからいう。

985. 中流に舟を失えば一壺も千金（ちゅうりゅうにふねをうしなえばいつもせんきん）

流れの中央で舟が難破すると、日ごろはあまり値打ちのないつぼでさえ、浮き袋の代用となって、大事な人命を救うことができる。つまらぬものでも、時と場合によっては、平素の何倍もの値打ちが出ること。

986. 長所は短所（ちょうしょはたんしょ）

長所もあまり当てにしすぎると、そのためかえって失敗することがある。長所も別な見方をすれば、それがその人の欠点になることもある。

987. 鳥鵲の知（ちょうじゃくのち）

遠い将来のことばかり心配して、わざわいがすぐ近くにあることに気がつかないこと。

988. 提灯持ち川へはまる（ちょうちんもちかわへはまる）

人を指導したり人のお先棒をかついだりする者が失敗することのたとえ。

989. 提灯持ちは先に立て（ちょうちんもちはさきにたて）

あかりを持った者が先に立てば、あとから行く人は歩きやすい。指導者は先頭に立って模範を示せ。

990. 長範があて飲み（ちょうはんがあてのみ）

人のさいふをあてにして、失敗することのたとえ。

991. 長鞭馬腹に及ばず（ちょうべんばふくにおよばず）

強大な勢力でも及ばないところがあるたとえ。どんな長いむちでも、馬の腹までは届かない、という意味。

992. 朝令暮改（ちょうれいぼかい）

命令や法律が次々と変わって定まらないこと。朝に出した命令を夕方には変えるように、法令が出るとすぐあとから改められて、あてにならないこと。

993. ちょっと嘗めたが身の詰り（ちよつとなめたがみのつまり）

「ちよつとくらい」が我が身をどうにもならない窮地に追い込む結果になる、という意味。

994. 塵も積もれば山となる（ちりもつもればやまとなる）

ごくわずかなものでも沢山積み重なると、ついには高大なものとなる、ということ。

995. 塵を絶つ（ちりをたつ）

俗世間との縁を切る。また、走ることが非常に早くて、塵外に超然としている。転じて、徳の進むのが早いことにたとえる。

996. 沈黙は金雄弁は銀（ちんもくはきんゆうべんはぎん）

いつ、どのように沈黙しているべきかを心得ているのは、雄弁よりも大切である。

997. 追従も世渡り（ついしょうもよわたり）

世の中をうまく渡るには、時にはへつらいおべっかを言わなければならないこともあるということ。

998. 杖に縋るとも人に縋るな（つえにすがるともひとにすがるな）

みだりに人をたよるなという戒め。

999. 杖ほど掛かる子はいない（つえほどかかるこはいない）

老人にとって、杖ほどにも頼みになる子供はいない。杖のほうが子よりもたよりになる、つまり頼みがいのある子供の得がたいことのたとえ。

1000. 使う者は使われる（つかうものはつかわれる）

人を使う者は、かえって人に使われているようである。人に仕事をしてもらうには、それに伴っていろいろと心を使わなければならないことが多く、苦勞が絶えない。

1001. 使っている鍬は光る（つかっているくわはひかる）

人は自分の仕事に精出しているときが、いちばん生き生きとして、美しく見えるものだ。

1002. 月明らかに星稀なり（つきあきらかにほしまれなり）

月の光におおわれて、星がまばらに見える。転じて、大賢の出現によって、小人がけずられることのたとえ。魏の曹操が、蜀の劉備の敗走したのをそしった言葉。

1003. 月に叢雲花に風（つきにむらくもはなにかぜ）

名月には雲が、桜の花には風が、その観賞のじゃまをする。この世の中のよいことにはとかく邪魔が入りやすく、思うにまかせないことが多い、という意。

1004. 月日変われば気も変わる（つきひかわればきもかわる）

月日がたてば、人の気持ちも考え方もかわるものだ。

1005. 月日に関守なし（つきひにせきもりなし）

月日には、その運行を止める関所番はいない。月日の経つのは早い、という意味。

1006. 月満つれば則ち虧く（つきみつればすなわちかく）

物事は盛んになれば、やがては衰えるものである、というたとえ。月は満月になると、やがて次第に欠けて細くなってゆく。物事は盛りに達すれば、やがては衰えるものである。

1007. 月夜に提灯も外聞（つきよにちょうちんもがいぶん）

実際には不必要だが、世間体のためには必要なこともあるとのたとえ。

1008. 躓く石も縁の端（つまづくいしもえんのはし）

ちょっとしたことがきっかけで、知り合いになったのも縁あればこそだという意味。

1009. 問い声よければいらえ声よい（といこえよければいらえごえよい）

自分の方の出方で、相手の方の態度も変わるということ。

1010. 頭角を見ず（とうかくをあらわす）

才能や技能が目立って人よりもすぐれていること。「頭角」は頭の方、多くの中で、頭がひとときわ高く抜き出ている、という意味。

1011. 同舟相救う（どうしゅうあいすくう）

境遇の同じ者が、互いに助け合うこと。見ず知らずの者でも、同じ舟に乗り合わせて危難に遭えば互いに助け合う、という意味。

1012. 灯台下暗し（とうだいもとくらし）

「灯台」は航路標識ではなく、油ざらに灯心を入れて火をともし昔の燭台で、燭台のすぐ下は暗いことから、手近なことはかえってわからず、気が付かないでいる、という意味。

1013. 十で神童十五で才子二十過ぎれば並の人（とうでしんどうじゅうごでさいしはたちすぎればただのひと）

十歳の時神童と言われた人が、十五歳になると才子程度となり、二十歳を過ぎると平凡な人になってしまう。小さい時は教え込めば何でも覚えるが、それは真の才能ではなく、ただ人より先に覚えたというだけのことで、ほかの人だんだん追い付いてくるから、結局は普通の人と同じになってしまう、という意味。

1014. 尊い寺は門から（とうといてらはもんから）

尊い寺は門を入っただけでわかる。徳の高い人はその顔にまで賢さが表われている。

1015. 堂に入る（どうにいる）

学問や芸芸などが非常にすぐれている。申し分がない。

1016. 堂に升りて室に入らず（どうにのぼりてしつにいらす）

学問・芸術などが、相当高い水準には達しているが、まだ深い境地には達していない。「堂」は客間、「室」は奥の間。

1017. 同病相憐れむ（どうびょうあいあわれむ）

同じ病気にかかっている者同士は、互いに同情し合う、ということから、苦勞を同じくしている者は互いに助け合う、という意味。

1018. 遠きに行くは必ず邇きよりす（とおきにゆくはかならずちかきよりす）

遠くに行くには、まず近いところから歩き始める。それと同様に、物事を行なうにはそれ相当な順序を追って、手近なところから堅実に進めなければならない。一度に無理をすれば失敗する。

1019. 遠きは花の香（とおきははなのか）

身近なものは、なれてしまうとあまり立派に見えなくなり、遠くに離れたものは、離れてにおう花の香がゆかしいように、立派に思われるものである。

1020. 遠きを知りて近きを知らず（とおきをしりてちかきをしらず）

他人のことはよく見えるが、自分のことはさっぱりわからないものである。また遠大な構想はもっているが、身近な事についてはなんにもわからないこと。

1021. 遠くの親類より近くの他人（とおくのしんるいよりちかくのたにん）
遠く離れた親類よりも近くに住む他人のほうがいざという時、かえって頼りになる、ということ。
1022. 十のことは十に言え（とおのことはとおにいえ）
思うところを理解されるには、順序立てて落ちなく話すようにしなければならない。
1023. 磨がずに鍛冶を恨むな（とがずにかじをうらむな）
努力をしないで生まれつきをうらんでもしょうがない。つまり一生懸命に努力せよということ。
1024. どか儲けすればどか損する（どかもうけすればどかぞんする）
一度に沢山もうければ、一度にどっと損するようなきもくるということ。
1025. 時の代官日の奉行（ときのだい官ひのぶぎょう）
その時代その時代の権力者に従っていくのが、処世の法であるということ。
1026. 時は得がたく失い易い（ときはえがたくうしないやすい）
よい機会というものはなかなか得がたいものであり、たとえ得たとしても、また失いやすいものである。また、時を有効に使うことのむずかしさをいう。
1027. 時は金なり（ときはかねなり）
時間は貴重で金銭と同様な価値があるから、むだに使わないで、よく励み努めるべきである、という意味。
1028. 読書百遍義自ら見る（どくしょひゃっぺんぎおのずからあらわる）
どんなむずかしい書も、何度も繰り返して読んでいけば、意味が自然にわかってくる。
1029. 徳孤ならず（とくこならず）
人格者は必ず人に親しまれる。有徳者は孤立することなく、多くの人々が寄ってくる。
1030. 徳に順う者は昌え徳に逆らう者は亡ぶ（とくにしたがうものはさかえとくにさからうものはほろぶ）
すべからく道徳に従い、そしてこれを実行する者は繁栄し、道徳に反する者は滅びるということ。

1031. トクを以て珠を還す（とくをかいてたまをかえず）

外面の飾りだけに心がひかれること。「トク」は木の箱。昔、珠玉を売る人が、あまりにも立派に飾った箱に入れて売ったために、買いては中の珠の値打ちを知らず、箱だけを買って中の珠を返したという故事。

1032. 徳を以て人に勝つ者は昌え力を以て人に勝つ者は亡ぶ（とくをもってひとにかつものはさかえちからをもってひとにかつものはほろぶ）

徳行をもって人に接しこれを従える者は栄えるが、暴力をもって人を制圧する者は滅びる。

1033. 所で吠える犬はない（ところでほえるいぬはない）

どんな意気地のない者でも自分の縄張りでは強そうに振る舞う、という意味。

1034. 何処で暮らすも一生（どこでくらすもいっしょう）

どんな寂しい田舎で暮らすのも、にぎやかな都会で暮らすのも一生は一生である。つまり同じことなら住みよい所に住むほうが得である。

1035. 年が薬（としがくすり）

年をとるに従って、考えが深くなってくる。年齢は人を賢くさせるということ。

1036. 年寄りの言う事と牛の尻繫は外れない（としよりのいうこととうしのしりがいははずれない）

経験を多く積んだ人の知識やその考え方は尊いもので、正しいといわねばならない。しりがいは牛馬の車との固定具で、なかなか外れないようになっている。

1037. 年寄りの子は影なし（としよりのこはかげなし）

親が年をとってからできた子供は、がいて体が弱いということ。

1038. 年寄りの力自慢（としよりのちからじまん）

年寄りが若い者にまじって力くらべをしても、負けるのにきまっているのと同じように、似合わないことをしないほうがよいということのたとえ。

1039. 年を問わんより世を問え（としをとわんよりよをとえ）

他人に年齢を尋ねるよりは、その人の過ごしてきた人生を尋ねなさい。その人の年齢の多い少ないは問題ではなく、それまでその人がどのような人生を過ごしてきたか、その経験が問題である、という意味。

1040. 渡世は八百八品（とせいははっぴやくやしな）

職業には千差万別いろいろの種類があるということ。

1041. 土台より二代（どだいよりにだい）

大事な仕事をはじめた初代の方は、人目にははなやかに見るが、二代目の方は、そのかげにかくれて目立たない。新たに仕事を始めるよりも、それをもりたてていくほうが難しいということ。

1042. 隣の花は赤い（となりのはなはあかい）

他人の物はよく見えてうらやましく思うのが人の常である、という意味。

1043. 凶南の翼（となんのつばさ）

大志をいだいて大事業を計画すること。想像上の大きな鳥である大鵬（たいほう）が、壮大な翼を広げて、南の海に向かって飛び立つという話から出た語。

1044. 戸にも口がある（とにもくちがある）

どんなにかくしておいたことでも広まってしまうということ。

1045. 驚馬十駕（どばじゅうが）

才能の劣った者も、努力を続けるならば、賢人に追いつくことができるというたとえ。

1046. 鳶が鷹を生む（とびがたかをうむ）

平凡な親から傑出した子供が生まれること。

1047. 鳶も居ずまいから鷹に見える（とびもいずまいからたかにみえる）

鳶も威厳をもった態度・動作をしていれば、鷹に見える。起居・動作が正しければ、身分が低い者でも身分が高く見える、という意味。

1048. 富は一生の宝智は万代の宝（とみはいっしょうのたからちはばんだいのたから）

富はその人一代だけの宝で、その人が死ねばそれまでだが、知恵は自分だけにとどまるものではなく、後々の人のためにも長く役立つものである。

1049. 富は屋を潤し徳は身を潤す（とみはおくをうるおしとくはみをうるおす）

富んで財産が多くなれば自然と家の中がゆったりしてくるし、りっぱな徳を積みれば自然とその徳があらわれ身が尊くなる。

1050. 虎狼より人の口畏ろし（とらのおおかみよりひとのくちおそろし）

凶暴な虎や狼よりも、うわさや悪口を言う人間の口のほうがこわい。悪口から身を守ることの難しさをいう。

1051. 取らずの大関（とらずのおおぜき）

実際の力を見せたことのない大関ということで、見かけはよいが、少しも力量を示したこともないのに、一人えらぶっている人のたとえ。

1052. 虎の威を仮る狐（とらのいをかきつね）

有力者の権勢をかさに着て威張る者のたとえ。虎が多くのけものを捕らえて食べ、ある時、狐を捕まえた。狐は虎に「天の神が私を百獣の長にしたのである。だから私を食べると天の神の命令に背くことになりますよ。うそだと思ったら、私のあとについて来て見てごらんください。百獣は私を見てみな逃げますよ」と言った。虎が狐のあとについて行くと、けものたちはみな逃げて行った。虎は、けものたちが自分を恐れて逃げたのには気づかず、狐を恐れたものと思った、という故事による。

1053. 鳥囚われて飛ぶことを忘れず（とりとらわれてとぶことをわすれず）

だれでも自由を求めぬものはないということ。かごの中の鳥でもいつかは出て広い自由の天地に飛び立とうとしている。

1054. 鳥無き里の蝙蝠（とりなきさとのかうもり）

鳥がない村里の蝙蝠は、自分が鳥でないのに威張って飛び回る、ということから、優れた人のいない所で、つまらない者が幅をきかせて威張っていること。

1055. 鳥は古巣に帰る（とりはふるすにかえる）

すべてのものは故郷を思うということ。

1056. 取るよりかばえ（とるよりかばえ）

取って来ることを考えるより、取られないように用心せよということ。

1057. 泥を打てば面へはねる（どろをうてばつらへはねる）

人を困らせようとする、その報いが自分に返ってくるものである。

1058. 貪欲は必ず身を食う（どんよくはかならずみをくう）

欲が深すぎると、そのためにかえって身を誤ることになる。

1059. 無い子では泣かれぬ（ないこではなかれぬ）

子で苦勞しても子のあるほうがよいということ。子があればその子で苦勞するが、子がなければ、子で苦勞することはできない。

1060. 内助（ないじょ）

内部からの援助。対外的なことを推し進めて行くに際し、内側からそれをしっかり支えること。特に、妻が家庭内にいて夫の働きを助けること。

1061. 内助の功（ないじょのこう）

妻が表面に出ないところであれこれ気を配って、夫の成功のために尽くすこと。

1062. 泣いて暮らすも一生 笑って暮らすも一生（ないてくらすもいっしょう わらってくらすもいっしょう）

つらいことを泣き、楽しいことを笑うのは人情である。同じ一生を送るのに、たとえつらい人生であっても、笑って過ごせるなら、泣いて暮らすよりは笑って暮らすほうがはるかによい。

1063. 無い時の辛抱ある時の儉約（ないときのしんぼうあるときのけんやく）

金ができただからといって、いたずらに浪費することを戒めていう。

1064. 無い物は金と化け物（ないものはかねとばけもの）

お金は、お化けと同じように、あるように見えても実際は無いものである。

1065. 直き木に曲がる枝（なおききにまがるえだ）

まっすぐな木でさえ、曲がった枝がついている。正しい人にも欠点や短所があるということ。

1066. 直すは一時見るは末代（なおすはいつときみるはまつだい）

何事にもかかわらず、一時の苦勞を惜しまず正しく直しておけば、人は永久にこれをほめるに違いないということ。

1067. 長芋で足を突く（ながいもであしをつく）

油断して思わぬ失敗をすること。

1068. 長いものには巻かれろ（ながいものにはまかれろ）

自分の手に負えないほどの長いものには、いっそ反抗しないで巻かれてしまえ。権力のあ
るものや目上の人には逆らわないで、たとえ不満があってもそれをこらえ、言うなりに従
っておいたほうが無難であり得策である、という意味。

1069. 長口上は欠伸の種（ながこうじょうはあくびのたね）

長たらしい話は、聞き手を飽きさせるもとである。

1070. 長持ち枕にならず（ながもちまくらにならず）

なんでも大きくて長いものは役に立つと思うけれどもそうとはいかない。ちょうどいいの
がよい。

1071. 流れる水は腐らず（ながれるみずはくさらず）

常に活動している者には停滞がない。常に流れている水は腐ることがないが、たまって動
かない水は腐るということから。

1072. 流れを汲みて源を知る（ながれをくみてみなもとをしる）

その末を見て、その本を推し測るというので、人の行為を見て、その心の善意を知ること
ができるということ。

1073. 泣く子は育つ（なくこはそだつ）

丈夫な子は大きな声でよく泣く。大声で元気に泣く子は丈夫に育つ、という意味。

1074. 鳴く虫は捕らる（なくむしはとらる）

何か特技があるために、かえって身を誤ることがあるたとえ。

1075. 仲人口は半分に分け（なこうどぐちははんぶんに分け）

仲人さんは早く結婚話をまとめようとして、相手のよいことばかり話すので、こういう。だ
から半分ぐらいに割引きして聞いて、ちょうどよいものだという事。

1076. 仲人は宵の中（なこうどはよいのうち）

仲人は、結婚式が済んで務めが終わったら、若夫婦のじゃまにならないうちに帰ったほう
がよい。引き揚げ時を見計ることが必要なことをいう。

1077. 情けに刃向かう刃なし（なさけにはむかうやいばなし）

情けの剣に立ち向かって行くことができる剣はない。慈愛を施されては反抗できない、の意。

1078. 情けは人の為ならず（なさけはひとのためならず）

情けを人に掛けるのは、その人の為になるだけではない。栄枯盛衰は世の常、いつ他人から情けを受ける立場にならないとも限らない。人に情けを掛けておけば、いつか巡り巡って自分によい報いが返って来る。善行は結局は自分にも返って来るものだから、人には親切にせよ、という教え。

1079. 為せば成る（なせばなる）

実現が不可能に見えることでも強い意志でやり通せば必ず成就できるものだということ。

1080. 名高い骨高（なだかいほねだか）

有名であるのに実際はつまらない物だということ。

1081. 夏歌う者は冬泣く（なつうたうものはふゆなく）

働ける時に遊んでばかりいては、あとで生活にこまるということ。

1082. 夏の虫氷を笑う（なつのむしこおりをわらう）

見識が狭く、知恵の足らないものが、自分の知らないことがらをあざけり笑うことのたとえにいう。

1084. 七転び八起き（ななころびやおき）

七たび転んで八たび起きる。人生では成功失敗は激しいことゆえ、たびたびの失敗にも屈せずあくまで奮起して努力せよ。最後には成功する、という意味。

1085. 七度尋ねて人を疑え（ななたびたずねてひとをうたがえ）

物がなくなった時は、自分で何度もよく捜してみよ。よく捜しもしないで人を疑ってはならない。

1086. 七度契りて親子となり三度結びて兄弟と生まる（ななどちぎりておやことなりさんどむすびてきょうだいとうまる）

親子、兄弟の縁は遠く前世からの深い因縁によって成り立っているということ。

1087. 何事も縁（なにごともえん）

すべては縁で、縁がなければどんな親しい仲でも結ばれない。

1088. 何もせずにいる事は悪を為している事なり（なにもせずにいることはあくをなしていることなり）

人はこの世に生まれてきた以上は自ら進んで善をなさねばならない。何もしないでいることは人の道に反する悪行である。

1089. 七日通る漆も手に取らねばかぶれぬ（なのかとおるうるしもてにとらねばかぶれぬ）

かかわりあわなければ害はないこと。

1090. 名のない星は宵から出る（なのないほしはよいからでる）

つまらない者ほど好んで人の先に立ち、目立とうとするものだ。

1091. 名は体を表わす（なはたいをあらわす）

人や物に付けられた名はそのものの実体をよく表わすものだということ。

1092. 名は実の賓（なはみのひん）

名声は実質に伴ってあらわれるもので、むしろ大切なのは実質であり、名声はなくてもかまわないということ。

1093. 怠け者の節供働き（なまけもののせつくばたらき）

平素怠けている者に限って、ほかの人が仕事を休んで祝う節供の日になって、かえって働く。また、働かなければならないことをいう。

1094. 生兵法は大怪我のもと（なまびょうほうはおおけがのもと）

未熟な兵学・武術の心得は、身を守るどころか、かえって大怪我をする原因になる、ということから、少しその道を知って自信のあるつもりの方は、それに頼って、かえって大失敗する、という意味。

1095. 生物識川へはまる（なまものしりかわへはまる）

なまじっか知っている者はそれくらいは知っているとは軽率にやるから失敗する。

1096. 名よりも実（なよりもみ）

名前や見かけのよさよりも実質のよいもののほうがよいということ。

1097. 習い性となる（ならいせいとなる）

習慣が第二の天性となる。悪い習慣を繰り返していると、それが生まれつきの性格のようになること。

1098. 習うは一生（ならうはいっしょう）

人はいくつになっても、学び習わなければならないことがある。人間は一生が勉強である。

1099. 習うより慣れよ（ならうよりなれよ）

物事を習得するには、知識を教えてもらうより実地に練習を重ねる方が効果的だ、ということ。

1100. ならぬ堪忍するが堪忍（ならぬかんにんするがかんにん）

もうこれ以上は我慢できない、というところを我慢するのが真の我慢強さである、という意味。

1101. 習わぬ経は読めぬ（ならわぬきょうはよめぬ）

素養のないことは、急にやれと言われてもできるはずがない。

1102. なりわいは草の種（なりわいはくさのたね）

生活のための手段や仕事はさまざまであるがどこにでもある。

1103. 名を捨てて実を取る（なをすててじつをとる）

自分の名誉や世間の評価にこだわらず、実質的な利益につながる道を選ぶ。

1104. 名を取るより得を取れ（なをとるよりとくをとれ）

名誉よりは実利を取ったほうがよい。

1105. 難行苦行こけの行（なんぎょうくぎょうこけのぎょう）

いろいろ苦しい思いをして修行するのはおろかなことだということ。

1106. 汝自身を知れ（なんじしんをしれ）

自分自身についてよく知るべきである。自分のことを忘れるな、分際をわきまえよ、思慮深くあれ、という意味。ギリシャの賢人の言葉。

1107. 爾に出づるものは爾に反る（なんじにいづるものはなんじにかえる）

自分の身から出た行為は、その報いが自分の身に返ってくる。善悪禍福（かふく）はすべて自分自身が招いたものである。

1108. 汝の敵を愛せよ（なんじのてきをあいせよ）

人間はみな兄弟であるから、たとえあなたの敵であっても愛さなければいけない。

1109. 何でも来いに名人なし（なんでもこいにめいじんなし）

さあ何でも来い、どんなことでもやってやる、と言う人に名人はいない。器用な人は、一応何でもかなりな程度にやってのけるものであるが、そのどれをとっても、一芸に秀でた名人といえる腕前にはなっていないものである。

1110. 似合い似合いの釜の蓋（にあいにあいのかまのふた）

どんなものにも、それぞれ、それにふさわしい相手があるということ。

1111. 苦瓢にも取柄あり（にがひさごにもとりえあり）

どんなつまらぬ物にも長所があるという事。苦瓢はにがくて食えないが、ひしゃくにはなる。ひょうたんのこと。

1112. 握れば拳開けば掌（にぎればこぶしひらけばてのひら）

心の持ちよう一つで同じ物でもいろいろに変わることをたとえ。人を打つこぶしも、人をなでるてのひらも、もとは同じ手である。

1113. 憎い鷹には餌を飼え（にくいたかにはえをかえ）

手向かう者にはとくをさせてなつかせるのがよい。

1114. 憎まれっ子世にはばかる（にくまれっこよにはばかる）

人に憎まれるような者が、かえって世間では幅をきかす、という意味。

1115. 逃ぐるも一手（にぐるもいって）

進んで戦うばかりが能ではなく、逃げることも一つの戦法だということ。

1116. 濁り酒は髭につく（にごりざけはひげにつく）

そまつな物や安い物にはそれ相応の短所があるということ。

1117. 濁りに染まぬ蓮（にごりにそまぬはちす）

泥の中に生えても美しい花をつけるはすということで、周囲の汚れた境遇にそまらないで潔白な性格を保つことのたとえ。

1118. 西と言うたら東と悟れ（にしというたらひがしとさとれ）

人の言葉の裏にある意味を察する必要があるということ。

1119. 似た者夫婦（にたものふうふ）

仲の良い夫婦は性質や好みが似ているものだということ。また、そのような夫婦のことをいう。

1120. 二度あることは三度ある（にどあることはさんどある）

同じことが二度起これば続けてもう一度起こる場合が多い、ということ。

1121. 二度教えて一度叱れ（にどおしえていちどしかれ）

過失に対して、いきなり叱りつけないで、よく教えてやるのが大切で、叱るのはなるべく少なくする。

1122. 二度聞いて一度物言え（にどきいていちどものいえ）

人の話はなんべんききかえしてもよく聞くようにし、自分は口をつつしんでよけいなことはいわないほうがよいということ。

1123. 女房と味噌は古いほどよい（にようぼうとみそはふるいほどよい）

長年連れそった妻はすっかり生活になれているから、妻は古いほどよい。

1124. 女房の妬くほど亭主もてもせず（にようぼうのやくほどていしゅもてもせず）

女房がいろいろ空想して嫉妬するほど、亭主はよその女にもてないものだ。やきもちが女の本性であり、亭主も誇張して自慢しがちだから、実際は話ほどもててはいない、という江戸時代の川柳。

1125. 女房の悪いは六十年の不作（にようぼうのわるいはろくじゅうねんのふさく）

悪い妻をめとると一生の不幸である。また、自分の代だけでなく子孫の代まで悪い影響を及ぼす、という意を男の側から述べた言葉。

1126. 女房は家の大黒柱（にようぼうはいえのだいこくばしら）

妻こそは一家の中心になるものである。妻は家庭を作り、子供を育てる。

1127. 似るを友（にるをととも）

性質の似かよったものが仲良くなるということ。

1128. にわか長者はにわか乞食（にわかちょうじゃはにわかこじき）

急に大もうけをして成金になった者は、急に大損をしてまたもとの貧乏にもどるものだという事。

1129. 鶏寒うして木に登り鴨寒うして水に入る（にわとりさむうしてきにのぼりかもさむうしてみずにいる）

物によってはおのおの違う性質に基づいて行動するというたとえ。

1130. 鶏を割くに焉んぞ牛刀を用いん（にわとりをさくにいづくんぞぎゅうとうをもちいん）

小さなことを処理するには大がかりな方法を用いる必要はない、という意味。

1131. 鶏をして夜を司らしめ狸をして鼠を執らしむ（にわとりをしてよるをつかさどらしめりをしてねずみをとらしむ）

鶏にあしたの時を告げさせ、夜はねこにねずみを捕らせるということ。才能に応じて人も使うほうがよいというたとえ。「狸」はねこの異名。

1132. 人界は七苦八難（にんかいはしちくはちなん）

人間の世間にはいろいろ苦しいことや難儀なことが多いということ。

1133. 人気男に嫁がない（にんきおとこによめがない）

人気男は、あまり多くの人からやんやんといわれるので、いい気になって候補者を選びすぎたり、とかく良縁に恵まれないことをいう。

1134. 人間到る処青山あり（にんげんいたるところせいざんあり）

故郷だけが骨を埋める土地とは限らない。人間が活動する場所はどこでもある。

1135. 人間は実が入ると仰ぐ菩薩は俯く（にんげんはみがいるとあおぐぼさつはうつむく）

人間たるもの出世して地位が上がるとつい尊大になるが、稲は実るほど穂がたれる。ここでいう「菩薩」は、米の異名。

1136. 人間万事金の世の中（にんげんばんじかねのよのなか）

人間は金のためにあくせくし、追いつかわれる。何ととっても、この世の中では結局金が物を言うのだ。

1137. 忍の一字は衆妙の門（にんのいちじはしゅうみょうのもん）

忍びこらえることは立派な者になる第一歩である。

1138. 抜きつ抜かれつ（ぬきつぬかれつ）

力の伯仲する者が、互いに優位に立とうと、激しく争う様子。

1139. 抜け駆けの功名（ぬけがけのこうみょう）

戦場で、密かに陣地を抜け出し、敵を攻めて手柄を立てる、ということから、競争相手に知られないうちに事に着手し、勝利や成功を得ること。

1140. 盗人と知者の相は同じ（ぬすびととちしゃのそうはおなじ）

人は顔つきを見ただけではわからないということ。盗人も徳を積んだ高僧も人相は同じだということ。

1141. 盗人を捕らえてみれば我が子なり（ぬすびとをとらえてみればわがこなり）

事が意外でどう処理してよいか苦しむ。また、身近の者であっても油断してはいけない、という意味。

1142. 盗人を見て縄をなう（ぬすびとをみてなわをなう）

事が起こってから、慌てて対策を考える意で、事前の準備を怠っていては、いざという時に間に合わないということ。

1143. ぬるま湯につかる（ぬるまゆにつかる）

これといった不快な刺激を受けることもなく居心地がいいので、その環境に甘んじてのんきにしている。

1144. 濡れ衣を着せられる（ぬれぎぬをきせられる）

「濡れ衣」は無実の罪の意で、策略にはまり、無実の罪を負わされる、という意味。

1145. 濡れ手に粟（ぬれてにあわ）

濡れた手で粟を掴むと、粟粒がくっついてたくさん掴めることから、苦勞しないで多くの利益を得ることをいう。

1146. 濡れぬ先こそ露をも厭え（ぬれぬさきこそつゆをもいとえ）

濡れないうちは草の露に触れることさえいやがるが、いったん濡れてしまえば、いくら濡れてもかまわなくなる。男女の間でも、一線を越えてしまえば、あとはずるずると深みにはまる。また、いったん過ちを犯してしまうと、もっとひどいことでも平気できるようになる、という意味。

1147. 根浅ければ則ち末短く本傷るれば則ち枝枯る（ねあさければすなわちすえみじかくもとやぶるればすなわちえだかる）

根ががっちりして強くなっていなければ枝葉も生長しない。そして幹がいたんでは枝は枯れるのである。大台を固くせよというたとえ。

1148. 値が張る（ねがはる）

品質が良かったり、得難いものであったりして、並の物より値段が高くなる。

1149. 寝首を搔く（ねくびをかく）

相手が油断しているすきをねらって致命的な打撃を与える。

1150. 猫に小判（ねこにこばん）

猫に小判を与えても、何の感動も喜びも起こさない。貴重なものを持っていても、持ち手によっては何の価値もないことをいう。

1151. 猫の首に鈴を付ける（ねこのくびにすずをつける）

一見名案と思われることも、それを実行できる者がいなければ意味がないということ。上の立場の者などに言いにくいことを言わなければならない時、その役目を引き受けるのは誰かを論じる時に用いる言葉。

1152. 猫は虎の心を知らず（ねこはとらのこころをしらず）

小人には大人物の心はわからないというたとえ。

1153. 鼠が塩を引く（ねずみがしおをひく）

きわめて少量ずつで目立たなくても、つもりつもって大量となるたとえ。

1154. 鼠窮して猫を噛み人貧しうして盗みす（ねずみきゅうしてねこをかみひとまずしうしてぬすみす）

鼠でも追い詰められると、もっとも怖い相手の猫にまで噛みつくように、人もせっぱ詰まると、やむを得ず人の物を盗むようになる。

1155. 寝ていて人を起こすな（ねていてひとをおこすな）

自分が動かずにいて人を動かそうと考えてはならない。人を働かせようとするなら、まず率先してみずから範を示せ、という意味。

1156. 寝る子は育つ（ねるこはそだつ）

よく寝る子は丈夫に育つ、という意味。

1157. 拈華微笑（ねんげみしょう）

心から心に伝える、以心伝心。

1158. 念には念を入れよ（ねんにはねんをいれよ）

注意した上に更に注意せよ。きわめて慎重に物事を行えということ。

1159. 念の過ぐるは不念（ねんのすぐるはふねん）

なんでもかんでも念を入れすぎると、かえってまぬけたところがでるということ。

1160. 念力岩をも透す（ねんりきいわをもとおす）

昔、中国で、岩を虎だと思って矢を射たところ、矢羽根のところまで深々と刺さったという話がある。心を込めて行えばできないことはないという意味。

1161. 能ある鷹は爪を隠す（のうあるたかはつめかくす）

有能な鷹は、平素は獲物を捕まえるための鋭い爪を隠しておく。実力・才能のある人物は、むやみにそれを外部に表さず謙虚にしているが、いざという時その真価を発揮する、という意味。

1162. 能書の読めぬ所に効目あり（のうがきのよめぬところにききめあり）

薬の効能書と同じように、およそ世の中は、わからぬところにありがたみがわいてくるとの意。なんでも全部まる見えでないほうが尊いということ。

1163. 囊中の錐（のうちゅうのきり）

錐を袋の中に入れておくと、すぐにその先端が突き出てくることから、才能があれば必ず外にあらわれる、というたとえ。

1164. 能なしの口たたき（のうなしのくちたたき）

はたらきのない者にかぎって、くだらぬことをしゃべるものが多いこと。

1165. のけば長者が二人（のけばちょうじゃがふたり）

気の合わない二人で事業をくわだてても成功しないが、二人がたもとを分けた場合は、両方とも早晩りっぱに独立することができるとの意。

1166. 残り物に福がある（のこりものにふくがある）

みんながあさり残した物に、意外によい物がある。遠慮している者が、あとで案外な幸福を拾うことが多い、という意味。

1167. 後の百より今五十（のちのひゃくよりいまごじゅう）

後でたくさん貰うよりも、少なくとも今貰うほうがよい。先の大きな話より、小さくても今確実な話のほうがよいということ。

1168. 喉元過ぎれば熱さを忘れる（のどもとすぎればあつさをわすれる）

どんなに熱いものを飲んでも、喉を通りすぎればその熱さを忘れる。苦しい経験も、それが過ぎ去ればけろりと忘れてしまう。苦しい時に恩を受けても楽になると恩を忘れてしまう、という意味。

1169. 蚤の息も天に上がる（のみのいきもてんにあがる）

力の弱い者でも一心に行えばなし遂げることができるというたとえ。

1170. 背水の陣（はいすいのじん）

決死の覚悟で事に当たること。失敗すれば滅びる覚悟ですること。

1171. 売名（ばいめい）

自分の名前を世間に広めること。わざとらしいことをして、自分の名を世間に広めようとすること。

1172. 灰を飲み胃を洗う（はいをのみいをあらう）

心を改めて善人となる。灰を飲んで胃の中の汚れを洗い清める、という意味。

1173. 馬鹿と鉄は使いよう（ばかとはさみはつかいよう）

切れない鉄も使い方によって役に立つように、愚か者もそれに相応した使い方をすれば、役に立つ仕事をさせることができる、という意味。

1174. 墓に蒲団は着せられず（はかにふとんはきせられず）

親が死んでしまってから、墓石に蒲団を掛けてもむだである。生きているうちに親孝行をしなければいけない。死んでからいくら後悔しても追いつかない、という意味。

1175. 馬鹿の一念（ばかのいちねん）

愚か者でも一つ事に熱中すると、他のことに気をとられないから、素晴らしいことを成し遂げるものである。

1176. 馬鹿程怖いものはない（ばかほどこわいものはない）

世の中で何が怖いといっても、愚か者がいちばん恐ろしい。理性の欠けた人間は、常人の考えも及ばない無鉄砲なことをするから、きわめて危険である、という意味。

1177. 測り難きは人心（はかりがたきはひとごころ）

人の心ほどわからないものはない。人の心はあてにならない、という意味。

1178. 謀は蜜なるを貴ぶ（はかりごとはみつなるをたつとぶ）

計略は秘密にすることが大切である。他に漏れればその備えをされ、成功がおぼつかなくなるからである。

1179. 柱には虫入るも鋤の柄には虫入らず（はしらにはむしいるもすきのえにはむしいらず）

つねに働いている者は誘惑にまけないが、なまけている者は誘惑にまけるということ。

1180. 初め有らざるなし克く終わりある鮮なし（はじめあらざるなしよくおわりあるすくなし）

はじめは誰でもよくするものだが、最後まで完全に成し遂げる人は少ない。

1181. 始めあるものは終わりあり（はじめあるものはおわりあり）

物事には必ず始めと終わりがあり、永久にそのまま続くことはない、という意味。

1182. 始めが大事（はじめがだいじ）

どんな事でもいちばん始めにとった態度や方法がそれから後のことを決定するもので、始めを慎重にしなければならないということ。

1183. 始めに二度なし（はじめににどなし）

物事はなんでも始めが大事だが、一度きりでやり直しがきかないから慎重にやらなければならない。

1184. 始めを言わねば末が聞こえぬ（はじめをいわねばすえがきこえぬ）

はじめから順序よく説明しなければ何故そうなったのか訳がわからないこと。

1185. 恥を言わねば理がきこえぬ（はじをいわねばりがきこえぬ）

内幕まですっかり話さないと相手に通じないということ。

1186. 裸で道中はならぬ（はだかでどうちゅうはならぬ）

無一文では旅行はできない。何をするにも相応の準備が必要である。

1187. 罰は目の前（ばちはめのまえ）

悪いことをした者にはすぐ悪い報いがめぐってくるということ。

1188. 白駒の隙を過ぐるが如し（はっくのげきをすぐるがごとし）

年月のたつのが、非常に早いたとえ。人の一生は、白い馬が隙間（すきま）をちらりと走り過ぎるのが見えるような、きわめて短いものである、という意味。

1189. 八卦の八つ当たり（はっけのやつあたり）

占いは当たる場合もあれば当たらない場合もあるから、どうしようとも気にすることはないということ。

1190. 破天荒（はてんこう）

今まで誰もやらなかったことをすること。

1191. 鳩を憎み豆を作らぬ（はとをにくみまめをつくらぬ）

つまらない事にとらわれて、根本のつとめを怠り、自分が損するばかりか世間にも損害を与えてしまうこと。

1192. 鼻欠けにもえくぼ（はなかけにもえくぼ）

どんなに顔のみにくい者にも、どこか一つぐらいは人をひきつける美点があるものだという事。

1193. 花咲く春にあう（はなさくはるにあう）

時にめぐりあって世に出ること。今まで認められなかったものがようやく世に出て手腕を発揮するようになること。

1194. 話上手の聞き下手（はなしじょうずのききべた）

話すことがうまい人は、自分だけいい気持ちになってしゃべってしまい、相手の言うことを謙虚に聞くのが下手なものである。

1195. 話の蓋は取らぬが秘密（はなしのふたはとらぬがひみつ）

気をゆるしてうかつに人に話すものではないということ。

1196. 話半分（はなしはんぶん）

話は誇大になりがちであるから、事実は半分ぐらいに割引して考えよ、という意味。

1197. 花に嵐（はなにあらし）

桜の花がせっかく咲いても、強い風が吹いて散ってしまう。物事は、とかくじゃまがはいって思うようにはいかない、という意味。

1198. 鼻へ食うと長者になる（はなへくうとちょうじゃになる）

あかりをつけずに暗いところで食事をするような儉約な人は金持ちになるということ。

1199. 花も実もある（はなもみもある）

世間的に名が通っているだけでなく、それにふさわしい実質も備わっている様子。また、筋の通った行動をするとともに、義理や人情にも厚い様子。

1200. 花より団子（はなよりだんご）

見て美しい桜の花よりも、おいしくて腹のふくれる団子のほうがよい。風流よりは実利のほうがよい。外観より内容をとる、という意味。

1201. 早い馬も千里のろい牛も千里（はやいうまもせんりのろいうしもせんり）

ものごとはあわててもしかたがないということ。

1202. 早いばかりが能ではない（はやいばかりがのうではない）

物事の仕上げは早いほうがよいが、早いだけがよいのではない。粗製乱造ではだめである。

1203. 早い者に上手なし（はやいものにじょうずなし）

仕事はやくできるものは、あまり上手でないのが欠点である。

1204. 早牛も淀遅牛も淀（はやうしもよどおそうしもよど）

歩みの速い遅いのちがいはあっても行く先は同じだということで、ものごとはあわててもしかたがないということ。

1205. 早起きは三文の徳（はやおきはさんものつく）

朝早く起きると何かしらよいことがあるものである。

1206. 早かろう悪かろう（はやかろうわるかろう）

早くやってしかも上手なら理想的だが、早仕事はとかく、念が入らず手落ちもあって、どうしてもよくない結果になることが多い。

1207. 早寝早起き病知らず（はやねはやおきやまいしらず）

早寝早起きの規則正しい生活は健康のもとで、病気などは知らないで済む。

1208. 流行物は廃り物（はやりものはすたりもの）

今世間で流行しているものは、やがてすたれて、人から顧みられなくなってゆくものである、ということから、流行は一時的で長続きしない、ということ。

1209. 腹の立つ事は明日言え（はらのたつことはあすいえ）

腹が立ったからといって、それをすぐ口にだすなということ。よく考えてからいうようにすれば失敗もすくないということ。

1210. 腹の立つように家倉建たぬ（はらのたつようにいえくらたたぬ）

お金をもうけるのは容易ではないということ。倉を建てるのはそんな手軽なわけにはいかないのである。

1211. 腹は立て損喧嘩は仕損（はらはたてそんけんかはしぞん）

思ってみても得るところはないし、喧嘩をすれば損をするから、怒りは押さえなければならぬ。

1212. 腹八分目に医者いらず（はらはちぶんめにいしゃいらず）

満腹になるまで食わず、八分目ぐらいでやめておけば腹をこわす心配はなく、医者に掛からないで済む。暴飲暴食を戒める言葉。

1213. 張りつめた弓はいつか弛む（はりつめたゆみはいつかゆるむ）

緊張はいつまでも続くものではない。張りつめたものはいつかはゆるむ時が来るものである。

1214. 針を倉に積む（はりをくらにつむ）

ちりも積もれば山となるので、小金をせっせとためこむこと。

1215. 春植えざれば秋実らず（はるうえざればあきみのらず）

なんにもしないのによい報いを期待してもだめである。春には必ず種をまくのは鉄則である。原因のないところに結果があるはずがない。

1216. 繁盛の地に草生えず（はんじょうのちにくさはえず）

繁盛しているところは、人通りがはげしいから草の生えるときがない。いつも働いている者がぼけないことや、いつも使っている道具がさびつかないことのとたとえ。

1217. 膝とも談合（ひざともだんごう）

考えあぐねた時は、自分の膝でも相談相手になる、ということから、どんなにつまらないと思える人であっても相談してみれば、それなりの益はあるものだということ。

1218. 跛馬も主が褒める（びっこうまもあるじがほめる）

自分の物はなんでもよく見えることのとたとえ。

1219. 跛馬宵から乗り出せ（びっこうまよいからのりだせ）

おそいものは早くから出かけるように、早くから用意せよということ。

1220. 引越し三両（ひっこしさんりょう）

引越しをすれば何やかやで出費がかかる。じっとしていればなんでもないので少しでも動けば多少なりとも金のかかるものである。

1221. 人ある中に人なし（ひとあるなかにひとなし）

人間はたくさんいるが、立派な人物はなかなかいないということ。

1222. 一浦違えば七浦違う（ひとうらたがえはしちうらたがう）

不漁のときには近くの村はどこも同じように不漁だということ。また一人の失敗が同業者全体に悪影響をおよぼすことにもいう。

1223. 人衆ければ天に勝ち天定まれば人に勝つ（ひととおおければてんにかちてんさだまればひとにかつ）

人の勢力が強い時には、一時は正しい天理にも勝ち、悪い者が栄えることがあるが、天運が巡って世の中の道が正しくなれば、天の正道は邪悪に勝って、正しい者が栄えるようになる。

1224. 人必ず自ら侮りて然る後に人これを侮る（ひとかならずみずからあなどりてしかるのちにひとこれをあなどる）

あまり謙遜してはいけないということで、自分をひげして自分をあなどると、必ず世人からもあなどりを受けるようになる。

1225. 人喰らい馬にも合口（ひとくらいうまにもあいくち）

人にかみつような荒馬にもなれた人があるように、乱暴で手におえないような人にも、よく気の合う人があるものである。「ける馬も乗手次第」ということ。

1226. 人肥えたるが故に貴からず（ひとこえたるがゆえにたかからず）

人間のねうちは姿や様子で決めることはできない。金持ちは肥えているが、金持ちのえらいのは金をもうける働きのあるのがえらいのである。

1227. 人こそ人の鏡（ひとこそひとのかがみ）

自分の行いを改めるには、他人を手本にするのが一番よい。他人の言動を反省の材料にして、姿を写す鏡にたとえた言葉である。

1228. 一筋の矢は折るべし十筋の矢は折り難し（ひとすじのやはおるべしじゅっすじのやはおりがたし）

単独ではできないことでも大勢で力をあわせればできるということ。

1229. 一つよければまた二つ（ひとつよければまたふたつ）

人間の欲には限りがないこと。

1230. 人と入れ物は有り次第（ひとといれものはありしだい）

人と道具とは、それが多くても使い方次第では多すぎることはなく、また少なくとも使い方次第で用は足りる。

1231. 人と屏風は直ぐには立たず（ひととびょうぶはすぐにはたたず）

屏風は曲げなければ立たないのと同様に、人も正直だけでは世の中を渡っていけない。正しい道理ばかりでは生きていけないということ。

1232. 人に勝たんと欲する者は必ず先ず自ら勝つ（ひとにかたんとほつするものはかならずまずみずからかつ）

人に勝とうと思う者は、必ずまず自分のわがままな心に打ち勝たねばならぬ。克己心の大切なことを説いた言葉。

1233. 人に七癖我が身に八癖（ひとにななくせわがみにやくせ）

だれにも癖はあるもので、人を見れば癖が多いように見えるが、自分自身はもっとたくさん癖をもっている。

1234. 人に一癖（ひとにひとくせ）

たいていの人は、それぞれ何らかの癖があるものだ。

1235. 人に施しては慎みて念うこと勿れ（ひとにほどこしてはつつしみておもうことなかれ）

他人に物を与えて、これをいつまでも覚えていればつい恩着せがましくなるから、早く忘れるよう心がけなければならない。

1236. 人の一寸我が一寸（ひとのいっすんわがいっすん）

他人の欠点はちょっとしたものでも目につきやすいが、自分の欠点は大きくても見えにくいものである。

1237. 人の命は万宝の第一（ひとのいのちはばんぼうのだいいち）

人の命より貴いものはない。

1238. 人の上に吹く風は我が身にあたる（ひとのうえにふくかぜはわがみにあたる）

他人に不幸が起こったとき、ひとごとだと思って見ていることも、いつかはわが身の上にもまわってくるものである。

1239. 人の踊る時は踊れ（ひとのおどるときはおどれ）

みんながする時には自分もいっしょになってやるのがよい。

1240. 人の己を知らざるを患えず人を知らざるを患う（ひとのおのれをしらざるをうれえずひとをしらざるをうれう）

人が自分の真価を認めてくれないことは気にする必要はないが、自分が人の力量・才能を知らないことを憂えるべきである。

1241. 人の口に戸は立てられぬ（ひとのくちにとはたてられぬ）

世間の口はうるさいもので、とかくの批判を防ぐことはむずかしい。おしゃべりを封ずる手段はない、という意味。

1242. 人の事より足もとの豆を拾え（ひとのことよりあしもとのまめをひろえ）

他人のことをかれこれというよりもまず、自分のことに注意せよということ。

1243. 人の事より我が事（ひとのことよりわがこと）

他人の世話を焼くより、我が身を反省することが先である。人に同情するより自分の利益が大切である。

1244. 人の七難より我が八難（ひとのしちなんよりわがはちなん）

他人の欠点は目につきやすい。

1245. 人の十難より我が一難（ひとのじゅうなんよりわがいちなん）

他人の大難はさして気にもとめないが、自分のことだとわずかなことでも大問題としてさわぎたてる。

1246. 人の情は世にある時（ひとのじょうはよにあるとき）

その人のときめくときだけは、多くの人が人情を見せて寄ってきもするが、さて、いったん落ち目になると、人っ子ひとり寄りつかないものだということ。

1247. 人の背中は見えるが我が背中は見えぬ（ひとのせなかはみえるがわがせなかはみえぬ）

人の欠点はよく見えるが、自分の欠点はわからないということ。

1248. 人のそら言は我がそら言（ひとのそらごとはわがそらごと）

人がついたうそをそのまま受け売りすれば、今度は自分がうそをついたことになる。

1249. 人の蠅を追うより自分の頭の蠅を追え（ひとのはえをおうよりじぶんのあたまのはえをおえ）

他人のことはよく見えて気になるが、自分のこととなると同じことでも気が付かないものである。他人の欠点をあれこれ言って世話を焼くより、自分にも同じ欠点があることに気付いて、直すことが先である、という意味。

1250. 人の振り見て我が振り直せ（ひとのふりみてわがふりなおせ）

人の行動の良い点悪い点を見て、自分の行動を反省し欠点を改めよ、という意味。

1251. 人の将に死せんとするその言や善し（ひとのまさにしせんとするそのげんやよし）

人がこれから死ぬという時には、立派なことを言うものである。どんな悪人でも、これから死ぬという時には良いことを言う。だれでも死に際になると本音を吐く、という意味にも使う。

1252. 人の悪きは我が悪きなり（ひとのわるきはわがわるきなり）

他人の自分に対する態度動作の悪いのは、自分自身、その人に対する態度が悪いからである。

1253. 人は一代名は末代（ひとはいちだいなはまつだい）

人の肉体は一代限りであるが、業績や名誉は長く後世に残る。

1254. 人は生まれながらにして知る者にあらず（ひとはうまれながらにしてしるものにあらず）

人は生まれながらに智能があるわけではない。教育によってのみ、智徳をみがくことができるのである。

1255. 人は落目が大事（ひとはおちめがだいじ）

人間は、おちぶれかかったときが最も大事で、ここで頑張らないとついにはどん底へ落ちでしまう。友人たる者は落ちぶれた時にこそ援助や同情をよせるべきである。

1256. 人は陰が大事（ひとはかげがだいじ）

人はだれも見えていない所でこそ行いを慎むべきである。

1257. 人は心が百貫目（ひとはこころがひゃっかんめ）

人はその姿や容貌の美しいよりも心の美しいのが尊いのである。

1258. 人は善悪の友による（ひとはぜんあくのともによる）

人は交友の善悪によって、人柄がよくも悪くもなる、ということ。

1259. 人は情の下で立つ（ひとはなさけのしたでたつ）

人の世というものは情でもっている。血も涙もないような人になってはならない。

1260. 人は盗人火は焼亡（ひとはぬすびとひはしょうぼう）

人を見たら盗人と思え、とは情けないことだが、火のほうはどんなに用心しても、しすぎるということはない。

1261. 人はパンのみにて生きるにあらず（ひとはぱんのみにていくるにあらず）

人は、パン（食物）だけを食べて生きているのではない。人間にとって、精神生活がいかに大切であるか、ということをお教えたもの。

1262. 人は人中、田は田中（ひとはひとなかたはたなか）

人は大勢の中できたえられるのがよく、田は真ん中にある田がよい田である。

1263. 人は人我は我（ひとはひとわれはわれ）

他人は他人、自分は自分。他人のすることにかかわらず、自分の信ずるところを行なえ、という意味。

1264. 人は見かけによらぬもの（ひとはみかけによらぬもの）

人の性質や行動は、外見だけでは判断がつかない。その人の本心や人柄の善悪は、一見した印象とは必ずしも一致しない、という意味。

1265. 人はみめよりただ心（ひとはみめよりただこころ）

人間は、顔かたちよりも心の持ち方が大切である。

1266. 人は病の器（ひとはやまいのうつわ）

人間のからだは病気の入れ物のようなものである。人間のからだは複雑で故障がおりやすいためである。

1267. 人一たびして之を能くすれば己之を百たびす（ひとひとたびしてこれをよくすればおのれこれをひやくたびす）

努力を重ねれば必ず目的を達することができる。他人がすぐれた才能を持っていて、一度でできるならば、自分はそれに百倍する努力を重ねて、目的に到達する。

1268. 人増せば水増す（ひとませばみずます）

家族が多くなれば、それに応じて費用は増大するものだ。

1269. 人見て使え（ひとみてつかえ）

人を使うときには、その人の才能を見抜いて、上手な使い方をせよということ。

1270. 独りを慎む（ひとりをつつしむ）

たとえ人の見ていない所においても、悪いことをしないように自ら慎むこと。

1271. 人我に辛ければ我また人に辛し（ひとわれにつらければわれまたひとにつらし）

人が自分に辛く当たれば、自分もまた人にじゃけんにするようになる。世間は相対的なもので、相手の出方次第で自分のやり方も変わる、という意味。

1272. 人を怨むより身を怨め（ひとをうらむよりみをうらめ）

人のやり方をうらむより、まず自分のいたらぬことを思え。

1273. 人を呪わば穴二つ（ひとをのろわばあなふたつ）

人に害を与えれば、自分もまたその報いを受けるから、人を呪い殺そうとすれば、その人を埋める穴のほかに、自分を埋める穴も用意する必要がある、という意味。

1274. 人を謀れば人に謀らる（ひとをはかればひとにはからる）

他人をひっかけてやろうと悪だくみをする者は、自分もいつかは、他人にひっかけられて大損する。また、ひどい目にあうということ。

1275. 人を見たら泥棒と思え（ひとをみたらどろぼうとおもえ）

他人は信用できないものだから、すべて泥棒だと思うくらいに、まず疑ってかかれ、という意味で、「人を見たら泥棒と思え、火を見たら火事と思え」と、用心を呼びかける言葉。

1276. 人を見て法を説け（ひとをみてほうをとけ）

「人」は「人柄」の意で、物の道理を心得ている人に分りきったことを言って聞かせるのは愚かなことである一方、道理の分らない人には筋道を立てて説いてやる必要があるということ。

1277. 人を以て鏡となす（ひとをもってかがみとなす）

他人を手本として自分の行ないの善悪当否を判断する。

1278. 人を以て言を廢せず（ひとをもってげんをはいせず）

どんな人の意見でも、良い意見であれば捨てずに採用する。固定観念を固守しない意。

1279. 日に就り月に將む（ひになりつきにすすむ）

学業がどんどん進歩すること。「就」は成、「將」は進の意。

1280. 火のない所に煙は立たない（ひのないところにけむりはたたない）

火の気のないところから、煙が立つわけがない。よくないうわさが流れているが、全然事実がなければ、うわさが立つはずはない。それに近い疑わしいことがあったのだろう、という意味。

1281. 隙ほど毒なものはない（ひまほどどくなものはない）

人は毎日忙しく働いていれば何事もないが、時間があって体を持て余すようになると、ろくなことはしないものである。

1282. 百芸は一芸の精しきに如かず（ひやくげいはいちげいのくわしきにしかず）

いろいろな沢山の芸ができるよりも、たった一つでもよいから、名人芸をもったほうがよいということ。

1283. 百尺竿頭一步を進む（ひやくしゃくかんとういっぽをすすむ）

工夫をこらした上に更に工夫を加える。登りつめた百尺もある竿の上にあつて、更にもう一步進める。高い頂上を極めても、それに満足しないで更に一步上る。前進の上に前進を図る。

1284. 百川海に朝す（ひやくせんうみにちょうす）

すべての川が海に流れ込むように、もうけのあるところには多くの人々が寄り集ってくる。

「朝す」とは、参内（さんだい）する。朝貢（ちょうこう）する。また川が海に流れ込むこと。

1285. 百足の足は死して僵れず（ひやくそくのあしはししてたおれず）

むかでは足がたくさんあるから、死んでもひっくりかえらないということで、支持する者や助ける者が多いものはなかなか滅びないことのたとえ。

1286. 百日の勞一日の楽（ひやくにちのろういちにちのらく）

働くばかりが能ではなく、時には休むのがよいということ。

1287. 百人を殺さねば良医になれぬ（ひやくにんころさねばりょういになれぬ）

医者は患者を扱うことによって、腕をみがくものだということ。

1288. 百年の歓楽も一日にみつる（ひやくねんのかんらくもいちにちにみつる）

百年もの永い歓楽でも、たった一日で尽きてしまうということで、栄枯盛衰、世のならいをいったもの。

1289. 百年論定まる（ひやくねんろんさだまる）

人物や業績は、死後長い年月がたって、ようやく評価が定まるものである。

1290. 百聞は一見にしかず（ひやくぶんはいっけんにかず）

人の話を何度も聞くよりも、一度実際に自分の目で見たほうがよい、という意味。

1291. 百里来た道は百里帰る（ひゃくりきたみちはひゃくりかえる）

行きが百里ならば帰りも百里あるのは当然のことで、自分のした事にはそれ相応の報いが必ずあるものである。

1292. 百里の道は九十里が半（ひゃくりのみちはくじゅうりがなかば）

百里の道を行こうとする者は、九十里行ってやっと半分まで来たと考えよ。何事も完成に近づくと気がゆるみ失敗しやすいから、九分どおり済んだあたりを半分と心得て努力せよ、という意味。

1293. 冷や酒と親の意見は後できく（ひやざけとおやのいけんはあとできく）

冷や酒は初めは酔わないが、後でゆっくり酔いがまわる。親の意見もその当座はうるさく思うが、後になってから成る程と思ひ当たるものである。

1294. 豹は死して皮を留め人は死して名を残す（ひょうはしてかわをとどめひとはしてなをのこす）

人は死後に名誉・功績を残すべきである、というたとえ。豹が死んで美しい皮を残すように、人は死後に美名を残さなくてはならない、という意味。

1295. 屏風と商人は直ぐには立たぬ（びょうぶとあきんどはすぐにはたたぬ）

屏風は折り曲げないと倒れてしまうように、商人も正しいばかりではなく、客の意を迎えるために自分の気持ちを曲げなければならない。

1296. 火を救うに薪を投ず（ひをすくうにたきぎをとらず）

火を消そうとして薪を投げ込み、かえって火勢を盛んにするというので、根本をつきとめず、末のことに走るときは、その害がかえって一層ひどくなるものである、というたとえ。

1297. 火を見たら火事と思え（ひをみたらかじとおもえ）

ふだんの心構えと、機敏な反応・行動が大事に至るのを防ぐ。何事につけても用心が第一、という意味。

1298. 貧家には故人疎し（ひんげにはこじんうとし）

故人とは旧友のことで、昔は栄えていたがいったん貧しくなると、今までの友がよりつこうとしないこと。景気のよい所には自然に集まってくるものである。

1299. 貧者に盛衰なし（ひんじゃにせいすいなし）

金持ちは貧乏になることもあるが、貧乏人はもともと貧乏だから落ちぶれることも、これ以上貧乏におちいることもない。

1300. 貧者の一灯（ひんじゃのいっとう）

貧者が苦しい生活の中から真心をこめて供える一本の灯明の方が、世間に対する見栄でする長者の万灯よりも尊い、という意から、寄付などで、わずかな金額でも真心がこもっていることが大切だということ。

1301. 貧すれば鈍する（ひんすればどんする）

貧乏すると、利口な人でも愚かになる。食を求めてあくせくする境遇に、才知の働きも鈍り、やがては道德意識も鈍って悪事を働くようにもなる、という意味。

1302. 貧賤の交わり忘るべからず（ひんせんのみじわりわするべからず）

以前貧しい同士でつきあっていた友人は、たとえその後、富ができて仲良く交際しなくてはならない。

1303. 貧乏難儀は時の回り（びんぼうなんぎはとこのまわり）

貧乏したからといってくよくよしたり、困難にぶつかったからといって悲観してはいけない。これはだれでもある人生のめぐり合わせである。明日からまたどんなよいことが回ってくるかもしれない。

1304. 貧乏に花咲く（びんぼうにはなさく）

いつまでも貧乏ではなく、そのうちには金持ちになって栄える時が来るものである。

1305. 貧乏暇なし（びんぼうひまなし）

貧乏な者は生活に追われるので、忙しくて時間のゆとりがない。貧乏人には自由な生活を楽しむ暇がない。

1306. 富貴にして善をなし易く貧賤にして功をなし難し（ふうきにしてぜんをなしやすくひんせんにしてこうをなしがたし）

富を得て生活が楽になると、必然よい行いをしたいと思ってもすぐできるが、それが貧乏だとなかなか金銭に左右されて、物事をなしとげることがむずかしいということ。

1307. 富貴も淫する能わず貧賤も移す能わず（ふうきもいんするあたわずひんせんもうつすあたわず）

いかなる境遇においても堅い志を持っていることをいう。

1308. 富人来年を思い貧人眼前を思う（ふうじんらいねんをおもひひんじんがんぜんをおもう）

富んでいる者は余裕があるから来年のことを考え、貧しい者は日々の生活に追われて暇がなく、ただ目前のみのさしあたったことだけを思うという意味。

1309. 夫婦は合わせ物離れ物（ふうふはあわせものはなれもの）

夫婦はもとは他人だったのものが一緒になったのだから、別れることもありがちであるということ。

1310. 夫婦は二世（ふうふはにせい）

夫婦のつながりはこの世だけでなく、死後の来世まで続く、という仏教の説。

1311. 不可能という言葉は我が辞書にはあらず（ふかのうということばはわがじしょにはあらず）

どんな事でも、出来ないということはない。どんな事でも必ず出来る。

1312. 覆水盆に返らず（ふくすいぼんにかえらず）

離婚した夫婦の仲は、再び元通りにならないこと。一度失敗したことは取り返しがつかなかったとえ。

1313. 河豚にもあたれば鯛にもあたる（ふぐにもあたればたいにもあたる）
どこでわざわいが起こるかわからないということ。運が悪いときは何を食べても害になることがある。

1314. 不言実行（ふげんじっこう）
口でいうことよりも実行が大切である。

1315. 不世出（ふせいしゅつ）
めったに世に現れないほど、すぐれていること。

1316. 浮世夢の如し（ふせいゆめのごとし）
人生ははかないものである。はかないこの世は夢のようである、という意味。

1317. 布施だけの経を読む（ふせだけのきょうをよむ）
報酬のぶんだけしか仕事をしないということ。現金な仕事をこういう。

1318. 布施ない経に袈裟をおとす（ふせないきょうにけさをおとす）
僧侶は布施をくれない時には、袈裟をつけずにお経を読むが、このことから転じて、人がその報酬の多い、少ないによって労働を出し惜しみすることをいう。

1319. 不足奉公は両方の損（ふそくぼうこうはりょうほうのそん）
不平を抱きながら奉公するのは、主人も奉公人も共に損であるという意。

1320. 豚に真珠（ぶたにしんじゅ）
高価なものでも、その価値を知らない者には役に立たないことのたとえ。

1321. 二葉にして絶たざれば斧を用うるに至る（ふたばにしてたたざればおのをもちうるにいたる）
何事も初めのうちに処置しておかないと、のちには大事になって、処置に困るようになる。

1322. 二人は伴侶三人は仲間割れ（ふたりははんりょさんにんはなかもわれ）
二人なら仲良くやطيعいけるが、三人になると、とかく一人が仲間はずれになってうまく行かなくなることが多い、という意味。

1323. 淵に臨みて魚を羨むは退いて網を結ぶに如かず（ふちにのぞみてうおをうらやむはしりぞいてあみをむすぶにしかず）

淵に面して魚を欲しいと思ってただみているよりは、帰って魚を取る網を編んだほうがよい、ということから、他人の幸福をうらやむよりは、自分で幸福を得る工夫をすべきである、という教訓。

1324. 淵は瀬となる（ふちはせとなる）

世の中の移り変わりや、人の浮き沈みのはげしいことのたとえ。

1325. 鮒の仲間には鮒が王（ふなのなかまにはふながおう）

つまらないものの中では、つまらないものが大将になることで、つまらない人間の中には立派な人はいないということ。

1326. 舟に刻みて剣を求む（ふねにきざみてけんをもとむ）

時勢の移り変わりを知らずに、古い考えや習慣を固く守ることの愚かさのたとえ。

1327. 舟は船頭に任せよ（ふねはせんどうにまかせよ）

なんでもその道の専門家にまかせたほうがよいということ。

1328. 父母の恩は山よりも高く海よりも深し（ふぼのおんはやまよりもたかくうみよりもふかし）

両親から受けた恩は、何物にも比べるできないほど大きい。

1329. 踏めばくぼむ（ふめばくぼむ）

なにかすれば多かれ少なかれ、その効果があらわれるということ。

1330. 蜉蝣の一期（ふゆうのいちご）

人の命のはかないことのたとえ。「蜉蝣」はかげろうのことで、かげろうの一生は、朝生まれて夕方には死ぬほどのはかないものだが、人の一生もそれと選ぶところがない。

1331. 冬来たりなば春遠からじ（ふゆきたりなばはるとおからじ）

暗い冬のあとに、やがて明るい春が来るのは天地の理である。現在は不幸でも、前途には明るい希望が見えているから元気を出そう、という励ましの意に使う。

1332. 降らぬ先の傘（ふらぬさきのかさ）

雨が降らないうちに傘を用意しておく。先のことを考えて行動することのたとえ。

1333. 降りかかる火の粉は払わねばならぬ（ふりかかるひのこははらわねばならぬ）

自分の体の上に、降りかかってくる火の粉は、払わなければ自分の身が危険になる。人から危害を加えられる時には、自分にやましいところがないからといって、澄ましているわけにはいかず、それを防ぐ行動に出なければならない、という意味。

1334. 古川に水絶えず（ふるかわにみずたえず）

一見涸（か）れているように見える古い川も、実は地下の流れがあったりして、水が絶えることはない。もと金持ちであった家は、落ちぶれてもなお残りの財産や利権があって、たやすく尽きることはない、という意味。

1335. 古傷は痛み易い（ふるきずはいたみやすい）

古くなった傷は、治ったようでも陽気の変わり目などに時々痛む。過去に侵した悪事が何かにつけてたたる。昔の悪行が、ひょっとしたことから思い出させられ、心を悩ませられる、という意味。

1336. 古木に手をかくるな若木に腰掛くるな（ふるきにてをかくるなわかぎにこしかくるな）

先の見込みのないものをたよりにするな、将来のあるものには敬意を払えということ。

1337. 粉骨砕身（ふんこつさいしん）

力の続く限り努力すること。骨を粉にし身を砕いて働くという意味。

1338. 憤せざれば啓せず（ふんせざればけいせず）

発憤して自分から学ぶ心のない者には教えない。不熱心で積極的な学習意欲のない者には教えないということ。「憤」は、学に志し未だ十分了解しない時のいらだち。「啓」は、ひらくこと。

1339. 文は人なり（ぶんはひとりなり）

文は、その人の思想を表現したものであるから、筆者の全人格がそこに現れている。

1340. 分分に風は吹く（ぶんぶんにかぜはふく）

人にはそれぞれの身分にふさわしい暮らし方があるということ。

1341. 分別過ぐれば愚に返る（ぶんべつすぐればぐにかえる）

あまり考えすぎると、かえってつまらない考えにおちいることがある、という意味。

1342. 蚊虻牛羊を走らす（ぶんぼうぎゅうようをはしらす）

蚊やあぶのような小さな虫が、牛や羊のような大きな動物にたかって、牛や羊がかゆくて走る出すように、弱小のものが強大なものを動かすたとえをいう。小さな物でも油断をしていると、それが禍となり大害を引き起こすことがあるというたとえ。

1343. 文を以て友を会す（ぶんをもってともをかいます）

ただぼんやりと友人たちと会合しないで、どうせあうなら学問の研究のために会合したいものである。学問をもって友人と交わること。また君子の交友をいう。

1344. 平家を滅ぼす者は平家なり（へいけをほろぼすものはへいけなり）

平家は、自分の悪行のために滅びたことから、転じて、自分を滅ぼす原因は、けっきょく自分から出るものであるという意。自業自得のたとえをいう。

1345. 兵強ければ則ち滅ぶ（へいつよければすなわちほろぶ）

兵力があまり強いとそれに頼って横車を押すようになるため、ついには国を滅ぼすような結果になるということ。

1346. 兵は凶器（へいはきょうき）

「兵」は武器、という意で、武器というものは人を殺傷する悪い道具である、ということから、戦争は悪いことである、という意味。

1347. ベストを尽くす（べすとをつくす）

目標を達成させるために自分にできる最大の努力をする。

1348. 下手がかえって上手（へたがかえってじょうず）

下手な者は仕事をていねいにするから、仕上げはかえって上手だということ。

1349. 下手な鍛冶屋も一度は名剣（へたなかじやもいちどはめいけん）

沢山の中には、まぐれでよい物もできるということ。

1350. 下手の長談義（へたのながだんぎ）

話の下手な人が長々としゃべって相手が迷惑すること。また、話下手な人ほど、くどくどと長話をするものだという事。

1351. 下手は上手の基（へたはじょうずのもと）

はじめから上手な者はないのだから、下手だといってもすこしも恥ずかしくない。下手は上手になる第一歩である。

1352. 蛇は竹の筒に入れても真っすぐにならぬ（へびはたけのつつにいれてもまっすぐにならぬ）

生まれつき精神の曲がっているものは、どんなにしても治しにくいこと。

1353. ペンは剣よりも強し（ぺんはけんよりもつよし）

文は武にまさる。学問や文学の力は武力よりも偉大である、という意味。

1354. 片鱗を示す（へんりんをしめす）

才能や学識などの優れていることが、それによってうかがえる。

1355. 法あつての寺、寺あつての法（ほうあつてのてら、てらあつてのほう）

仏法があるからこそ寺があり、寺があるから仏法も保たれるということ。つまり持ちつ持たれつの関係のこと。

1356. 方位家の家潰し（ほういかのいえつぶし）

方角の吉凶にこだわってばかりいると、身動きできなくなり、その家は栄えない、ということ。

1357. 棒に振る（ぼうにふる）

今まで努力して得たものや、これから得られるはずのものなどを無駄にしてしまうこと。

1358. 忘年の友（ぼうねんのとも）

年の老幼に関係なくただ才徳をもって交わる友をいう。

1359. 忘年の交わり（ぼうねんのまじわり）

年齢の差を忘れて親しむ友人。

1360. 木鐸（ぼくたく）

世人を教え導く人。「木鐸」は、木製の舌がついている鈴。昔、法令を人民に触れる時に鳴らしたもの。

1361. 星を戴いて出で星を戴いて帰る（ほしをいただいていでほしをいただいてかえる）
朝早く星の見えるころに家を出て、そして夕方はおそく星が出てからわが家に帰こと。仕事に精勤することのたとえ。

1362. 星を戴きて往く（ほしをいただきてゆく）
朝早く出かけること。朝早く、空に星が見える暗いうちに家から出る、という意味。仕事に精励する意となる。

1363. 仏あれば衆生あり（ほとけあればしゅじょうあり）
仏があればこそ凡人もあるのである。つまり凡人がいればこそ立派な仏もあるのである。

1364. 仏の顔も三度まで（ほとけのかおもさんどまで）
円満の徳を備えている仏でも、その顔を三度まで回されれば腹を立てる、ということから、いかに無邪気な人、慈悲深い人でも、礼儀知らずな行いを繰り返されれば、腹を立てる。たび重なる侮辱はがまんできない、という意味。

1365. 仏も昔は凡夫なり（ほとけもむかしはぼんぷなり）
お釈迦様も最初から立派な聖人であったわけではない。多くの困難辛苦、修行によってようやく悟りを開いたのである。だから人間は誰でも修養を積めば立派な人になれるのである。

1366. 誉れはそしりの基（ほまれはそしりのもと）
名誉を得るとそれがもとで、人にねたまれ憎しみを買い、悪口をいわれるようになるものである。

1367. 誉人千人悪口万人（ほめてせんになんわくちまんにん）
世の中には、人をほめる者は少なく、悪口をいう者が多いということ。

1368. 誉める人には油断するな（ほめるひとにはゆだんするな）
必要以上にほめそやす人は、何か下心があるに違いないから警戒せねばならない。

1369. 吠ゆる犬は打たるる（ほゆるいぬはうたるる）
じゃれつく犬は打たれないが、ほえつく犬は打たれる。つまり人間でも、したってくる者はかわいがられるが、手向かう者はにくまれるということ。

1370. 惚れた欲目（ほれたよくめ）

惚れた者は相手の欠点までが良く見えてしまうこと。

1371. 参らぬ仏に罰はあたらぬ（まいらぬほとけにばちはあたらぬ）

関係さえしなければ、災いをうけることはないということ。

1372. 蒔かぬ種は生えぬ（まかぬたねははえぬ）

何もしないでいては、よい報いは得られない。原因を作らなければ結果は生じない、という意味。

1373. 曲がらねば世が渡れぬ（まがらねばよがわたれぬ）

正しいことばかりやっていたのでは、この世の中を無事に過ごしていくことはできない。

1374. 曲れる枝には曲れる影あり（まがれるえだにはまがれるかげあり）

形が正しければ影も正しく、形が曲がっていれば影も曲がっているということで、悪い結果はすべて悪い原因から生じるものだという事。

1375. 負けるが勝ち（まけるがかち）

当座負けておくことが、究極には勝つことになる。無理して争うより、相手に、いったん勝ちを譲った方が結果は得になる、という意味。

1376. 負けるも勝つも運次第（まけるもかつもうんしだい）

勝ち負けはその時々運によってきまることが多い。

1377. 学びて時にこれを習う亦説ばしからずや（まなびてときにこれをならうまたよろこばしからずや）

教わり学んで、それを機会あるごとに繰り返して練習すると、今まで出来なかったことが出来るようになる。なんとうれしいことではなからうか。

1378. 学ぶ門に書きたる（まなぶかどにふみきたる）

勉強の好きな人のところには自然と本が集まってくるものだというたとえ。

1379. 学ぶに暇あらずと謂う者は暇ありと雖も亦学ぶ能わず（まなぶにいとまあらずといふものはいとまありといえどもまたまなぶあたわず）

時間がないから勉強できないという者は、時間があっても勉強をしない。勉強する時間がないという者を戒めた言葉。

1380. 蝮の子は蝮（まむしのこはまむし）

親が悪い人だと、その子も悪い人であるということ。

1381. 迷わんよりは問え（まよわんよりはとえ）

自分一人であれこれと迷っているよりも、思い切って人に尋ねる方がよい。

1382. 身から出た錆（みからでたさび）

付いたり侵されたりしたのではない、刀身から生じた刀の錆のことをいい、自分のした、悪い行いや過失のために、後で自分が苦しんだり災難を受けたりすることを言う。自業自得。

1383. 身があつての事（みがあつてのこと）

命があればこそなにごとでもできるし、希望ももてる。つまり命はすべてのもとなるものだということ。

1384. 右に出づる者なし（みぎにいづるものなし）

一番すぐれている者。昔、右を上席としたから、それより右にいる者がいない、ということでは最上位という意となる。

1385. 右を踏めば左があがる（みぎをふめばひだりがあがる）

片方によくすれば、ほかの方には悪いということ、両方よくすることはむずかしいということ。

1386. 身知らずの口たたき（みしらずのくちたたき）

自分の身のほども考えないで、大きなことをいうことで、高慢ちきはたいていは、身のほど知らずであるともいえる。

1387. 身過ぎは八百八品（みすぎははっぴやくやしな）

人の商売は種々様々で数えきれないほど有る。

1388. 水到りて渠成る（みずいたりてきよなる）

時期がくれば、物事は自然にできあがる、というたとえ。元々、水が流れてくれば自然にみぞができることから、深く学問をすれば自然と道が修まり、徳が身につくことにたとえた。

1389. 自ら侮って後人之を侮る（みずからあなどってのちひとこれをあなどる）
人はどんなときでも自重が大切であるということ。

1390. 自ら勝つ者は強し（みずからかつものはつよし）
自己の心に打ち勝つことのできる者は真の強者というものである。

1391. 自ら知る者は人を怨みず（みずからしるものはひとをうらみず）
自分から深く反省して、自分の長所や短所をよく知っている者は、たとえ失意の状態にあっても、他人をうらまない。

1392. 自ら恃みて人を恃むこと無かれ（みずからたのみてひとをたのむことなかれ）
人を信じることは大切ではあるが、それよりもまず自分自身をしっかりと、他人をたのみにしてはならない。

1393. 自らなせる禍はのがるべからず（みずからなせるわざわいはのがるべからず）
天災地変による一時の災害はなんとか避けることができるが、人間みずから招いたわざわざい破廉恥は、のがれることができない。

1394. 自ら卑うすれば尚し（みずからひくうすればたつとし）
自分からへりくだって誇らない人は、他人からも尊敬され、信頼されて、自然に品格が備わってくるということ。

1395. 水清ければ魚棲まず（みずきよければうおすまず）
あまりに清廉潔白すぎると、人に親しまれないたとえ。水があまり清らかに澄みすぎていると魚が住みつかない。人も潔白厳格にすぎて人を許さないと、人が寄りつかないで孤立する、という意味。

1396. 水清ければ月宿る（みずきよければつきやどる）
心の美しい人は、神や仏が助けてくれるということ。

1397. 水積もりて魚集まる（みずつもりてうおあつまる）
水の深く豊かな所には、自然に魚が沢山集まってくるように、利益のある所には、人も自然に集まってくるものである、というたとえ。

1398. 水積もりて川を成す（みずつもりてかわをなす）

小さな流れが集まって川になる。小さなものでも沢山集まれば大きなものになる、というたとえ。

1399. 水に絵を描く（みずにえをかく）

水に絵を描いてもあとに残らない。物事ははかなく消え去ること、骨折り損のことをいう。

【類句】 脂に描き氷に鏤む / 氷に鏤め水に描く

1400. 水の泡になる（みずのあわになる）

それまでの努力や苦勞などがいっさい無駄になる。

1401. 水の恩ばかりは報われぬ（みずのおんばかりはむくわれぬ）

水からうけている恩は、はかりしれぬほど大きいものだということ。

1402. 水の低きに就くが如し（みずのひくきにつくがごとし）

物事の自然ななりゆきをいう。また、物事のなりゆきの止めにくいことをいう。

1403. 水は逆に流れず（みずはさかさまにながれず）

水が低いほうに流れるのは自然の理である。なにごと自然の理に従ってしなければできないものである。

1404. 水は三尺流れれば清くなる（みずはさんしゃくながればきよくなる）

流れている水は、三尺下へ流れれば汚れがなくなるということ。よどんでいる水は腐るが、流れている水は腐らない。

1405. 水は舟を載せまた舟を覆す（みずはふねをのせまたふねをくつがえす）

同一のものが時にはよい結果の因となり、時には悪い結果の因になることをいう。水と舟を臣と君の関係にたとえて、君をいただくのも人民だが、君を傾けるのも人民である。同一のことによって、あるいは栄えあるいは衰えること。

1406. 水は方円の器に随う（みずはほうえんのうつわものにしたがう）

人は、交友や環境によって善くも悪くもなるたとえ。水には固有の形はなく、四角な器に入れれば四角に、円い器に入れれば円くなる。人民の善悪は偽政者の善悪による、という意味。

1407. 水広ければ魚大なり（みずひろければうおだいなり）

水が広ければ魚は大きく、山が高ければ木は高くなる。人も成功するためには、働く場所がよくなければならない。上に立つ者の度量が大きくなければ、すぐれた部下は集まらない。

1408. 味噌に入れた塩はよそへは行かぬ（みそにいれたしおはよそへはいかぬ）

一見関係のないことに力を注いだように見えても、つまりは自分のためになること。

1409. 味噌の味噌臭きは食われず（みそのみそくさきはくわれず）

職業や境遇がはっきりわかるような人は、まだまだの人で奥ゆかしさが無い。

1410. 三たび肱を折って良医となる（みたびひじをおってりょういとなる）

苦勞や体験を積み重ねなければ、人間は立派になれないということ。

1411. 見たら見流し聞いたら聞き流し（みたらみながしきいたらききながし）

ちょっと見たことや、ちょっと耳にはさんだうわさを、すぐに真実であるかのように、人に伝えることは、慎まなければならない。

1412. 道を得る者は助け多く道を失う者は助け寡なし（みちをえるものはたすけおおくみちをうしなうものはたすけすくなし）

道徳にかなった行為、善行を行なった人に対しては、人々のこころはみな服従して睦まじくなるが、その徳を失えば、人心はいつしかこれに反して助けるものはなくなる。

1413. 三日先知れば長者（みつかさきしればちょうじゃ）

先の見通しのきく人は、あまり少ないということ。ほかの人より、わずか三日先のことがわかっただけでも、長者になれるということ。

1414. 三日坊主（みつかぼうず）

出家して僧になることは尊い行いとされ、先祖から末代まで、一族の者が救われるといわれているが、反面、その修行・戒律はきびしく、頭をそったものの、耐えられなくなって還俗してしまう。転じて、飽きやすく、一つのことが長続きしない人を、あざけって言う言葉。

1415. 三日見ぬ間の桜（みっかみぬまのさくら）

たった三日間見ない間に、つぼみであった桜は満開になってしまい、満開の桜は散ってしまう。物事の状態がわずかな間にどんどん変化する。また、この世のはかないことをいう。

1416. 三つ子の魂百まで（みつごのたましいひやくまで）

幼いころの性格や気質は一生変わらないものだという事。

1417. 見ては極楽住んでは地獄（みてはごくらくすんではじごく）

外部から見ていると極楽のように見えるが、実際に経験してみると地獄のような苦しみであること。

1418. 身に過ぎた果報は災いのもと（みにすぎたかほうはわざわいのもと）

身分に過ぎた幸せは災難を招く基になる、という意味。

1419. 身にまさる宝なし（みにまさるたからなし）

この世には自分よりだいじなものはないということ。

1420. 見ぬ商いはならぬ（みぬあきないはならぬ）

現品を見ないで取引することは危険である。

1421. 見ぬが心にくし（みぬがこころにくし）

見ないうちがおくゆかしいことで、見ればがっかりするものが多い。

1422. 見ぬが花（みぬがはな）

見ないうちがゆかしく見えるものだという事。

1423. 見ぬは極楽知らぬは仏（みぬはごくらくしらぬはほとけ）

見れば腹の立つことでも、見なければ心安らかにしてられる。知れば苦しいことでも、知らなければ気にならないということ。

1424. 見ぬ世の人を友とす（みぬよのひとをととす）

昔の人の書き残した書物を読んで、古人を友とする楽しみを味わうこと。古典を楽しむことをいう。

1425. 身の内の宝は朽つることなし（みのうちのたからはくつることなし）

苦勞して覚えた学問や技芸は、一生役にたつものだという事。

1426. 実のなる木は花から知れる（みのなるきははなからしれる）

その花を見れば、その木にどんな実がなるかがすぐわかる。つまり、その人のなすところを見れば、その結果のよしあしがわかるということ。

1427. 身の程を知れ（みのほどをしれ）

自分の力量・境遇を考えて、許されることか、許されぬことかの判断を誤らぬようにせよ。

1428. 実るほど頭のさがる稲穂かな（みのるほどあたまのさがるいなほかな）

内容の充実している人ほど謙虚である。

1429. 身は身で通る裸ん坊（みはみでとおるはだかんぼう）

からだ一つあれば何としても生きてゆけるという意味。人間は本来無一物で、生まれた時も裸ならば、焼かれる時も裸であるということ。

1430. 美目は果報の基（みめはかほうのもと）

顔かたちが美しいと幸福になれるということ。

1431. 美目より心（みめよりこころ）

人はその容貌が美しいことにより、心の美しいのがよい。

1432. 見る事は信ずる事なり（みることはしんずることなり）

何事も一度自分の目で見れば納得がいく。

1433. 見るは法楽（みるはほうらく）

いろいろの物を見ることは慰みであり楽しみである。「法楽」は、神楽を奏したりお経を読んだりして、神仏の心を慰め供養すること。転じて、人の心の楽しみ・慰みの意味になる。

1434. 見るは目の毒（みるはめのどく）

何も見なければ欲望も起らないが、見ればそれなりに刺激されて心も動く。不必要なものは見ないに越したことはない、という意味。

1435. 昔千里も今一里（むかしせんりもいまいちり）

すぐれた人でも年をとればそれだけ働きがにぶくなり、なんら凡人とかわりがないということ。

1436. 昔の事を言えば鬼が笑う（むかしのことをいえばおにがわらう）
もう遠い昔、過去のことを言うと鬼でも笑うということで、もうとりかえしのできないこと。

1437. 昔は今の鏡（むかしはいまのかがみ）
歴史を研究することは将来の参考になる。将来を経験することはできないから、過去を研究することによって将来の見通しを立てることができる、という意味。

1438. 昔は昔今は今（むかしはむかしいまはいま）
昔と今とは時世が違うから、今は今の時点でものを考えるべきである、ということ。

1439. 蜈蚣のあだ転び（むかでのあだころび）
むかでは足が沢山あるから、見た目はなかなか倒れそうもないようだが、それでもときには倒れることがあるということで、どんなに安全のように見えても、また慣れていることでも、しくじることがあるということのたとえ。

1440. 向こう岸の花は美しい（むこうぎしのはなはうつくしい）
よその庭に咲いている花は美しく見えるものである。

1441. 娘を見るより母を見よ（むすめをみるよりははをみよ）
母親の人柄を見れば、どんな娘かわかるということ。つまり、嫁をもらうときには娘を見なくても、母親を見ればどのような娘かわかるということ。

1442. 無用の用（むようのよう）
世の中で無用とされている物も、見方を変えれば、かえって大いに役に立つことがある、ということ。また、一見したところ用途のないようなものが、実際は人間の知見を超えた働きがある、という意味。

1443. 無理が通れば道理が引っ込む（むりがとおればどうりがひっこむ）
道理にはずれたことが公然と世の中に行われると、道理にかなったことが行われなくなる。道理に合わないことの方が、世に行われやすいことをいう。

1444. 目明千人盲千人（めあきせんになめくらせんにな）
世間には物の道理がわかる人もいれば、わからぬ人もいる、という意味。

1445. 名歌名句も聞く人の気分によって変わる（めいかめいくもきくひとのきぶんによってかわる）

だれでも知っている名歌でさえも、その人の解釈がちがうということ。人によって考えが違ふことのたとえ。

1446. 明鏡止水（めいきょうしすい）

きれいに磨かれた鏡と、よく澄んだ水、ということから、邪念がなく、落ちついた静かな心のことをいう。

1447. 明鏡も裏を照らさず（めいきょうもうらをてらさず）

どんなに知恵のある人にも目の届かぬことがある。どんなに曇りのない鏡でも裏まではうつさない。

1448. 明哲保身（めいてつほしん）

聡明で道理に従って物事を処理し、その身を全うする。広く事理に通じ、賢明なやり方で、出処進退を誤らなかつた賢人の処世術にいう。

1449. 冥土の道には王なし（めいどのみちにはおうなし）

人間ひとたび死んでしまえば、王も家来もなく、いっさいが平等であるということ。

1450. 名馬に癖あり（めいばにくせあり）

名馬といわれるほどの馬は、どこか扱いにくい癖があるものである。優れた能力を持った人は強い個性を持っているということ。

1451. 目から鱗が落ちる（めからうろこがおちる）

新約聖書に出てくる言葉で、失明していた人が突然視力を回復する意で、解けずに悩んでいた問題を解決する糸口が、ふとしたきっかけでつかめることをいう。

1452. 盲蛇に怖じず（めくらへびにおじず）

盲人は、それが蛇だということがわからないから、ちっとも恐ろしがらない、ということから、無知な者はどんなことにも恐れなくて、向こう見ずなことを平気でやる、という意味。

1453. 盲も京へ上る（めくらかもきょうへのぼる）

めくらでも世に立とうと決心して都へ出て、高い位にまで上る人もある。志をたてて一生懸命に努力すれば、成功しないはずがないということ。

1454. めだかも魚のうち（めだかもととのうち）

弱く小さくつまらないような物でも、仲間にはちがいないということ。

1455. 目で見て口で言え（めでみてくちでいえ）

実際に目で見て、それから口にせよというので、事柄を観察しないで、いたずらに口でいうものではない、という意味。

1456. 目の上の瘤（めのうえのこぶ）

目の上にあって、始終気になっている瘤のことをいい、自分より位置や実力が上で、何かにつけてじゃまになるもののことをさす。

1457. 面目躍如たるものがある（めんもくやくじょたるものがある）

いかにもその人らしいと感じられるものが言動によく表れている。

1458. 面目を一新する（めんもくをいっしんする）

古いものが改まって、すっかり新しくなる。また、新しくする。

1459. 餅は粉で取れ（もちほこでとれ）

餅をのすときには取り粉を沢山使つてのせよ、ということ、物事をなすには無理をせず、もつとも適当な方法でやるべきだということ。

1460. 餅は餅屋（もちほもちや）

餅をつくのは、道具さえあれば誰でもできそうだが、本職の餅屋がいちばんうまい、ということから、物にはそれぞれの専門家があって、素人はやはり専門家には及ばない、という意味。

1461. 持ち物は主に似る（もちものはぬしににる）

持ち物を見れば、その人の人柄が想像できるということ。

1462. 持った前にはつくばう（もつたまえにはつくばう）

立派な人だから頭を下げるというのではなく、金のある者には頭を下げる。

1463. 本木にまさる末木なし（もときにまさるうらきなし）

最初に伸びた幹以上に太く育つ枝はない。色々振り返ってみても、初めに関係のあったものより、優れた物はない。次々に妻を替えてみても、最初の配偶者が結局一番よい、という意味で使うことが多い。

1464. 求めよさらば与えられん（もとめよさらばあたえられん）

ひたすら神に祈り求めなさい。そうすれば神は正しい心と正しい信仰とを与えて下さるでしょう。自ら積極的に努力すれば、必ずそれにふさわしい結果が得られる、という意味。

1465. 戻り道は迷わぬ（もどりみちはまよわぬ）

一度失敗したことは、二度目には失敗せずにやれることのたとえ。

1466. 物いえば唇寒し秋の風（ものいえばくちびるさむしあきのかぜ）

不用意に余計なことを言うと、人の恨みを買って災いを招く。人の欠点をあげあつらったあとは、何となく自分が不快な気分になり、対人関係も気まずくなるものである、という意味。

1467. 物言わずの早細工（ものいわずのはやざいく）

あまりしゃべらず、目立たぬ者が、仕事をさせると、早くて上手だということ。

1468. 物がなければ影ささず（ものがなければかげささず）

原因がなければ結果はないことのたとえ。

1469. 物盛んなれば則ち衰う（ものさかんなればすなわちおとろう）

盛んなものは、いつかは衰えるのが自然の道理であり、世の常である。

1470. 物種は盗まれず（ものだねはぬすまれず）

遺伝はかくそうとしてもかくせないものだということ。父親のわからない子を生んでも子供を見ればすぐ相手がわかるということ。

1471. 物には七十五度（ものにはしちじゅうごたび）

物には限度があるということ。

1472. 物は言いなし事は聞きなし（ものはいいなしことはききなし）

物事はいい方次第、また聞き方次第でよくも悪くもなるものである。

1473. 物はいいよう（ものはいいよう）

同じ事柄でも、言い方によってまるで受ける印象が違ってくるものだということ。

1474. 物は考えよう（ものはかんがえよう）

物事は考え方一つで、どうにでも見ることができる。世の中の幸不幸も考え方しだい。最悪の場合を思えばあきらめがつくし、立場が違えば別の印象を受ける。一つの解釈にとらわれて苦しむことはない、という意味。

1475. 物は相談（ものはそうだん）

自分一人では解決できないことでも、だれかに相談してみれば、よい結果が生まれるかも知れないのだから、相談してみることが大切だという意で、相手に相談を持ちかける時に用いる言葉。

1476. 物はためし（ものはためし）

実際にやってみなければその結果は分からないのだから、あれこれ迷っているよりは試しにやってみるべきだということ。

1477. 物はずみ（ものははずみ）

物事は、その時のはずみや成り行きによって、思いがけない方向に進むものだという事。

1478. 物も言いようで角が立つ（ものもいいようでかどがたつ）

同じことでも話し方によって、相手に不快に聞こえて感情を害する、という意味。

1479. 桃栗三年柿八年（ももくりさんねんかきはちねん）

桃と栗は芽が出てから三年、柿は八年たてば実を結ぶ。

1480. 股を刺して書を読む（ももをさしてしょをよむ）

一心に勉強すること。

1481. 貰い物に苦情（もらいものにくじょう）

人から貰った物に対して苦情をいうこと。まことに勝手などん欲のたとえをいう。

1482. 貰った物は根がつづかぬ（もらったものはねがつづかぬ）

貰い物は長続きがしないということ。

1483. 文殊も知恵のこぼれ（もんじゅもちえのこぼれ）

どんなにえらい人でも、失策があるということのたとえ。

1484. 門前の小僧習わぬ経を読む（もんぜんのこぞうならわぬきょうをよむ）
寺の門前に住む小僧は、ひとりでに聞き覚えてお経を読む。ふだん見たり聞いたりしていると、習わなくても、知らず知らずのうちにそれを覚えるものである、という意味。
1485. 門に入らば笠を脱げ（もんにはいらばかさぬげ）
人の家に行ったら笠を脱げということ。また人は住むところの風俗習慣に従うのが、処世の法だということ。
1486. 刃から出た錆はとぐに砥石がない（やいばからでたさびはとぐにといしがない）
自分の犯したあやまちや、悪行のために自分で苦しむこと。
1487. 焼きが回る（やきがまわる）
刃物に焼きを入れる時、焼き過ぎて切れ味が悪くなる意から、年を取って、頭の働きの鈍ったり腕前が落ちたりする。
1488. 焼き餅とかき餅は焼く方がよい（やきもちとかきもちはやくほうがよい）
女の嫉妬はどちらかといえばするほうがよい。あまり夫を放任しておくよりも、嫉妬を示して制御するほうが効果がある。
1489. 焼餅焼くとて手を焼くな（やきもちやくとててをやくな）
餅を焼いても、そのために手を焼かないようにせよ。他人をねたむと、かえって処理に困るような災いを、自分に招くようになる、という意味。
1490. 焼き餅焼くなら狐色（やきもちやくならきつねいろ）
嫉妬はしすぎてもいけないし、全然しなくてもいけない。ほどよい程度にやくのがよい。
1491. 役者に年なし（やくしゃにとしなし）
役者の芸に、年齢による衰えはない。円熟の域に達して一層芸に磨きがかかり、若い者以上に若い役を演ずることもまれではなく、役者が芸の上では年を取らないことをいう。
1492. 薬石（やくせき）
「石」は、昔、病気の治療に用いた石針、あるいは石を材料とした薬剤のことで、身のためになる忠告の言葉、という意味。

1493. 野弧禪（やこぜん）

生半可な禪。禪を学び、まだ深い境地に達していないのに、自分だけは、悟り切ったような気持ちになること。

1494. 安物買いの銭失い（やすものがいのぜにうしない）

安物を買う人は銭を失うことになる。安い物はそれだけ粗悪で長持ちしないから、かえって高いものにつく、という意味。

1495. やすりと薬の飲み違い（やすりとくすりののみちがい）

ちょっと聞いたところでは似ているが、ひどい違いだということで、早合点は大間違いのもとになるということをいったもの。

1496. 瘦腕にも骨（やせうでにもほね）

弱い者にも、それ相応の意地や考えがあるから、あなどってはならないということ。

1497. 瘦馬に重荷（やせうまにおもに）

身分不相応の重い責任を負うたとえ。

1498. 八つ子も癩癩（やつごもかんしゃく）

小さい弱い者にも、それ相応の意地や考えがあるから、侮ってはいけないということ。

1499. 藪医者の手柄話（やぶいしゃのてがらばなし）

才能のないものが、手柄らしく自慢話をする事。

1500. 藪医者 of 病人選び（やぶいしゃのびょうにんえらび）

才能のないものが、とにかく仕事に難癖をつけて、仕事の種類をえり好みすることをいう。

1501. 藪の中のうばら（やぶのなかのうばら）

うばらはとげのある小さな木のこと。交わる友が悪ければ、草やぶの中のばらが曲がったりからんだりして、まっすぐに育たないように、よい人にはならないこと。

1502. 病は気から（やまいはきから）

病気は心の持ち方しだいで起こり、良くもなり悪くもなる。不可避な病気も確かにあるが、心理的原因が肉体的原因に先行して、発病したり悪化したりすることが多いことを言う。

1503. 病を護りて医を忌む（やまいをまもりていをいむ）

病気でありながら医者にかかるのを嫌がることから、自分に過ちがあるのに、人の忠告を聞こうとしないたとえ。

1504. 山が当たる（やまがあたる）

「山」は鉦山の意で、大体の見当をつけてやったことが、予想通りうまくいく。

1505. 山が見える（やまがみえる）

難関を乗り切って、先の見通しがつく。

1506. 山師は山ではて川師は川ではてる（やましはやまではてかわしはかわではてる）

熟練者は自分の技能におごりたかぶるため、案外その技能がわざわざして失敗することがある。

1507. 山高きが故に貴からず樹有るを以て貴しとなす（やまたかきがゆえにたつとからずきあるをもってたつとしとなす）

山は高いからといって貴いわけではなく、そこに木が生えているから貴いのである。人も見かけが立派だからといって貴いのではなく、人格・知恵など内容が伴って初めて立派だといえるのである、という意味。

1508. 山に躓かずして埒に躓く（やまにつまずかずしててつにつまずく）

大事は用心するから失敗しないが、小事は注意しないから失敗するたとえ。

1509. 山の芋鰻とならず（やまのいもうなぎとならず）

世の中にはとてつもない変化などというものはない。

1510. 山を当てる（やまをあてる）

鉦脈をうまく掘り当てる意から、万一の可能性をねらってやったことがうまくいく。

1511. 夜郎自大（やろうじだい）

自分の力量を知らない人間が、仲間の中で大きな顔をして、いい気になっていること。「夜郎」は、昔、中国の西南部にいた野蛮人。「自大」は、自分を偉いと考えること。

1512. 唯我独尊（ゆいがどくそん）

自分だけ優れていると自負すること。ひとりよがり。

1513. 勇者は懼れず（ゆうしゃはおそれず）

論語にある言葉で、「智者はまどわず、仁者はうれえず、勇者はおそれず」という。まことの勇者は何事もおそれない。

1514. 勇者は諂えるがごとし（ゆうしゃはへつらえるがごとし）

本当の大人物たる者は、その仕える主君に対して、おごりたかぶることなく、いつも非常に謙虚であることをいう。

1515. 有終の美（ゆうしゅうのび）

最後までしとげて、立派な成果をあげること。しめくくりが立派なことをいう。

1516. 雄弁は銀、沈黙は金（ゆうべんはぎんちんもくはきん）

上手によどみなく話すことは大切であるが、いつ、どのように沈黙しているべきかを、心得ているのは更に大切である、ということ。

1517. 勇名を馳せる（ゆうめいをはせる）

勇敢なことをやって世間に名が知れ渡ること。多少皮肉な気持ちを込めて用いることがある。

1518. 行くに徑によらず（ゆくにこみちによらず）

道に行くのに大通りを歩き、近道を通るようなことはしない、ということから、いつも正しい道を行って、よこしまな行為はしない、という意味。

1519. 夢が覚める（ゆめがさめる）

何かに心を奪われ、他のことを考える余裕のなかった人が、それではいけないと気づき、本来の自分のあり方に立ち戻る。

1520. 夢は逆夢（ゆめはさかゆめ）

夢と事実は、反対になって現れることが多いから、悪い夢を見ても気にすることはない。不吉な夢を見た時に慰めという言葉。

1521. 夢を追う（ゆめをおう）

実現の可能性がないに等しいにもかかわらず、こうしたいと思う理想を追い求める。

1522. 夢を託す（ゆめをたくす）

こうしたいと思いながらも実現できなかったことが、代わりに他の人によって成し遂げられることを期待する。

1523. 夢を見る（ゆめをみる）

何か心を奪われたりとりとめもない空想にふけったりして、なすべきことを忘れた状態になる。

1524. 湯を沸かして水にする（ゆをわかしてみずにする）

せっかく骨折ったのにそれをむだにすることのたとえ。また努力したのにぜんぜん効果があがらないこと。

1525. よい内から養生（よいうちからようじょう）

前もって用心すれば、しくじらないということ。

1526. 酔いが回る（よいがまわる）

酒によって、正常な判断力や運動感覚が失われた状態になる。

1527. 良い事は真似でもせよ（よいことはまねでもせよ）

人真似はよくないとされるが、良いことは人の真似でもよいからせよ、という意味。

1528. 用心に怪我なし（ようじんにけがなし）

用心さえしていれば、失敗することはないということ。

1529. 用心は勇氣の大半なり（ようじんはゆうきのたいはんなり）

事をなすのに十分用心するのは、勇氣の現われであって、卑怯なふるまいではない。勇氣のある者こそ用心して事に当たるものである、という意味。

1530. 要領がいい（ようりょうがいい）

要点を的確にとらえ、能率よく物事が処理できる意から、うまく立ち回り、自分の立場を有利にする才能がある様子。

1531. よくしたもの（よくしたもの）

世の中は不合理なことばかりのように見えて、案外うまく釣り合いがとれているものだという事。

1532. 欲には目見えず（よくにはめみえず）

欲に目がくらんで物の道理がわからなくなる事。

1533. 欲を言え（よくをいえ）

今のままだも不足はないが、なお一層望ましい状態を期待するとすれば。

1534. 欲を掻く（よくをかく）

ほどほどのところで満足すべきなのに、もっともっとと欲張る。

1535. 余慶（よけい）

祖先が善いことを行なった報いとして、子孫の代に来る吉事。

1536. 葦の髄から天のぞく（よしのずいからてんのぞく）

蘆の茎の細い管の中から天を見ても、全体を見ることができない。狭い見聞に基づいて大局を判断することはできない。見識の狭いことをいう言葉。

1537. 余所の花はよく見える（よそのはなはよくみえる）

何事につけても、よその物はよく見えてうらやましいのが人の常である。

1538. 四つの目は二つの目より多くを見る（よっつのめはふたつのめよりおおくをみる）

何事でも、一人だけで見たり判断したりするよりは、大勢で見たり判断したりするほうが確かである。

1539. 世に逢う（よにあう）

時機を得て世間にもてはやされたり得意な時を過ごしたりする。

1540. 世に入れられる（よにいられる）

その存在が広く世間に認められ、人々にもてはやされたり、高い評価を得たりする。

1541. 世に聞こえる（よにきこえる）

世間に知らぬ人がないほど、広く知れ渡る。

1542. 世に出る（よにでる）

一人前の社会人として、会社・役所などに勤めたり商売を始めたりなどする。また、立身出世する意にも用いる。

1543. 世に問う（よにとう）

論説や芸術作品などを通して、世間に何らかの問題を提起し、人々の反応や評価を得ようとする。

1544. 世の中は九分が十分（よのなかはくぶがじゅうぶ）

世の中の事は希望通りにはいかないものだから、望んでいる事が九分通り達せられれば、まずもってこの上なしというものである。

1545. 世の習い（よのならい）

人の世の常で、だれしも一度は経験しなければならないようなこと。

1546. 読みが深い（よみがふかい）

書物などを読んで、言外に込められた意味まで読み取れるほど理解力に優れる意で、物事の表面に現れている部分から隠された内部を的確に察知したり、現状から今後の動向を十分に見通したりする様子を現わす。

1547. 由らしむ可し知らしむ可からず（よらしむべししらしむべからず）

すべての人民に、理解させることは困難である。人民は為政者の定めた方針に従わせることはできるが、数多い人民のすべてになぜこのような道を定めたかという理由をいちいち知らせることは難しい、という意味。民衆のすべてに知らせることは常に困難である。

1548. 寄る年波には勝てぬ（よるとしなみにはかてぬ）

若い者に負けないつもりでも、年齢相応に体力や気力が衰えてくるのは、どうしようもない、という意味。

1548. 弱き者よ汝の名は女なり（よわきものよなんじのなはおんななり）

女とはなんと心変わりのするもろいものであるろうということ。シェークスピアの「ハムレット」で、ハムレットの母親ゲートルードが、夫の死後まもなくその弟のクローディアスと結婚したことについて、ハムレットが言うせりふ。

1549. 弱みに付け込む（よわみにつけこむ）

相手の弱点や欠点を見抜き、うまくそれを利用して自分の利益を図る。

1550. 弱り目に祟り目（よわりめにたたりめ）

悪い条件の時に災いが発生する。不運な上に不運が重なることをいう。

1551. 世を去る（よをさる）

死ぬという意の遠回しな言い方。

1552. 世を捨つれども身を捨てず（よをすつれどもみをすてず）

命ほど惜しいものはないということ。

1553. 世を捨てる（よをすてる）

出家したりどこかに身を隠したりして、俗世間とのつきあいを断つ。

1554. 世を拗ねる（よをすねる）

世の中が自分の思い通りにならないことに不満を抱き、ことさらに反社会的な態度を取ったり無関心を装ったりする。

1555. 世を背く（よをそむく）

俗世間を逃れて隠遁（いんとん）する。特に、出家すること。

1556. 我が仏尊し（わがほとけたとし）

身びいきをすることをいう。自分の大切にしているものは他人のものよりも尊いと思うこと。

1557. 脇道に逸れる（わきみちにそれる）

本来進むべき道から外れ、意外な方向に進む。好ましくない道に足を踏み入れたり、話が本筋から逸れたりした場合に用いる。

1558. 脇目も振らず（わきめもふらず）

よそ見もしないで何かをする、という意味で、一つのことに心を集中して打ち込む様子。

1559. 湧く泉にも水涸れ（わくいずみにもみずかれ）

どんなに沢山あるものでも、なくなる時はあるということ。

1560. 禍は口から（わざわいはくちから）

災いは自分の口から生まれるものである、ということから、自分のちょっとした不注意な発言が、災いの種になることが多いから、物を言う時には慎重にせよ、という意味。

1561. 禍も三年たてば用に立つ（わざわいもさんねんたてばようにたつ）

現在は災難となるものであっても、時がたてば幸せの種となることがあるということ。

1562. 禍を転じて福となす（わざわいをてんじてふくとなす）

災難をうまく処置して、かえって幸福を得るようにすること。

1563. 和して同せず（わしてどうぜず）

人とのつきあいは、調和するように心がけるべきではあるが、むやみに他人の意見に引きずられたり妥協してはいけない。協調は大切であるが、道理に外れたことは、あくまでも反対しなければいけない、という意味。

1564. 私としたことが（わたしとしたことが）

間違いや失敗をした時、自分としては常日ごろそのようなことがないよう気をつけていたはずであったのにと、意外さと悔しさを表わす言葉。

1565. 渡る世間に鬼はない（わたるせけんにおにはない）

世間には薄情な人ばかりであるというわけではなく、情け深い人もいる、という意味。

1566 詫びを入れる（わびをいれる）

自分の非を認め、相手に謝る。

1567. 笑いが止まらない（わらいがとまらない）

予想以上に大きな利益を得るなどして、うれしくてたまらない様子。

1568. 笑い事ではない（わらいごとではない）

第三者から見れば笑って済まされるようなことでも、当人には深刻な問題である様子。

1569. 笑いは人の薬（わらいはひとのくすり）

ほどよく笑うことは体のためによいということ。

1570. 笑う門には福来たる（わらうかどにはふくきたる）

いつもにこにこしている人、笑い声の絶えない家には、自然と幸運がやってくる、という意味。

1571. 悪い親もいい子を望む（わるいおやもいいこをのぞむ）

親は悪人でも、我が子だけはよい人間になることを望むものである。我が子が立派な人間になることを願うのは、世の親の常であってたとえ悪人でも例外ではない、ということ。

1572. 我思う故に我在り（われおもうゆえにわれあり）

自分は考えるが故に存在する。考える自我がすべての哲学の基礎である、という意味。

1573. 和を以て貴しとなす（わをもってとうとしとなす）

何事をなすにも、人々相和して行うのが最も貴いのである。

1574. 楽あれば苦あり（らくあればくあり）

楽をした後には苦勞がある。また、楽をしていると、後で苦しい思いをしなければならぬようになる。人生には、楽しいこともあれば、また、苦しいこともあり、一概には言い切れない。常に先々のことを考えよ、という意味。

1575. 烙印を押される（らくいんをおされる）

「烙印」は、昔、刑罰として罪人の額などに押した焼き印のことで、ぬぐい去ることのできない不名誉な評価を受ける、という意味。

1576. 楽は苦の種 苦は楽の種（らくはくのとねくはらくのとね）

楽は次に苦を生む種であり、苦は次に楽を生む種である。苦と楽とは相伴ってくるものであるから、楽だからといって油断するな、苦しいからといって希望を捨てるな、という意味。

1577. 洛陽の紙価を貴む（らくようのしかをたかむ）

著書の売れ行きがよいこと。

1578. ラストスパートをかける（らすとすぱーとをかける）

目標達成を目前に控え、いよいよ最後だというので、全力を出して頑張ること。

1579. 落下枝に上り難し 破鏡再び照らさず（らっかえだにのぼりがたしはきょうふたたびてらさず）

散った花は咲いていた枝に返らず、割れた鏡は、二度と元のようにまとまってものを映さない、ということから、一度別れた夫婦は、二度と元通りにならないことをいう。

1580. 立派な口をきく（りっぱなくちをきく）

それだけの実質を備えていないのに、偉そうなことを言う。

1581. 理詰めより重詰め（りづめよりじゅうづめ）

理屈をくどくどと聞かされるより、重詰めでももらった方がありがたいということ。

1582. 竜馬の躓き（りゅうめのつまずき）

ずば抜けて優れた馬でも時には、つまずくことがあるもので、どんな賢い人にも失敗があるというたとえをいう。

1583. 獅ある猫は爪をかくす（りょうあるねこはつめをかくす）

実力のある者ほど、平生はそれをあらわさないことのたとえ。

1584. 凌雲の志（りょううんのこころざし）

「凌雲」は「雲を凌ぐ」と読み、雲よりも高く抜け出る、という意味で、俗世間を高く超越した心。世の中の煩わしさから高く抜け出ることをいう。

1585. 両手に花（りょうてにはな）

二つの価値のあるものを一人占めにする。多く、同時には得がたいものを得た場合に言う。

1586. 両天秤をかける（りょうてんびんをかける）

一方が駄目になっても困らないように、同時に二つのものに働きかける。

1587. 両刃の剣（りょうばのつるぎ）

両側に刃のついた剣は振り上げた時に自分をも傷付ける危険があることから、一方では非常に役に立つが、使い方を誤ったりすると害になる危険性も持っているというもの。

1588. 両方をきいてさばけ（りょうほうをきいてさばけ）

争いをさばくときは、両方の言い分をよく聞き、決して片手落ちになってはならないということ。

1589. 良薬は口に苦し（りょうやくはくちににがし）

自分の身のためになる忠告は、耳に聞きづらい、というたとえ。良い薬は苦くて飲みにくい病気にはよく効く。

1590. 類が無い（るいがない）

似ているもの、同じようなものが他にはない様子。

1591. 類は友を呼ぶ（るいはともをよぶ）

同じ傾向や志、趣味を持った者は、自然にお互いに呼び寄せ合う。善良な人のところには善良な人が寄り、悪人は悪人同士で集まる。

1592. 類を以て集まる（るいをもってあつまる）

同じ仲間同士が自然に集まるようになること。善い人の周囲には、特に集めなくとも善良な人が集まり、悪人は悪人で自然と仲間になる。

1593. 瑠璃も玻璃も照らせば光る（るりもはりもてらせばひかる）

瑠璃も玻璃も、物は違っても、光を受ければともに美しく輝くことから、優れた者は優れた者の影響を受けて、それぞれの真価を発揮する、という意味。

1594. 礼過ぐれば諛いとなる（れいすぐればへつらいとなる）

礼儀も度を過ぎればへつらいとなり、かえって人に悪感情を与えることになる。過ぎたるは及ばざるがごとしである。

1595. 礼は急げ（れいはいそげ）

返礼はできるだけ早くするのがよい。機会を失うと間が抜けてしまい、また、きっかけがなくなって、気まずい思いをする、という意味。

1596. 礼はかえって無礼の沙汰（れいはかえってぶれいのさた）

あまりつまらぬ遠慮はするなということ。遠慮は相手のせつかくの好意を無にすることになり、かえって失礼になる。

1597. 礼も過ぎれば無礼になる（れいもすぎればぶれいになる）

馬鹿丁寧なのは、かえって相手を馬鹿にすることになり失礼である、という意味。

1598. レールを敷く（れーるをしく）

順調に物事が進むように、前もって対策を立てたり準備をしたりすること。

1599. 歴史は繰り返す（れきしはくりかえす）

およそ世の中の過去にあったことは、また同じような経過をたどって再び起こるものである、という意味。

1600. 老骨に鞭打つ（ろうこつにむちうつ）

年を取って気力・体力共に衰えた自分を励まして、何かのために努力しようとする事。

1601. 老少不定（ろうしょうふじょう）

老人が必ずしも先に死ぬとは限らず、少年が長生きすると決まっていない。人間の寿命は定まらない、はかないものである、という意味。

1602. 蠟燭は身を減らして人を照らす（ろうそくはみをへらしてひとをてらす）

自分のことは犠牲にして、他人の幸福のためにつくすことをいう。

1603. 隴を得て蜀を望む（ろうをえてしよくをのぞむ）

一つの望みをとげて、更にその上を望むこと。欲にはきりがないうこと。

1604. ローマは一日にしてならず（ろーまはいちにちにしてならず）

偉大なローマ帝国は、長期にわたる努力と歴史の結果建設されたもので、すべて大きな事業は、長い年月を必要とする、ということから、物事は一朝にしては成らない、という意味。

1605. 艚櫂の立たぬ海はない（ろかいのたたぬうみはない）

どんな困難なことでも、やってやれないことはない。

1606. 論に負けても実に勝つ（ろんにまけてもじつにかつ）

実利のあるほうを取ったほうがよいということ。つまり議論では負けても、得のいくほうがよいということ。

1607. 論より証拠（ろんよりしょうこ）

物事を明らかにするには、口先だけで議論するよりも、実際に証拠を示すほうが早いし正確である、という意味。

厳選自己啓発ことわざ集

名言思想学会会長 江川剛史